

---

# 神村律子自選短編集

神村律子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神村律子自選短編集

### 【Zコード】

Z75801

### 【作者名】

神村律子

### 【あらすじ】

神村律子の今までの作品からの自選短編集です。宜しきつたら覗いて下さい。

人間を「慎重派」と「つっかり派」に分けるとすれば、私は間違いないく「つっかり派」だ。

私を知る人間が全員同意するだらう。

そんな私が慎重に事を運ばなければならない「仕事」を仰せつかった。

「つっかり」ではすまない「仕事」だ。しつじれば大変な事になる。

本当に私にできるのか？　何度も自問した。答えは「NO」だつた。

誰かに代わつてもらえないだろうかと考えたが、今更それもできない。

他者に頼むには時間がないのだ。決断を迫られた。

やるしかない。逃げれば私は一度と「仕事」をさせてももらえない。

重い足取りで現場に向かう。

思いの他早く着いてしまつた。しばし考え込む。

ハツと我に返り、作業に取り掛かつた。時間がないのだ。悩んでいる暇はない。

ターゲット確認。風もない。誰も私の存在に気づいていない。

ゆっくりとトリガーハンマーをかけ、祈りながら引いた。

プシュー……。

小さな発射音が聞こえ、次の瞬間ターゲットが倒れるのが見えた。上出来だった。私はプレッシャーに打ち勝ち、「仕事」を完遂したのだ。

すぐさまその場から駆け出す。追つ手が来るのは時間の問題。

逃走経路の確保はしてある。まず捕まる事はないだろ。

その時携帯がなった。今回のクライアントからだ。早速情報が入ったのだろう。

私はニヤリとして出た。

「大変だ。何者かが我が党の大統領候補を狙撃した。貴方への依頼を変更したい。狙撃者を見つけ出し、始末してくれ」

## その日来る

怖い。やり切れない。何であんな事をしてしまったのか？

後悔ばかりが頭の中をよぎる。

今日は「死刑執行」の日。遂に来てしまった。

一日一日とその日が近づいて来るのを恐れていた。

その日が来る前に死んでしまいたいほど恐ろしかった。

しかし私が悪いのだ。誰のせいでもない。全て自分の責任だ。

もうどうしようもない。諦めるしかない。

今日がその日。係官が歩いて来る足音が聞こえる。

その冷たい響きはまさに「死神の笑い声」に聞こえた。

ガチャンと重い鉄の扉が開く。

「時間です」

係官の無機質な声がした。私はその声にビクッとした。

「さあ、立つて」

私は顔を上げて係官に従い、死刑執行室に向かった。

何度も足がすくんで動けなくなつた。

そのたび係官が私を抱き起こすようにして歩いた。

執行室の前まで来ると、私は暴れた。

「嫌だ！ 絶対に嫌だ！」

係官は遂に応援を呼び、私は引き摺られるようにして中に入った。

「やっぱり嫌だ！ 死刑なんて嫌だ！」

私はまた尻込みして暴れた。係官の一人が私を羽交い絞めにした。

私は抵抗するのをやめ、脱力した。

「嫌なんだ。死刑は嫌だ。嫌だ」

それでも言葉では抵抗を続けた。

「今更そんな事を言われても困る！ あんたが望んだことだらう？」

業を煮やした係官の一人が怒鳴つた。

「あんたはあんたの奥さんを殺した犯人をその手で殺したいと望んだんだ。早く電気椅子のスイッチを押しなさい！」

## 巡る思い

私は裕福な家庭に生まれ、「お嬢様」とメイドや執事に言われる生活をしていた。

学校も幼稚舎から始まる私立の有名校に入学した。

自分で言うのも可笑しながら、成績は常に学年一番、クラブ活動にも積極的に参加し、都大会、全国大会と勝ち進んだ。

当然のことながら、就職は父親の経営する商社に入社、「コネで入った」と言われるのが嫌なので周囲の気遣いを一切排除し、一営業から始めた。

生来の社交性と積極性から、私は常に社内で営業成績トップの座を守り続けた。

女のくせにと陰口を叩かれる事もあった。

しかしそれをさらに飛躍のバネにして、組織の上へと昇った。

気がついてみると営業一課の課長になっていた。二十代での課長就任は破格だった。

そのため、「コネだ」と囁かれた。悔しかつたが気にせず仕事に打ち込んだ。

その甲斐もあって、今まで私に批判的だった人達とも和解し、課はまとまつた。

そんな仕事一筋の私だったが、ある時燃えるような恋をした。

人事部の人だった。

今まで恋愛に全く興味がなかつた私が、自分でも不思議なくらいのめり込んで行つた。

相手も私の積極さに最初は戸惑つていたが、やがて私達は結婚を意識する仲になつた。

私は父に彼を紹介し、父も彼を気に入つてくれた。

式の日取り、新居の建築と次々に決つた。幸せだった。信じられないくらい。

???

私は何故幼少の頃からの事をこんなにいろいろと思い出しているのだろう?

昨日、確か彼の浮気が発覚し、相手の女性が妊娠していると知つて……。

思い出した。私は何もかも嫌になつて会社の屋上から飛び降りたのだ。

ああ、地面が迫つて来る……。

俺は死んだ。

死因はわからない。

何故死んだとわかったのかと言つと、死神が現れたからだ。

死神といつと黒マントに骸骨で大鎌を持っているイメージがある。しかし俺の前に現れた死神は、会社の営業マンにしか見えなかつた。

「私、天国の新死人担当の死神です。どうぞよろしく」

「ああ」

愛想良く名刺を差し出されたが、何かシックリ来ない。

死んだ人間に對してそんな陽気な挨拶はどうなのかと思った。

「新死人て何?」

俺は名刺を見たままで営業マンにしか見えない死神に尋ねた。

「ああ、死んでから一十四時間以内の方の事です」

「なるほど。ところで俺は何で死んだんだ?」

「世の中知らない方がいい事も」ございまして

妙に嬉しそうに言われたのが癪に障る。

「何だ、そんな悲惨な死に方なのか？」

「はい、ある意味」

「ある意味？ どうこうことだ？」

俺は死神を睨んだ。それでも奴は一瞬一瞬しながら、

「貴方は会社の飲み会で悪酔いして、トイレで戻している時に足を滑らせて……」

「ああ、もういい！」

俺はそれ以上詳細を聞くつもりはなかつた。確かに「ある意味悲惨」だ。

「それでですね、今後のことをご検討していただきたいと思いまして」

「今後の事？ 天国か地獄かっていう事か？」

俺が真顔で尋ねると、死神は大笑いして、

「いえいえ。貴方は天国に行きます。私は天国所属ですから。そういうことではありますん」

「やつか。なるほど」

「『』希望なら、地獄所属の死神を呼んで、体験ツアーもできますが」

俺は目を丸くした。

「体験ツアー？ そんな気軽に行けるのか、地獄つて？」

「はい。でも内容はハードでして、大概の体験者の方の『』感想が『死ぬかと思った』でして」

俺は頭が痛くなりそうだった。『』いつは本当に死神なのかと疑いたくなつた。

「これからどうすればいいんだ？」

「まずは『』コースを選択していただきます。上級、中級、初級と『』ぞいまして」

「試験でも受けれるのか？」

俺は死んでも勉強はしたくなつた。すると死神は、

「違います。試験では『』やいません」

とイラつて愛想笑いで答えた。

「上級は神になる『』コース、中級は天国の高級官僚になる『』コース、初級は死神になる『』コースです」

「随分と開きがあるな。それにしても、天国も官僚支配なのか？」

「はい。但し官僚がいるのは日本管轄の天国だけで、他国管轄の天国にはおいません。その代わり独裁体制の天国もあります」

死神は申し訳なさそうに、でも嬉しそうに話した。

「どのコースにお進みになりますか？」

「その前に内容を説明してくれ」

「それもそうですね」

死神は「しまった」という仕草をしたが、まるで昭和の芸人だった。

「こんな感じになりますね」

大きな黒いバッグの中からパンフレットのようなものを取り出し、俺に手渡した。

「神のコースは……。毎日難行苦行か。神になれば年棒が……。凄いゼロの数だな」

「はい。でも選択された方で実際神になれた方は全体の〇・〇〇一%ですね」

「そりだらうな。俺はこんな難行苦行はいくら積まれてもしたくな  
い」

そう言いながら次に「高級官僚コース」を見る。

「神に比べれば年棒は安いが、結構な収入だな。でも何だこの、ハイリスクハイリターングていうのは？」

死神は揉み手をしながら愛想笑いをし、

「誘惑が多いという事です。神コースの難行苦行は官僚が監視・判定するのですが、贈収賄が後を絶ちません」

「死んでもそれか。で、収賄がわかるとどうなるんだ？」

「地獄行きです」

「それでも収賄する奴の神経がわからないな」

「しかし、それを逃れるために地獄でも収賄が後を絶ちません」

「生きている人間の社会より酷いな」

「所詮天国も地獄もその大半は人間ですから」

俺は溜息を吐いて「死神コース」を見た。

「これには特にコメントがないが……。どういづコースなんだ？」

「今私がしているような事が主な仕事です。要するに営業ですね」

俺はうつむき顔で、

「死んでも営業かよ。仕方ないな。死神」ースにするか

「ありがとうございます。では早速研修に行つてもらいます」

俺は驚いた。

「おいおい、いきなり研修かよ。事前説明会とかないのか?」

「ありません。事前説明会の代わりが今の私の話ですから」

「そうか。で、どこに研修に行くんだ?」

「たつた今死んだ人がいるんです。その人のところに行つて私と同じ事をして下さい」

死神は突然大きなバッグを俺に差し出した。

「無理だよ。そんな急に言われてもさ。間違つたらまずいだろ?」

俺の不安を他所に死神は「コニコ顔で」いつ言つた。

「大丈夫です。相手も初めてですから何もわかりやしません。一度  
三度来る人はいませんからやつつけ仕事でいいんですよ」

それもそつだと妙に納得してしまつた自分が情けなかつた。

## 夢で逢えたら

最近初恋の人の夢ばかり見る。

付き合っていたのはウン十年前。

先に結婚した私は、夫の仕事の関係で遠くに引っ越しした。

もうずっと会っていない。

彼は同窓会にも出席しないから。

お互い会えればがっかりするほど容姿も変わってしまったはずだけ  
ど。

会わずにすむこともここのかも。

でも夢に出て来る彼はその当時今まで、私もその当時の姿だ。

いつもの店で、いつものクリームソーダを一つだけ頼んで、スト  
ロー2つで飲む。

体温がわかるくらい彼の顔が近い。

私は思わず赤面した。

彼はそんな私を見て優しく微笑む。

今まで感じた事のないほどの幸せな気持ち。

充実した心。

彼が何か語りかけているが、聞こえない。

私は「何?」と聞き返そうとするが、声が出ない。

彼は照れ臭そうに笑い、席を立つ。

私も慌てて立つ。

そこで目が覚める。

そんな夢が一週間ほど続いた。

数日経つた夜、私はまた彼の夢を見た。

ずっと見続けていた夢の続きだった。

席を立ち、店を出た。

そこで彼は私を見て、

「さよなら」

と微笑んで言つた。

「え?」

私は意味がわからず、歩き出す彼を追いかけた。

しかし、追いつけなかつた。

そこで目が覚めた。

何故か私は泣いていた。

翌々日、一通の黒い縁取りの葉書が届いた。

彼の(ご)両親からだつた。

彼が亡くなつたという知らせ。

ああ、あれは彼が最後のお別れをしに来たのだと感じ、泣いた。

葬儀の時、驚いた。

彼は独身のままだつた。

ご両親に彼が大切にしていたものを見せてもらつた。

それは私が出した葉書。

会えなかつたけど、ずっと新年の挨拶と、暑中見舞い、残暑見舞いと出していた。

彼はそれを全部年代順にファイルし、保管していた。

一度も返事をもらひえなかつたので、何度もやめようと思つた。

迷惑なのかな、とも思つた。

でも、そうじやなかつた。

それがわかつて嬉しかつた。

私の初恋は一いつして終わつた。

## 鏡の中から

私は「泣き虫」とあだ名される涙大量生産の中学生の女子。

また今日も学校で嫌な事があつて泣いてしまい、家に帰つていつもの「儀式」をした。

「儀式」と言つてもそんな大それた事ではない。

部屋にある姿見に[与]る私に愚痴を言つだけだ。

「」の鏡はおばあちゃんが使つていたもので、お父さんがお母さんと結婚して今の家を建てた時、おばあちゃんから譲つてもらつたものだ。

古いものだが、私は小さい頃からこの鏡が好きで、中学生になつた時にお母さんにねだつて自分の部屋に移してもらつたのだ。

私はこつものように鏡の中の私に話しかけた。

「また泣いたやつだ。こんな私をどう思つ？」

鏡の中の私が答えてくれるわけがない。

それでも私は言いたい事を言つと、姿見にカバーをかけて、部屋を出よつとした。

その時だつた。

「 わづひさやつ」

私はその声にびっくりして振り返った。

誰もいない。

「 気のせい？」

私はドアノブに手をかけた。

「 気のせいじゃないよ。いつもあなたに下らない愚痴を聞かされて、うざがうつて言つたのよ」

「 一。」

私はまさかと思ったが、姿見の前に戻り、カバーを外した。

そこには、ムスッとした顔の「私」がいた。

「 ええええーー？」

私はパニックになりかけた。

思わず鏡の裏側を覗いた。

誰もいるわけがない。

「 何探してんのよ？ 私は！」。「の中」

鏡の中の「私」が言った。私はポカーンと口を開いたまま、「

「私」を見た。

「あのや、あなたの愚痴を毎日聞かされる私の身にもなつてよ。ホント、冗談じやないわよ」

「う、ごめん」

私は「私」に謝った。

「それがダメなの。もっと強くなつなさいよ」

「でもれ……」

私は言訳をしようとした。すると「私」が、

「後ろばかり向いてたら、何かにぶつかって怪我するよ。前を見なよ」

「うん……」

私のイジイジぶりに「私」は切れたみたいだ。

「あなたは毎日自分の弱さを私に愚痴つて來たけど、今日は私が愚痴るわよ」

「はー……」

私は思わず頷いてしまった。

「私はあなたの虚像だけど、あなたの相談役じやない。あなたは自

由に「」にでも行けるけど、私は「」の中であなたが来るまでジッとしているだけ

「……」

私は泣きそうになつたが、何とかこらえた。

「一日だけでいいから、私と交代してくれない?」

私はギクッとした。「私はニヤリとして、私はもう決めた。交代しよう!」

「え?」

鏡の中から「私」の手が伸びて来た。その手が私の右腕を掴んだ。

「ああ! 交代してよ!」

「……」

私は声もなかつた。でも必死に抵抗した。

「交代してよ、一日だけでいいんだから!」

私は遂に声を上げた。

「嫌よ! 私は交代なんかしたくない!」

途端に「私」の手は離れ、鏡の中に戻った。

「それでいい。あんたに必要なのは、自分の気持ちを出すこと。  
泣いているだけじゃ、何も変わらないんだよ」

鏡の中の私は、一瞬「微笑んで」と言つてくれた。

「ありがと……」

私は泣いてしまつた。また怒られると思つて、ハッとして「私」を見た。

「そういう涙はいいんだよ。でも、言ひ訳のために泣くのはもつね  
しまじこじみうよ」

「うそ」

私は涙を拭つてもう一度「私」を見た。

でもそこにいたのは私だつた。

行つちゃつた? ありがと、「私」。

またいつか助けてね。

そう思いながらカバーをかけ、ドアに近づいた。

「助けるのは今日だけ。これからは自分で何とかしな

「私」の声がした。

「うん。」

強くなれそつな氣がする。

私はお母さんが呼ぶ声に答え、部屋を出た。

## 医者はどーだ？

その町で一番の大金持ちの男は、焦っていた。

「医者だ！ どんな重症患者でも絶対に助けられるという医者だ！」

彼は野獸のような風貌で、まるで雄叫びを上げるかのように怒鳴り散らしていた。

「只今國中を探しております。もうしばらくお待ち下さい」

執事が丁重に頭を下げて答えた。しかし男は納まらない。

「國中だと？ ダメだ！ ダメだ！ ダメだ！ 世界中を探せ！ 何としても見つけ出すんだ！」

「はい」

執事や他の使用人達は、男の剣幕に圧倒され、言われるがままだつた。

彼は金を惜しまず使い、世界中に人を送り、医者を探させた。

何百人という人間が動き、使われた金は数十億に達した。

周囲の人々は、彼の精神が破綻したのではないかと心配したほどだ。

そして一週間後、捜索チームは、絶対にどんな瀕死の重傷患者でも助けられるといつ医者を見つけ出した。

男はすぐにその医者を自分の屋敷に呼び寄せた。

「患者は？」です？」

紳士然としたその若い医者は穏やかな口調で尋ねた。

「死んだよ」

男は何でもないことのような調子で応じた。

「死んだ？ 間に合わなかつたのですか？」

医者の言葉に男は激怒したようだ。彼は医者を睨みつけた。

「死んだよ。一ヶ月前、旅行先で事故に遭い、絶対助けると言つた貴様の手術を受けてな！ だから今日、貴様にその後を追つてもらうのやー！」

## 5時まで男

私はある企業の営業課長である。

今年入った新人の中に非常に優秀な男がいたので、即戦力として  
我が課に引き入れた。

そして私が直接指導し、営業のいろはを教えた。

彼はそれを思つた以上に理解してくれた。

10年に1人の逸材だと思った。

しかし、彼には致命的な問題があつた。

残業を拒否するのだ。

様々な理由をつけて、定時に退社する。

仕事には支障がないのだが、他の社員の手前、あまり好ましい事  
ではないので、私は彼に話をする事にした。

使つていらない会議室で待つていると、彼は正確に指定した時間に  
来た。

「何でしちゃうか？」

彼は真っ直ぐな目で私を見て尋ねた。私は咳払いをしてから、

「君はいつも定時に退社するね。どうしてなのかな?」

「仕事は全て滞りなく終わらせています。何も問題はないと思いま  
すが?」

予想通りの返答だ。確かにその通りだ。しかし私は、

「君は同僚との夜の付き合いを一切していいそうだね?」

「はい。それも仕事には支障ありません。普段は問題なくやり取り  
しております」

「……」

要するに仕事さえキチンとこなしていれば、後は関係ないとい  
う主義か。

最近そういう人間が増えているらしいが、私はそつは思わない。

「人付き合いが苦手なのかね?」

「いえ、そのような事はありません。休日の集まりには参加してい  
ます」

確かに彼は日曜のレクリエーションやスポーツには参加している。

「残業が嫌なのかね? 遅くなるのが困るのか?」

私は何故この男がそこまで早く帰りたがるのか不思議だった。

私はむしろ、居場所がない我が家には寝に帰るだけで十分だと思つてゐるくらいだ。

彼は両親と同居でまだ独身。

家に早く帰りたい理由は何か、興味が湧いた。

「はい。遅くなるのが困るのです。夏は多少の残業はできますが、秋から冬にかけては、定時前に退社させていただきたいのです」

「え？」

私は呆気に取られた。

何を言つているんだ、この男は？

逸材と思つた私が愚かだつたようだ。

「いつも自己中心的な人間なのだ。

説得は無理だ。

惜しい氣がするが、そこまで甘い考えだと、この先何か問題を起つしかねない。

「そのような考えでは、この先難しいな

「そうかも知れません。しかし、私が残業すると、皆さんに多大な迷惑をおかけすることになります」

「どういつ意味かね？」

「いつ、実は頭がおかしいのか？ そう思い始めた時だつた。

彼はおもむろに両手で頭髪をつかむと、それを引き剥がした。

「何だ？」

私はその行為に睡然とした。

「む？」

私は彼の頭部にあるべき頭皮の代わりに、黒いパネルのようなものがあるのに気づいた。

「私は実は太陽光で動く人間なのです。ですから夕方や夜は活動できないのです」

私はその「言い訳」に激怒した。

「ふざけるな！ 言うに事かいて、何だ、その言い草は！？ 今日は何が何でも残業してもらうからな！」

私は彼を強制的に残らせる事にした。

そして、午後6時。

本当に動かなくなつた彼を見て、呆然としている私がいた。

## 渴き

……！

あまりにも強烈な喉の渴きに、目が覚めた。

何だ？

別にそれほど蒸し暑かった訳ではない。

汗も特別かいた訳でもない。

しかし、一刻も早く水分を補給しないと枯れてしまいそうなので辛かつた。

俺はベッドから飛び出し、キッチンに走った。

「フーッ」

冷蔵庫にあつたスポーツドリンクを飲み、渴きは収まった。

まだ明け方の四時だ。

もう一度ベッドに横になり、眠りうとした。

えつ？

そんな。

もう堪え切れない渴きが襲つて来ている。

一体どうしたんだ？

もう一度冷蔵庫に行き、今度は炭酸飲料を口にした。

「うう

炭酸が喉に染みる。痛いくらいに痺れた。

「何なんだよ

俺は少しイライラしながら、再びベッドに這いつぶ。

「……

また堪え難い渴き。

もしかして奇病に罹ったのか？

疲れなくなつた。

いろいろ考えてみると、何も思い当たらない。

糖尿病は喉が渴くと聞いた事がある。

しかし、それにしても度が過ぎている。

ベッドに戻るまでに堪えられなくなる渴きつて、一体何だ？

俺は出勤時間の七時になるまで、水分を補給し続けた。

キッチンは空の缶とペットボトルが散乱し、酷い状態だった。

俺は会社を休もうと思ったが、現在進行中の企画は、俺が責任者なのでそんな簡単に休む訳にもいかない。

俺は水筒に麦茶を入れ、出かけた。

駅までわずか十分のアパートに住んでいるのに、改札を通過までに水筒は空になり、駅の売店でレジ袋一杯にスポーツ飲料を買い込んだ。

電車の中でも、周囲の乗客が離れてしまつ程、俺は飲み続けた。

あれほど買い込んだスポーツ飲料が、下車駅に到着するまで保たなかつた。

俺は再び駅の売店で大量に買い込んだ。

会社でも止まらなかつた。

いや、止められなかつた。

渴きは朝より酷くなり、飲まないと喉が焼かれたように熱くなる。

同僚や上司にまで心配された。

皆口々に医者に行つた方がいいと言い始めた。

しかし俺は作り笑顔で、

「大丈夫です」

と応え、企画会議を始めた。

この企画は我が社の社運を左右するような大きな仕事になる。

砂漠に縁を。

大きな貯水池を。

俺の長年の夢でもある。

！ ！ ！

その時、俺はとんでもない事に気づいた。

ああ、何て事だ。

そして少しホツとした。

そういう事か。

原因がわかると、喉の渴きも堪えられるようになつた。

そしてその日は、上司の指示に従い、定時に退社した。

そしてどこにも立ち寄らず、アパートに戻つた。

「そうだよな、怒るよな」

俺は蛇口をひねつてコップに水を入れ、テレビに近づいた。

「ごめんな、俺が悪かったよ」

テレビの上の枯れかかった観葉植物に水をやりながら、俺は詫びた。

喉の渴きは収まつた。

しかし、ホツとする間もなく、次に俺は強烈な腹の痛みに襲われ

た。

## 同棲

ああ。

信じられない。

ずっと夢だった。

叶えたいと思っていた。

でも到底叶わないとも思つた。

それが信じられない事に叶ってしまった。

子供の頃から憧れていた同棲。

その何となく後ろめたくて、それでいて眩しいような言葉。

ずっとずっと好きだった高校時代の同級生。

その彼に偶然街で出合つた。

彼も私の事を覚えていてくれて、嬉しさのあまり、

「一緒にお食事でも」

と思い切つて誘つてみた。

彼は快諾してくれた。

私は有頂天になつた。

デートでも何でもない。

只単に昔の同級生に久しぶりに会つたから、とこつだけ。

彼の心の中は、その程度だと思つ。

いや、そうだ。

きつとねつだ。

それでも良かつた。

幸せだつた。信じられなかつた。

夢なら冷めないで、と思つた。

でも夢じやなかつた。

「楽しかつたよ」

別れ際にそう言われた。

失神するかと思った。

それくらい私の心は高揚した。

そして今、更に信じられない事に私はその彼と同棲している。

私の狭いアパートに二人。

もう何もかもが輝いて見えるくらい嬉しい日々。

でも一つ困った事がある。

彼自身。

同棲を始めて一ヶ月。

そろそろ何とかしないと。

強力な防臭剤、どこかで見つけて来ないとね。

じゃ、仕事行って来るね、ダーリン。

## 当選確実

選挙期間一週間。

全力で戦い抜いた。足が棒になるまで歩いた。

多くの有権者達に声をかけ、握手して回った。

厳しい戦いだった。土砂降りどころか、集中豪雨のよじつな状態。

逆風が吹きつける中、休む事なく走り抜けた。

当選確実が見えて来た。もう一息か？

しかしそまだ気を緩めるわけにはいかない。

これからが正念場だ。

今まで何回も味わった事がある。

「当選確実です」

選挙速報でたびたび耳にした。

しかし、土壇場で逆転、当選しなかった。

そんな事が想定されるから、例えテレビの速報で「当確」が打たれても安心は出来ないのだ。

やがて選挙活動は終了した。

後は本当に天命を待つばかりである。私に出来る事は全てやつべくした。

私は、共に戦つて来た後援者達と食い入るように選挙速報を見た。

次々に他の選挙区で当確者が発表される。

遂に私の選挙区の速報が入った。

私達は固唾を呑んで見守る。

「G県第四区の当確が出ました」

テレビのキャスターが告げた。

私はギクッとして両手を握りしめた。

当確を出したのは、相手候補だった。

私は天を仰いだ。

涙が流れた。

心の底から、こみ上げて来るこの感情。

押さえる事が出来ず、叫んだ。

「やつたぞ！ やつた！」

選挙事務所に木靈する万歳の声。

喜びを分かち合い、握手を交わす後援者達。

私は感動のあまり、何も言えずにお辞儀をし続けた。

そんな中、ニュースキャスターが告げた。

「以上で第一回人柱選挙の当確者速報を終了致します」

## 臨死体験

俺はスクープ専門のフリーライター。

と言つと聞こえがいいが、本当はフリーター同然のしがない物書きだ。

全く仕事がない。

あらゆるシテを頼つて探したが、何もオコボレを頂戴できなかつた。

食つに困り、飲食店の「ミニ箱を漁る」日もあつた。

コンビニの裏口で、店長に廃棄処分する弁当を譲り受けたりもした。

生きている意味があるのか？

そこまで思つめた事もある。

しかし、死ぬ「勇気」がない俺は、何も出来ないまま、おめおめと生きていた。

そんなある日、こつものように公園の滑り台の下で寝てこると、

「起きる」

と肩を揺すられた。

「うん？」

皿を擦りながら起き上がると、以前何度かレポを掲載してもらつた雑誌の編集者が目にに入った。

「ああ、よくこりがわかりましたね」

俺は編集者を見上げた。編集者は呆れ顔で、

「有名だよ、あんた。ホームレスライターだつて。ここのネグラも、業界じや知れ渡つてゐる」

俺は苦笑いをした。

「で、何ですか？ まさか俺を笑いに来るほど暇ではないですよね」

「もちろん。仕事の依頼に来たんだ」

「仕事？」

話を聞いてみた。

どうやら仕事は「臨死体験」らしい。

臨死体験をした人達を取材するのかと思つたら、

「そういう仕事なら、他の奴でも出来る。でも、この仕事はあんたじゃないと出来ないんだ」

「俺じゃないと？」

俺限定？ 妙な話だな。俺は眉をひそめて編集者を見た。

「そう。何しろ、臨死体験してもひつだからな」

「えええええ！」

「」の頃すっかり達観して、物事に動じなくなつた俺もさすがに仰天した。

「死ぬんですか？」

「いやいや、死ぬんじゃないよ。そんな仕事ないって。あくまで臨死体験だ。死後の世界をちょっとだけ覗いてくるという仕事だよ」

言葉で言いくるめよつとしているようだが、冷静に考えれば「死ぬ体験」ではないか。

「俺じゃないと出来ない仕事つていうのが、ちょっと引っかかりますね」

俺はムスッとして言つた。すると編集者は悪びれもせず、

「別にいいんだよ、やりたくないのなら。こんな企画、ボツにすればすることだからさ」

と開き直った。

「やう言わると弱いなあ。やります、やらせて下さい」

「そう。悪いね」

俺は編集者の狡猾な笑みに、「嵌められた」と思った。

しかし、取材は拍子抜けするものだった。

山奥の修験者もじきのジイさんが、臨死体験をさせてくれるといつものだったが、見事に失敗。

と言つより、嘘つきジジイだったのだ。

俺達取材班は散々な思いで山を降りた。

結果として俺はそれなりの報酬は得たが、釈然としなかった。

そしてまたホームレスな暮らしに戻った。

いつものようにコンビニに行き、廃棄処分の弁当をもらい、小料理屋の板前から料理の残りを分けてもらつた。

わざわざに残つた酒をチビチビ飲みながら、寂しい夕食を頂いた。

しばらくして、俺は胃袋を驚撃されたかのような激痛を味わつた。

「グウウ」

俺は地面をのた打ち回つた。

やがて意識が遠のいた。

気がつくと俺は花畠の中にいた。

大きな川の向こうでは、奇麗な女性達が追いかけっこをしていた。

この光景は？

臨死体験？

今更遅いぞ。

いや、そうだ。

これをレポートして雑誌社に持ち込めば、金になる。

俺は女性達に取材しようと川にかかる大きな吊り橋を渡った。

「あの、ちょっといいですか？」

女性達は「」ながら、俺に近づいて來た。

よし、これで記事になる。そう思つた時だつた。

「あれ、あれあれ？」

俺の身体は勝手に後ろに動き出し、女性達から離れてしまつた。

「はっ！」

田を開けると、そこは病院の手術室だつた。

「良かった、蘇生したぞ」

そこにいた医師と看護師達が喜ぶ中、俺は、

「何で助けたんだよ！？ 臨死体験中だったんだぞー！」

と叫んだ。

俺はその後脳の検査もされてしまった。

返したくない

僕は只今恋愛真っ只中。

会社の同僚の女の子と付き合っている。

彼女は可愛くて、気が利き、仕事もできる。

誰もが羨むカップルだ。

もちろん、やっかみや妬みもある。

それを全て2人の愛で乗り越えて来た。

将来を誓い合った。一生一緒にいようと思った。

お互いの親にも会った。皆祝福してくれた。

もうすぐ結婚する事になる。

そう思っていた。

しかし、それは僕の独りよがりだったことがわかった。

ほんのちょっとしたことで、僕らは怒鳴り合ってしまったのだ。

僕のアパートでの出来事だ。

夕食の準備をしていた時、それは始まってしまった。

「返したくない」

僕は强硬に主張した。

しかし彼女も譲らない。

「ダメよ。今すぐ返して。でないと私、もう貴方とは付き合えないわ」

「そんな大袈裟な。それ程の事なのかよ」

「ええ、それ程の事よ、私にとつてはね。お金持ちの貴方にはわからないでしようけど」

何だ、この女は。案外我が儘な女だったんだな。

僕は彼女に幻滅した。だから引き下がらなかつた。

「絶対に返さない。誰が返すものか」

「絶対に返さないですって？ 何て恥知らずな。貴方がそんな傲慢な人だとは思わなかつたわ」

彼女は涙声で僕を罵った。

「もう別れましょ。」今まで考え方が合わないのでは、この先幸せになれるとは思えない

「ああ、やうだな」

僕は売つ葉に買つ葉で、やつ葉で、そのままにしてしまった。

彼女はバックを掴むと、部屋から出て行った。

僕はフーッと溜息を吐いて呟いた。

「田中焼きをひっくり返さないだけで別れ話かよ

## 私は鬼部長

私は仕事の鬼。

人生の大半を会社に捧げ、出世より会社のためを何よりも優先させて來た。

そのため、多くの部下に恐れられ、「鬼」に例えられた。

私はそれを褒め言葉と受け止め、誇りに思っていた。

会社に到着した。

受付の女の子が、私を見て真っ青になり、走り去ってしまった。

おいおい、それは大袈裟だぞ。

しかし、心の広い私はそんな事では怒つたりしない。

私が怒るのは、会社のためにならない事をする連中に對してだ。

誰彼構わず怒りをぶつけて來た訳ではない。

エレベーターを待つ。

いつもなら混み合つホールが、今は私だけだ。

到着音がして、目の前の扉が重々しく開いた。

そこには社長と専務がいらっしゃる。

私は脇に退き、頭を深々と下げて、

「おはよおはようございます」

と挨拶した。

しかし、応答はなく、お一人は玄関へと走り去ってしまった。

どういう事だ？

私は何か失礼な事をしてしまったのだろうか？

いろいろ思い返してみたのだが、何も心当たりがない。

エレベーターが五階に着く。

私は扉が開くのを待つた。

スースと開く扉。

そのまま向こうにいる私の部下達。

何故か全員腰を抜かさんばかりに驚き、走り去った。

何事だ？

「一体」の会社はどうなつてしまつたのだ？

社員ばかりでなく、社長と専務の「」様子のおかしい。

私は「」の疑問を解消するため、第一営業部のフロアに急いだ。

「おはよう」

私がフロアに足を踏み入れると、全員が私を見て絶叫し、部屋の反対側に走つた。

さすがに我慢強い私も、「」の意味不明な一連の行動に怒りを感じた。

「何事だ？ 何をしている？ 知達の私に対する態度はどういう理由があるのだ？」

私は怯えている社員を見渡し、第一営業課長の茂森の顔を見つけ、

「茂森君、説明したまえ」

と命じた。そう、まさに命じたのだ。

すると茂森はガタガタと震えながら、

「ぶ、部長は昨晩、クモ膜下出血でお亡くなりになつたはずでは……」

えつ？

記憶がフラッシュバックする。

ああ、そう言えば……。

私はすでに自分が死んでいた事を思い出した。

そして、社員達を見渡し、

「いや、私が悪かった。そうか、昨日病院で死んだのだな、私は。すまなかつた、驚かせて」

と叫びると、その場に倒れた。

死んでしまったのを忘れる程、私は会社を愛していたのである。

## 木靈小僧

皆さんは「木靈小僧」という妖怪を「存じでしょ」つか?

あまり知られていないマイナーな妖怪なので、知らない方が多いと思います。

「」で一つ、木靈小僧のお話を致しましょう。

あるところに木こりの男が住んでいました。

男は木こりの仕事が嫌で、いつか辞めたいと思つていました。

しかし、辞めたところで他に出来る事もなく、男は悩んでいました。

「畜生! ビテナリやいいんだよ!-?」

彼は森の中で大声で叫びました。

「畜生! ビテナリやいいんだよ!-?」

「?」

木靈が聞こえました。

でも妙です。声が幼くなっています。

「誰だ、お前は？」

男が叫びました。すると、

「誰だ、お前は？」

とまた子供っぽい声が応じました。

「妖怪だな、お前？」

男が尋ねると、

「妖怪だな、お前？」

とまだトボケでこます。男は一ヤリとして、

「隣の密はよく柿食う密だ」

と早口言葉を言こせました。すると、

「とこやつのかくはよきかくわつかくだ」

と何の事やうわからぬ木靈が返つて来ました。

「言えてないぞ。それでも木靈か？」

男は腹を抱えて笑いました。

「言えてないぞ。それでも木靈か？」

とまたトボケています。男は少々ムカついて、

「武具馬具武具馬具三武具馬具、合わせて武具馬具六武具馬具」

と非常に難しい早口言葉を言いました。

卷之三

遂に木靈は途中で詰りのを止めてしましました。

一 情けない木靈だな。出直して来い。

男は大声で笑いました。

そしてその夜の事です。

男が山小屋で寝ていると、夢枕に巨大な身体の物の怪と思しき者が現れました。

「儂は」の山の木靈の元締めだ。昼間、貴様にからかわれた木靈小僧が、舌を噛んで仕事ができなくなつてしまつた。お前にその責めを負つてもらおう」

「何だと？」

男が抵抗する間もなく、木靈の元締めは男の舌を大きなヤツト口で引き抜いてしまいました。

「おーっ！」

男はその痛さで目を覚ました。

夢かと思ったのですが、彼は本当に舌を引き抜かれてい、それ以来何も話せなくなってしまったのです。

木こりの間では、木靈小僧が現れても決してその返しの拙さをからかつたり笑つたりしないといつのが決まりでした。

でもこの木こりの男は、普段から他の木こりと仲が悪く、年寄りの木こりの忠告も聞かず、勝手気ままに仕事をしていたため、その事を知らなかつたのです。

皆さんも、山や森の中で、木靈小僧に木靈を返されても、絶対にからかつたりしないで下さい。

もしそんな事をしたら、どうなるかわかりませんよ。

## 同級生

私はある企業のO.L。

就職してすでに四半世紀が経つ。

一番良かつたのは、バブルの頃だろ？

毎日男をとつかええひつかえ……。

嘘はいけない。そんな事実はない。

それがあつたのは高校の同級生の優香。

どういう縁か、就職先も一緒になつた。

彼女は毎日ポケベルが鳴つていた。

私のポケベルが鳴るのは、緊急の出社の時か、休日の変更の時の  
み。

持つている意味あるのか？ 家族と同居なのに。

家の電話でいいじゃん。

でも、それは僻みだつたのかも知れない。

優香は入社直後に同僚の恋人ができ、三年後に結婚。

その一年後には第一子出産。

時の経つのは早くて、もつもぐんの子が結婚する「ひし」。

「優香も、四十代でおばあちゃんかもよ」

そんなことを同窓会で聞いた。

その同窓会も出席するのが嫌だ。

同級生で結婚していない女子は私と由美だけ。

但し、由美はシングルマザー。そこが違う。

私は、聞いた話では「パート・クツシングル」なのだとか。

何だそれは？ 結婚しない事がいけない事なのか…？

「できない」と「しない」は違つよ、と言われた事がある。

その言葉が一番悔しい。

私は結婚できない女ではない。しない女だ。

「じゃまでも強がりを言ひ。そつ思われても仕方がない。

「お前も、『ブスじゃないのにどうして結婚できないのかな？』

同窓会で無神経なバカ男にそんな事を言われた。「ブスじゃない

のに、『は褒め言葉なの？』

「どうしてだらうねえ。不思議だねえ」

その時は笑っていたが、本当は激怒していた。

それって、「性格が悪い」と言われているようなもんじやないのよー。

ああ。

こんな発想がいけないのかも知れない。

同窓会はお開きになり、親しい者同士がそれぞれの一次会に繰り出して行つた。

私は誰からもお誘いがなく、そのまま帰宅する事にしてタクシーを探した。

「雨宮」

私の苗字を誰かが呼ぶ。振り返ると、高校の時密かに憧れていた八木君が立つていた。

「あ、八木君。二次会には行かないの?」

「ああ。俺、今傷心中でさ」

「え?」

私はその時、ハ木君が同級生の香と離婚したばかりなのを思い出した。

香は当然同窓会には来ていない。

「でも、慰めてほしいかな、なんて思ったんだけど」

「……」

私はビックリ反応したらいいのかわからず、只立ち去ってしまった。

「頼むよ」

ハ木君が照れ臭そうに微笑む。私は、「し、仕方ないな。カラオケでいい?」「どこでもいいよ」

ハ木君がじく自然に私の肩に手を回した。ドキッとした。

「行こうか、香園」

「うん」

できれば下の名前で呼んで欲しい。

そう思つた。

## 探し物は何か？

私は「」く普通の主婦。毎日夫と子供達の世話を追われ、自分の事に「」氣を使つるどりがない。

ある日の事。

私は自転車で近所のスーパーに買い物に出かけた。

いつも道をいつものように進んで行く。

スーパーまであと百メートルくらいまで来た時、私はおばあさんが身を屈めて側溝を覗き込んでいたのに気づいた。

「どうしましたか？」

私は自転車を停めておばあさんに声をかけた。

「はい、ここに落とし物をしてしまいました。見つからないのですよ」

おばあさんは側溝を覗き込んだまま答えた。今にも落つてしまいそうなくらいの態勢だ。

「何を落としたんですか？」

「大事なものなんです。あれがないと困るんですよ」

「そうですか。私も一緒に探ししますよ」

お節介が服を着て歩いているような性格と夫にいわれる私は、自転車を降りておばあちゃんに近づいた。

「どの辺に落としたんですか？」

「多分」の辺なんですか。見えないのでよくわからないんですね

「やうなんですか」

私も側溝のそばに膝を着き、中を覗き込んだ。

おばあさんは側溝の水の中に右手を突っ込み、バシャバシャとかわ回すよつこしている。

そんな方法で見つかるのだろうか？

私は不思議に思いながらも、田を凝らして水面を見た。

それにしても何を落としたんだら？

「探し物は何ですか？」

私は見当をつけるためにおばあちゃんに尋ねた。

「すみませんねえ、見ず知らずの方にそれしまでしてもひつて

私は側溝に転げ落つたくなるくらい驚いた。

「田玉を両方落としてしまったんですよ。見えないから見つけられ

なくて「

おばあさんは一ヶ口つ笑つて、空洞になつた田の部分を私に向け

た。

## アキハバラ君日記

僕は秋葉原光義。

その苗字から会社の同僚達に「オタク」とあだ名されている事を知っている。

酷い話だ。

確かに僕は、スポーツが苦手で、マンガ好きで、美少女アニメに目がなくて、ガンプラが好きだけど、決してオタクではない。

何故なら、オタクの聖地である秋葉原には一度も行つた事がないからだ。

その話を同僚達にすると、

「それはまずいよ。早く参拝しないと、バチが当たるよ」

などと言われ、からかいのネタにされる。

そんな僕だけど、会社の仕事はキッチリこなしている。

どこからもクレームをつけられた事はない。

どちらかと言つて、優良社員に入るはずだ。

しかし、生来の要領の悪さから、同僚の失態を僕の責任にされてしまう。

前にも、同僚の田黒由利子さんが発注ミスした鋼材の件で、田黒さんは、

「秋葉原君に確認してもらつて先方にお送りしたんですけど」

などと平氣で言つて訳した。僕は課長に呼びつけられ、皆の前で叱責を受けた。

横目で田黒さんを見ると、ニヤニヤしていく、全く悪びれた様子がない。

腹が立つたが、田黒さんは部長の愛人といつ噂があるので、あまり事を荒立てられない。

僕はストレスが溜まる一方だった。

田黒さんに責任転嫁されたのは、一回だけではない。

そんな事を数えるほど執念深くないし、凡帳面でもないので、正確には何回かわからないが、片手では足らぬいくらいのはずだ。

お詫びにてーーーしてくれてもいいと思つ。

そう。

僕は田黒さんが好きなのだ。

彼女に言えないのは、それが最大の理由。

部長の愛人だろうと関係ない。大好きだ。

彼女は性格に問題があるけど、美人で明るいから、そのマイナスを補つて余りあるのだ。

バカだと思う。

絶対に実らない恋なのに。

そんなある日。

僕はまた要領の悪さから、一人残業を押し付けられ、会社にいた。もう十時だ。今日は金曜日なのに、一人でいる。

同僚達は、飲み会だと言つていた。

ああ。何か、涙が出て来た。パソコンの画面が滲んで見えない。

その時だった。

「だあれだ？」

と突然目を覆われた。

「え？」

その声に聞き覚えがあつた。何で彼女が？

「田黒さん？」

「せえかあいー。」

田黒さんは陽気な声で言つた。振り返ると、ほの酔い顔の田黒さんがいた。

「何よお、アキバ君、何か文句がありやつね?」

田黒さんはそのまま愛らしく顔を尖らせて言つた。

「べ、別に文句なんかないよ」

僕は慌てて言つた。

「えいじよ?」

「え?」

突然田黒さんが泣き出しだ。

ええええ? 「えいじよ」は君の方だよ、田黒さん。

「どうしてこつも私に何も言わないで、自分で怒られてるのよ?」

田黒さんが何を言いたいのか、よくわからない。

「カツハナるな、アキバア!」

いきなり抱きつかれた。酒乱なのか？

「カツコつけてなんかいなによ。僕が怒られてすむのなら、それでいいから……」

僕は田黒さんを突き放して説明した。田黒さんはまだ泣いていた。

「バカ。不器用にも程があるぞ、アキバア！」

「「めん」

僕は笑って言った。すると田黒さんも釣られて笑った。

「「めんは私の方。アキバ君、つづん、秋葉原君、今まで「めんなさい」

「あ、いや……」

改めてそんな事を言わると照れ臭い。

「でも、何でなの？ どうして私に何も言わなこのみ？」

「君が好きだから」

「うわ、言っちゃった。田黒さんはビックリした顔で僕を見ている。

「これで呆れられてしまつたな。そう思った。いや、キモいって言われそうだ。」

「そつなんだ。私の片思いじゃなかつたんだ……」

今何て言われたの？ 聞き取れなかつた。

「私も秋葉原君の事が好きよ」

「……」

僕は頭をハンマーで殴られたかのよつた衝撃を受けた。

えええ？ 田黒さんが僕の事を好き？

好き？ SUKEI？ スキ？ すき？

「良かつた。ありがと、秋葉原君」

そう言つと、田黒さんはフロアを出て行つてしまつた。

僕はその後しばらく呆然としていたため、仕事を片付け終えたのが一時過ぎだつた。

そして月曜日。

幾分冷静になつた僕は、あの日の出来事は田黒さんが酔つていたからだと結論付けた。

フロアに行くと、田黒さんがいた。

「おまみりがれこせや」

普通に挨拶をかわす。

やつぱり彼女、覚えていないようだ。

その方が気が楽でいい。

我ながら思い切った事を言つてしまつたと後悔しているのだから。

結局その日一日、田黒さんとは会話をかわさないまま過ぎした。

そしてまた僕は一人残業。

同僚達は定時退社。課長が出張なので、皆早く帰つたのだ。

「あーあ

溜息が出た。何でこんなに要領が悪いんだろう?

その時だった。いきなり田を覆われた。

「だあれだ?」

「え?」

また田黒さんだ。でも、今日は飲み会はないし、まだ七時前だ。

「田黒さん」

「正解ー。」

振り向くと、田黒さんがいた。やつぱり奇麗な人だ。

あれ、田黒さん、怒ってる？

「何よお、私の事好きって言つてくれたはずなのこ、私が現れても全然嬉しそうじゃないのね」

「え？」

覚えてたんだ。うわあ、氣まずい。

「そ、ビロがで食事しましょ。フレンチがいいな

田黒さんは僕を強引に机から引き離した。

「ちよ、ちよー！ 手付けるから、待つてよ

「はい」

妙に素直な返事にドキッとする。

「はい、行きましょ

僕は仕事を途中で投げ出し、強引なデートを行つた。

翌日、主任に怒られるだらうけど、かまわないや。

もしかして、恋？

僕にもそんな事が巡って来たのかと、とても驚いている。

山羊ノ宮（前書き）

山羊ノ宮先生の「推薦を賜りました。」

私はある理由から無口でおとなしい小学生だった。

学校にいじめっ子がいた。

理由はわからないが、そいつは私を執拗に苛めた。

やり方は陰湿。かばんの中を水浸しにしたり、上履きに泥を入れたり。

椅子が隠された事もあった。

先生に言ったが、取り合ってくれない。

私は耐えるしかなかつた。

でもそれにも限界が訪れた。

私はそいつが通る道の途中で待ち伏せし、

「お前なんか交通事故に遭つてしまえー！」

とだけ叫ぶと逃げた。

そいつはせせら笑っていた。

翌日、そいつが交通事故で怪我をしたことを学校で知った。

そいつの取り巻き達が一斉に私を見た。

しかし何も言わない。

もし私が「死ね！」と言えば、本当にそうなってしまうと思つたからだ。

そいつらは急に私に媚びるよ'りになつた。

私は全然嬉しくなかつたが、苛められなくなつたのでホッとしていた。

翌日、私の噂がクラス中に広まつていた。

皆の私を見る目が違つ。

誰かが喋つたのだ。

私はいじめつ子連中を疑い、睨んだ。しかしそいつらは必死に否定した。

俺達は喋つていないと。

私はそいつらに私の正体をばらすメリットはないと思い、信じて

あげた。

その日の下校時、「真犯人」が現れた。

同じクラスの無口の奴だった。今まで一度も話したことがない。

「お前、言霊使いだな？」

「「」」だまつかい？」

私は初めて聞く言葉に驚き、そいつを見た。そいつは私を見て一  
ヤツとし、

「俺もそなんだよ。言葉に念を込めて放つと、それが現実になる。  
お前も俺と同類、仲間だ」

「・・・」

私はそいつを相手にするつもつがなかつたので、無視して歩き始めた。

「おい、俺と組まないか？　この力をうまく使えば、思い通りだぜ。  
欲しいものも、好きな女も全部自分のものだ」

「何言ひてるの、わけわからぬよ」

私はそれでも無視して歩き続けた。

「待てよ！俺を誰だと思ってるんだ。成りはガキだが、言霊使いの中では最上級の力を持っているんだぞ」

「関係ないよ」

「貴様！」

そいつは激怒して私を追いかけて来た。そして、

「俺の奴隸になれ！」

と叫んだ。私は振り向かずに、

「全部お前に還る」

とだけ言った。

「え？」

奴の放つた言霊は奴に帰り、奴は私の奴隸になった。

私はそれ以降その力を封印し、一度と使つまいと心に誓つた。

しかし、その誓いが揺らいでいる。

今目の前にいる男のせいで。

「またお前か！？ 何度同じミスを仕出かすんだよ… どうしてお

前みたいな間抜けが、わが社に入社できたのか、不思議で仕方がない！」

私はこの怒鳴る事しかできない「クズ」をどう「処理」するか考えていた。

## 最強の魔術師（前書き）

戦わずして勝つのが最強です。

## 最強の魔術師

いつの時代なのか定かではない頃の話。

天使も悪魔も敵わない程の魔術師がいたといつ。

彼の名は……不明。

知る者がいないのだ。

実在の人物なのがも怪しかつた。

しかし彼の事は語り伝えられていた。  
最強の魔術師として。

しかしそれ程有名なのに何故名前が知られていないのか？  
彼自身が名乗らなかつたのだと、名前を言つただけで呪いがか  
かり、死んでしまうからだと様々な噂があつた。

ある男がその魔術師がいるとされる秘境の森に挑んだ。  
彼は高名な神官である。

事の真偽を確かめよと彼の主である国王から命じられたのだ。  
「多分私は生きて帰れないだろう」

彼はたくさんいる弟子達と別れの盃を交わし、森に向かつた。

その森はいくら歩いても先に進んだ感じがしなかつた。

「これも奴の術なのか？」

神官がそう思つた時、目の前に小柄な老人が現れた。

「？」

彼はその老人が魔術師だと思い、

「貴方が噂の魔術師か？」

と尋ねた。老人はフツと笑い、

「いかにも。何の用かな？」

「貴方が本当に存在するのか確かめに参つた。その力の片鱗を見せ  
て欲しい」

「すでに見せている」

老人は右手に持つた杖を掲げて言った。神官は訳がわからない。  
「何をおっしゃる？ 何も見せてもらつてはいない」  
「この森がわしの術そのもの。実際には存在せぬ」

「…」

神官はギョッとした。

「まさか…」

「世迷い言と思うなら近くの木に触れてみよ」

老人は強い調子で言い放つた。神官はすぐ近くの木に触れた。

「グオッ！」

その瞬間、彼は雷に撃たれたかのように痙攣し、その場に倒れた。

「若輩者よ。何故わしの言葉に従うのか。愚かと言つようがないな」

老人は神官を見下ろして呟いた。

「命までは取らぬ。しかし、わしと出会つた事は忘れてもらう。そ  
してお主の力も頂く」

「成程。そういう事か」

「何！？」

老人は神官の声が背後から聞こえたので仰天した。

「私も一国を支える神官だ。そう易々とやられはしない」

「く…」

倒れた神官は変わり身だつた。老人はゆっくりと神官の方を向いた。

「貴方はどうやら我が王国にとつて危険極まりない存在のようだ。  
その魔力、その思考。何一つとして相容れられるものはなし」

神官は眉を吊り上げ、怒りを露にして怒鳴つた。

「ならばどうする？」

老人は不敵な笑みを口元に浮かべて尋ねた。神官は老人に近づきながら、

「知れた事。我が最高神の秘術にて消えてもうつ  
「わしは天使も悪魔も恐れる存在ぞ。おぬし程度の力で勝てると思  
うか?」

「ほぞけ!」

神官は右手で彼の守護神の印を結んだ。

「我が神の力受けるがいい!」

神官の気合と共に無数の光の矢が放たれ、老人に向かつた。

「うおおおつ!!」

老人は光の矢をまともに食らい、焼失した。

「呆氣ない……。妙な……?」

神官はあまりに簡単に勝敗が決した事を疑つた。

「わしの耳垢から生まれしわしの分身を葬るとは、なかなかの術者  
よ

「む?」

上空から声がした。

「ぬお!」

神官は眩い光に包まれ、意識を失つてしまつた。

「はつ!」

神官は不意に意識を取り戻した。何故か彼は王国の自分の屋敷に  
いた。彼は森へ出かけるために身支度をしていく途中だつた。

「まさか……」

彼は身震いした。

「私は出かけてもいなかつたというのか……。あれは全て魔術師の  
為せる業だというのか?」

神官は出立を取りやめ、王城に出向いた。

彼は国王の怒りを買つのも恐れず進言した。噂の魔術師は噂通り  
であり、手出ししてはいけないと。

神官の予想通り、国王は激怒し、彼を追放した。

やがて別の神官が森に出向く事になった。しかし同じ事だった。  
誰一人として森に行けた者はいない。  
だから魔術師の存在は知っていても彼の名を知らないのである。  
その魔術師はその後も永くその強大な力を語り継がれたという。

**悪魔の報酬（前書き）**

ホラー連作のきっかけとなつた作品です。

ヒロシはそのまま、全くついていなかった。

今日は日曜日だという夢を見て、すっかり寝過ごしてしまった。みそ汁で御飯をかき込むようにして飲み込み、靴下も片方しか履かずに家を飛び出した。

学校までわずか5分であるが、車の通りの激しい道路が通学の途中にあるので、信号が青になるのを惜しむようにしてヒロシは道路を横断した。

当然彼は右から来たトラックに轢かれそうになり、運転手に怒鳴られた。

学校に着いてみると、始業ベルはとうの昔に鳴り終わっており、彼はホームルームの真っ只中に教室に辿り着いた。

彼は先生に怒られ、友達には片足が裸足なのを笑われた。その上、カバンの中身は金曜日の時間割のものしか入っておらず、英語の時間、彼は教科書を家に取りに行かされた。

家に帰ったヒロシは母親に忘れ物をした事を叱られた。彼は舌打ちしながら学校に戻った。

そしてお昼休み。

ヒロシは弁当箱が入っていない事に気づき、購買で何か買おうと思つたが、金も持つていなかつた。彼は親友のマサオに金を借りてパンを2個と牛乳を買つたが、途中で階段から転げ落ち、パンはグチャグチャ、牛乳はパックが潰れて中身が全部流れ出でしまつた。

下校時。

ヒロシはマサオと話しながら帰路についていた。

「全く、今日は朝からずっと口クな事がないぜ」

「ホントだな。お前、一体どうしたっていうんだだろうな

「マサオは同情するような口ぶりだが、顔は笑っていた。ヒロシはムツとして、

「他人事だと思つて笑いやがつて。これでもつ、俺、完全に期末試験ガタガタだよ」

「まあ、そう落ち込むなよ。お前の事だ、明日になればきれいにさり忘れてるつて」

ヒロシはしばらく俯いて黙つていたが、

「ダメだよ。忘れられそうにないよ。ドジは毎度の事だから慣れっこだけど、あの子にまで笑われちまつたもんなア・・・」

「あの子つて、菅原美樹子か？」

「ああ。もう俺、立ち直れないよ」

菅原美樹子とは、ヒロシのクラスのマドンナ的存在で、ヒロシの憧れの女性である。

「そうだな。でもあの女も冷たいよな。声こそ小さかっただけど、随分いつまでも笑つてたぜ」

「ええつ！？ ホントかよ？」

ヒロシは悲痛そうな顔でマサオを見た。マサオは頷いて、

「ホントさ。嘘ついてどうするんだよ」

「ああ・・・。俺、何だか何もする気がなくなつて來た・・・」

「どうしても立ち直れないか？」

「ああ。今日という日が取り戻せない限りはね」

ヒロシのその言葉にマサオはニヤリとした。そして、

「今日という日を取り戻せるとしたらどうする？」「と尋ねた。ヒロシは仰天してマサオを見た。

「できるのか、そんな事が？」

「ああ、できるとも。合わせ鏡つて知つてるか？」

「合わせ鏡？ 何だ、そりや？」

2人は立ち止まって道の端に寄つた。マサオは辺りを窺つて見回してから、

「夜中の12時きつかりに合わせ鏡をすると、魔界と人間界が繋が

つて悪魔が現れるんだ」

と囁くように言った。ヒロシはまたムツとした。

「何だよ、真剣になつて聞いたら、そんな事かよ」

「まあ怒るなよ。気晴らしだと思つてもう少し聞けよ」

マサオは笑いながら言った。ヒロシはそれでもムツとしたままだ。

マサオは構わず話を続けた。

「それでな、悪魔が現れたら、願い事を言つんだ

「フーン」

ヒロシは半ば呆れ顔で聞いていた。

「でも悪魔は必ず報酬を要求する。命とか、若さとかな

「ああ」

「その代わり報酬を約束すれば、悪魔は必ず願いを叶えてくれる。下手な神社より効果があるぞ」

「うーん」

ヒロシはすでに藁にも縋る思いになつっていた。嘘でもいいから試してみよつと考え始めていた。するとマサオは大笑いして、「おいおい、そんなに本気にするなよ。悪魔なんている訳ないだろ？」や、帰ろ「ば」

「あ、ああ・・・」

2人はまた歩き出した。

ヒロシは家に帰ると只今も言わずに一階の自分の部屋に行き、マサオの言つた合わせ鏡の事を考えた。

（ホントに悪魔がいるのなら、今日といつ日が取り戻せるのにな  
ア）

彼はボンヤリと窓の外を見た。

やがて夕食もすみ、ヒロシは部屋に戻つて宿題に取りかかつた。しかし、合わせ鏡の事がどうしても頭から離れない。

（畜生、俺は一体何を考へてるんだ？ 悪魔なんている訳がない

つていつのに・・・）

しかし、ヒロシは悪魔の存在を否定する自分と肯定する自分がいるのに気づき、訳が分からなくなっていた。

「迷ひくらこならやつてみた方がすつきりするか・・・」

彼はそつ結論を出して呑わせ鏡をしてみる事にした。

そういう決断をしてから、12時までは長く感じられた。

「・・・」

彼は母親の化粧台から持ち出した2枚の手鏡を見た。時計の秒針が刻む時。ヒロシは思わず唾を呑んだ。

「今だ」

彼は12時ジャストに鏡を顔の前と後ろに手鏡を持って来た。ヒロシは何故か腋の下や手の平にジットリと汗をかいていた。

「？」

鏡の中に自分の顔の連続が見えた。

秒針の音が部屋に響いた。何も起こった様子はなかつた。「バカだな、俺・・・。そんな事ある訳ないのにな」「何がある訳ないのかね？」

誰かがヒロシの後ろで言った。ヒロシは背筋に悪寒が走った。それくらいその声は不気味な響きを持っていた。

「だ、誰だ！？」

ヒロシは恐怖に震えながらも振り向いた。

そこには天井に届くくらいの大きな男が立っていた。

男の身体は黒いマントで覆われており、顔は蒼白く、口は耳元まで裂け、目は鋭く吊り上がり、鼻は鷺の嘴のように尖っていた。

「ま、まさか・・・」

ヒロシはやつと顔に出した。男は右膝を着いてヒロシに顔を近づけ、

「誰だとは」挨拶だな。たつた今お前が私を呼んだのだろう？

ヒロシはギョッとした。

「じゃ、じゃあ、悪魔なのか、あんた?」

「そのとおりだ」

男はニヤリとして立ち上がった。ヒロシは男を見上げて、「で、でも角がない……。尻尾もない……」

「それは人間が考え出した悪魔だよ。本物はそんな姿はしていない」男の声はまたヒロシを身震いさせるような響きだった。悪魔はフツと笑い、

「で、私を呼んだのは何のためだ?」

「願い事を聞いてもらいつためだ」

ヒロシは絞り出すようにして言った。悪魔は厳しい表情で、

「良かねえ。言つてみるがいい」

ヒロシは生睡を呑み込んで、

「今日を取り戻したい。今日をやり直したいんだ」

「そうか。正確にはもう昨日だな。いいだろ? 但し、条件がある」悪魔がそう言つと、ヒロシは慌てて、

「わかつてゐるよ。報酬だらう? もちろん、報酬は払つむ。でも、

命と若さはダメだ。他の何かにして欲しいんだ」

悪魔は暫くヒロシをジッと見ていたが、ニヤリとして、

「わかつた。命と若さ以外のもの、だな?」

「そうだよ」

ヒロシは悪魔に拒否されると思つたが、そうならぬようなのでホツとしていた。

「よし、報酬はそれでいい。さて、もう眠れ。目覚めたらまた昨日の朝になつている」

悪魔はそう言つと姿を消した。ヒロシは呆然としたままベッドに入り、そのまま眠りに落ちた。

ヒロシは母親が階段を駆け上がつて来る音で目を覚ました。

「ヒロシ、いつまで寝てるんだい? 日曜は昨日だったんだよ! 早く起きな!」

部屋のドアの向こうから大声が聞こえた。ヒロシは喜びに沸いて飛び起きた。

（やつたぞ！ あれは夢じゃなかつたんだ！ 僕はまた月曜にいるんだ！）

彼は急いで着替えをすませ、朝食も食べ、弁当も持つて余裕をもつて出かけた。

（へへへ。全てがうまくいってるや。良かつた。これでの子にも笑われないですむ）

彼は得々として学校へ向かった。

遅刻をしなかつたので先生には怒られなかつたし、靴下を履いていたので友達にも笑われる事はなかつた。

（そうだ。時間割は会わせて来なかつたな。英語の教科書は隣のクラスの奴に借りるか）

こうしてヒロシはやり直した「今日」を無難に過ごし、大恥をかかずにするんだ。

そして帰り道。やはりヒロシはマサオと一緒にだつた。

「今日はついてたなア。英語の教科書を忘れたのを思い出して、すぐにお借りに行つてうまく切り抜けたし、あの子とも話ができたし・・・」

「あの子つて、菅原美樹子か？」

「ああ」

ヒロシはニコニコしながら応えた。マサオは鼻で笑つて、「そんなに嬉しいのかよ、あんな女と話を出来た事がぞ」「何だよ、その言い方は？ お前はあの子の事、嫌いなのかな？」「別に取り立て好きつて訳じやないな」

マサオはすました顔で言つた。ヒロシはその時、（こいつが教えてくれたんだつけ。礼を言わないとな）と思ひ出し、

「お前のおかげでうまくいったんだ。感謝してるよ」

「えっ？ 何言つてんの？ 大丈夫か、頭？」

マサオはへラへラ笑いながら尋ねた。ヒロシはハツとして、

（ そ、うか、こ、い、つ、は、あ、の、事、を、知、ら、ない、マ、サ、オ、なん、だ ）

と氣づき、

「あ、いや、何でもないよ。勘違いしたんだ」

「お前はドジだからなア。今日ドジらなかつたのが不思議なくらいだ」

マサオの言葉にヒロシは苦笑いした。

（ そ、う、さ。俺にとつて「今日」はやり直している「今日」なんだ。ドジつてたまるかよ ）

そして夜になり、ヒロシは心ウキウキでベッドに入り、眠つた。

翌朝・・・のはすだつた。ヒロシは母親が階段を駆け上がつて来る音で目を覚ました。

「ヒロシ、いつまで寝てるんだい！？ 日曜は昨日だつたんだよ！ 早く起きな！」

ヒロシは驚愕して飛び起きた。

（ バカな・・・。今日はもう火曜のはずだ。火曜だ・・・。今日は火曜のはずなんだ！ ）

ヒロシはベッドから出て、階段を駆け下り、母親を捕まえて、

「今日は何曜日？ 火曜日だろ？」

すると母親は呆れて、

「何寝ぼけてるんだい？ 今日は月曜！ しつかり顔洗つて目エ覚ましナ」

「そ、そ、んな・・・。そ、んな、事、つ、て・・・」

ヒロシは目眩を起こしてその場に倒れてしまった。

「ヒロシ！ ヒロシ！ どうしたんだい？」

叫ぶ母親の顔がいくつもにも見え、グルグル回り出した。やがて

彼は氣を失つた。

ヒロシは真っ暗な空間で気がついた。彼は頭を左右に振り、ボンヤリとした眼をこすり、辺りを見回した。しかし見えるのは暗闇だけだった。

「こには・・・？」

ヒロシがそう呟いた。するとその時、遙か前方から蠟燭の明かりが近づいて来た。光はやがてその持ち主の姿をくっきりと映し出した。それはヒロシが呼び出した悪魔だった。ヒロシは恐怖より先に怒りが湧き、悪魔を睨みつけて、

「酷いじゃないか！ また月曜日だなんて・・・。やり直しの今日は1日だけでいいんだ。早く何とかしてくれ」

と言い放つた。すると悪魔はニヤリとして、

「私はお前の提示した報酬を貰つただけだ。その結果、こういう事になつたのだ」

「何だつて？ 一体どういう事なんだよ？」

ヒロシには何が何だかさっぱりわからなかつた。悪魔は蠟燭の明かりをヒロシに近づけて、

「お前は、命と若さを奪つたと言つた。命も若さも奪つてはいけないのなら、お前を一定の時間内に留めるしかなかろう」

「そ、そんな・・・」

ヒロシは自分が言つた事が原因になつていると知つて、頭をガン

と殴られたような衝撃を受けた。

「私はお前の要求を呑み、報酬をもらつた。私とお前との契約はこれまで完了した。後はお前がどうするか考えろ」

悪魔はそう言つと、高笑いをして闇の彼方に消えてしまった。

「お、俺は取り返しのつかない事をしてしまつたのか・・・？」

ヒロシの耳にまた母親が階段を駆け上がる音が聞こえて来た。そしてヒロシは目を覚ました。彼はベッドの中にいた。

「ヒロシ、いつまで寝てるんだい！？ 日曜は昨日だつたんだよ！

早く起きな！」

母親の声が聞こえた。ヒロシは布団を被つた。  
( 今日は水曜だ！ 水曜のはずだ！ )  
それはヒロシの断末魔にも思えた。

## 峠の首なしライダー（前書き）

バイクが怖い人は読まない方がいいです。

幽霊がいる。

そういう評判のある峠は多い。

俺は全くそういう存在を信じていない。

後輩は昔から靈の存在を信じてあり、所謂「心靈スポット」によく出向いていた。

俺もたびたび誘われたのだが、全て断わっていた。

ある日、俺が心靈スポットに行かないのは、怖いからだという噂が立っている事を知った。

その噂は聞き捨てならない。

俺はその不名誉な噂を払拭するために、後輩と二人である峠に行く事を決意した。

その峠があるのは、G県T市。元はH町だったところ。

合併でT市に編入されたのだ。

その峠は昔から有名らしく、多くの田撃談がそれ系の雑誌に掲載されている。

後輩はその体験談を読み、その峠が一番凄いとこの結論を出し、俺を誘つて来た。

「怖がり」とこの汚名を雪ぐためには、一番凄い心霊スポットに行くのが一番だ。

これで俺が怖くて行かないなどは一度と言わせない。

出るのは「首なしライダー」らしい。

そのポイントで、携帯で自分を撮影し、制覇した事をメールで送る。

そうすれば、俺の不名誉な噂は消えてなくなる。

そう考えた。

数日後、俺の運転でG県T市に出かけた。

高速を飛ばせば、都心から一時間だ。

それにしても結構山奥だ。ま、峠だから当然なのが。

俺達が出向いた峠は、H山へ通じている。

全国的に有名な靈山だと言つ。俺は全然知らない山だった。

首なしライダーの靈は、地元の走り屋の靈らしい。

H山は、走り屋のメッカでもあり、峠を攻める連中がたくさんいる。

俺には、靈よりもそいつ等の方が鬱陶しい気がした。

やがて俺達は現場に到着した。

「確かに、最後のカーブのところです。今でも花束が置かれているらしいですよ」

すでに後輩はビビりまくっていた。

「そうか。じゃ、その花束の前で撮るか

「ええっ！？ マジっすか？ やばいっすよ、それ。それはやめま  
しょう！」

後輩は泣き出しそうな顔で言つた。俺はそんな反応に苦笑して、

「なら、お前は車の中で待つてろ。俺一人で写真撮るから」

「は、はい」

後輩は青白い顔で答えた。

俺は車を降り、カーブの端に手向けられた花束の前まで歩いた。

何も起こりない。

やつぱつじや靈なんていないので。

やうだ。どうせなら、『写真じゃなくて動画にしよう。その方がいい。

俺は花束の前に立ち、携帯で撮影をした。

「どうだ。何も起こりやしない。靈なんていないので。まあ見ろ

俺は高笑いをしてから、撮影をやめ、車に戻った。

「何て事言つたんですか、先輩。もう俺、知りませんよ

「バーカ、何も起こるかよ。気の小さい奴だな

俺はどう撮れているのか確認するため、動画を再生した。

おお。よく撮れてるじゃないか。

俺はニンマリして見入った。

むつ?

何だ? 後ろから何か来るぞ。

おかしい。さつきは俺以外誰もいなかつたはずだ。

オートバイだ。もの凄いスピードで走つて来る。

どういう事だ？

撮影した時、オートバイなんて走つていなかつた。

まさか……？

次の瞬間、俺はオートバイのライダーの首がないのを知つた。

そして、そのライダーが大きな鎌を振り上げているのも。

ヒュン！

鎌が空気を斬り裂く音がした。

次に、俺の首が斬り飛ばされて転がるのが映つた。

「嘘だ！」

それが俺の最後に発した言葉だつた。

俺の首は斬り飛ばされ、運転席の足下に転がり落ちた。

そして最後に目にしたのは、首のない俺の胴体だつた。

## 仕事帰り（前書き）

ある人に聞いた実話を元に再構成し、若干脚色しました。  
怖がりな方はお読みにならないように。

## 仕事帰り

俺は今でも忘れない。

生涯で一番の恐怖体験。

何であんなことになつたのかと、未だに不思議でならない。

俺はまだ高校生。

大工の親父の手伝いを休みの日にしていた。

親父は後を継いで欲しいらしいのだが、絶対にそれを俺に言わない。

だが酔っ払った時には、お袋には愚痴混じりに話す事があるようだ。

申し訳ないが、俺は手伝いはするが、継ぐつもりはない。

俺は大工ではなく、建築設計士か、宅地建物取引主任者になるつもりだ。

生まれつき、あまり丈夫でない俺は、肉体労働は無理だと思つている。

親父もそれがわかっているから、俺には言わないのだろう。

その日は翌日が雷雨の予報だったので、遠い現場だったが無理をして日没過ぎまで仕事をした。

親父のトラックと一緒に現場に行っている俺は、先に帰る事も出来ず、親父の仕事が終わるのをトラックのそばで待っていた。

夏休み目前だったが、梅雨が明け切っていなかったためか、まだジトジトした空氣で、周囲はまだ暗くなかった。

「うん？」

俺は何気なく荷台に目を向けた。視界に人影が入った気がした。

「あれ？」

誰かがトラックの荷台で作業してゐるのか？

俺はそう思い、そして気に留めずに親父を待つた。

やがて親父達は雷雨対策を終え、トラックのところに来た。

「待たせたな。帰るか

「ああ

俺達は現場を離れ、帰路に着いた。

国道までの林道は1人ではとてもじゃないが通りたくない。

外灯もなく、対向車もまず来ない。

昼間でも鬱蒼と茂った木々のせいで、光があまり射さない。

道は普通車がやつとすれ違えるくらいの幅で、トラック同士だとどちらかが下がって広くなつて「い」ところで向とかやり過しますしかない。

「相変わらず、ここは嫌な道だなア」

俺が独り言のように言った。すると親父はニヤツとして、

「何だ、お前、怖いのか?」

「ち、違うよ。氣味が悪いって事だよー」

「ハハハ、同じだよ」

「けつ」

俺達はそんなわいもない事を言い合ひながら、林道を進んだ。

「おい」

「えつ?」

親父がルームミラーを見て言った。

「荷台に誰か乗っていないか?」

「まさか」

「いや、確かに誰かいるよ」

親父はそう言つとひそかに辺り着いた国道の路肩にトラックを停めた。

「ちよつと見て来てくれ」

「ああ」

俺は、面倒臭いな、と思いながらトラックを降りて、荷台を覗いた。

「誰もいねえよ。見間違いだろ?」

「ホントか? よく見ろよ。泥棒かも知れねえぞ。陰に隠れていな  
いか?」

「自分で見てみろよ。誰もいねえよ」

俺は苛ついて言い返した。親父は運転席から降りて、荷台に上が  
った。

「おかしいな。確かにさつき誰かいたんだが。気のせいだったのか  
な」

親父はどうしても見間違いだと認めたくないらしい。俺は、さつきの仕返しと思い、

「親父こそ、怖いんじゃないの？」

「バカヤロウ」

親父はムツとして運転席に戻った。俺は笑いを噛み殺して助手席に戻った。

トラックは何事もなく家に着いた。

「おい、車入れ替えるぞ」

「ああ」

親父は自分の家の敷地内では、よく俺を運転手として使う。免許がなくても問題ないからだ。

駐車場に止まっている乗用車を出し、トラックをバックで奥に入る。続いて俺が乗用車をその前にバックで入れる。

それはいつもの作業だった。

「先に行くぞ」

親父はトラックから降り、玄関に歩き出した。

「うひ

俺は乗用車に乗り込みながら返事をした。そして、駐車場に入れるために後ろを見た。

その時だつた。

「うわああああつー

俺は絶叫した。

運転席と助手席の間から、髪の長い女が顔を出していったのだ。

しかもその女は顔と首と肩までしか身体がなかつた。

俺は逃げた。

どこをどうやって逃げたのかわからなかつたが、気がつくと玄関の中へたり込んでいた。

「どうした?」

洗面所で顔を洗つていた親父が尋ねた。俺はやつと呼吸を整え、

「女、女が車の中……」

「は? 何言つてるんだよ?」

「と、とにかく来てくれ

親父はさっぱりわからないという顔で俺について来た。

しかし、車の中には誰もいなかつた。

「何だよ、今度はお前が見間違いか？」

「ち、違うって！」

見間違いなんかじゃない。あれは紛れもなく女。しかも、絶対生きてる女じゃない！

「取り敢えず、車入れないとな」

親父は固まつたように動けなくなつてゐる俺に呆れて、自分で乗用車を駐車場に入れた。

結局、その女はそれきり現れなかつた。

俺は自分の視覚に自信がなくなつた。

あつ！

確か、現場でも誰か荷台に……。

で、親父が帰り道で荷台に誰かいるつて言つて……。

違う。

見間違이じゃない。

ついて来たんだ。

やばい。

絶対やばいよ！

俺は夕食の時も後ろが気になり、トイレの時も振り返つてばかりいた。

風呂の時は、頭を洗う時、目を瞑るのが怖くて、シャンプーが目にしみた。

しかし、女は現れなかつた。

見間違い？ いや、それはあり得ない。

親父が見たのも多分あの女だ。

俺は恐怖のあまり、頭がおかしくなりそうだった。

1人になるのが怖い。

こんな感覚は、小学生の時以来だ。

深夜、俺は自分の部屋に戻り、布団を敷き、明かりを点けたまま

寝た。

どれほどの時間が過ぎたのだろうか？

俺は何かが近くにいる気配を感じ、反射的に目を開けてしまった。

「…」

枕元に、肩から下がない女がいた。俺は驚愕のあまり、そのまま気を失った。

その事は親にも話せなかつた。

絶対に信じてもらえないと思つたからだ。

女はそれから一週間、毎晩出た。

死ぬ程怖かつたが、女は只覗いているだけで、何をするわけでもなかつたので、俺は何とか堪えた。

そしてある夜から、その女は出なくなつた。

何故なのかはわからない。

そして何故あの女がついて来てしまつたのかもわからない。

笛も気をつけてくれ。

今後ろにその女がいるかも知れないから……。

## 異能者 道明寺かすみ

道明寺かすみは予知能力を持つた異能者である。

彼女の予知能力は「予知夢」として発現される事が多い。

ある朝、彼女は学校で火事が起こった夢を見た。

「はつきりしない。いつ、どれほどの火事が起こるのだろう?」

かすみは不安に苛まされながら、登校した。

かすみが通っている女子校は、地元では有名なお嬢様学校だ。

通学路にはあちこちの男子校の生徒がひまつつき、場合によつては警備員が配置される事もある。

特に隣町には札付きのワルがいる高校があり、かすみ達も何度か「ナンパ」された。

しかし、彼等もかすみの「予知能力」を知つており、彼女の正体を知ると、まるで妖怪にでもあつたかのような速さで逃げ出すのだ。

「道明寺かすみと付き合つと死ぬ

そんな噂まで立った事がある。

かすみと付き合つと死ぬのではない。

かすみが交際した男子生徒が、偶々不運に見舞われただけなのだ。

但し、かすみがそれを事前に知っていたのは事実であったが。

「おはよう、かすみ」

「おはよう、あやね」

桜小路あやねは、かすみとは小学校からの同級生で、一番の親友である。

そして、あやねは数少ないかすみの能力を理解してくれている存在でもある。

かすみは朝の予知夢の事をあやねに打ち明けた。

「学校が火事？ それは大変ですね。何か考えた方が宜しくてよ」

おつとりとした性格のあやねは、のんびりとした口調で意見した。

「そつは思つただけで、いつ、どこで火事が起つるのかわからないの。今日なのか、明日なのかもはつきりしないわ」

「それは難しいですね。他の人達にも相談なさつたら？」

「そうね」

かすみはクラス担任の新堂みずほに相談する事にした。

みずほは日本史の教師で、かすみの能力を知つても、何の偏見のなく彼女に接してくれている。かすみの信頼は絶大なのだ。

かすみは学校に着くなり職員室に行き、みずほを探した。

「先生、新堂先生はどうちらですか？」

近くにいた男性教師坂出充に尋ねた。すると、

「新堂先生は今日はお休みだよ。聞いていいのか？」

「えつ？ 休み？」

かすみは妙な感覺に襲われた。

みずほは昨日休む話などしていない。

「わかりました。失礼しました」

かすみは職員室を出て、教室に向かった。

（あの先生、何度かみずほ先生を誘っている工口先生だし。何かある……）

かすみは自分の席に着くと、瞑想した。

彼女は予知能力を由らの意志で発現する時、瞑想を開始する。

「あつー。」

炎の向こうに「みづほ」が見えた。

「どうなさいとなのね」

「どうなさいたの?」

あやねが尋ねて来た。

「あやねさん、後で体育館に付き合つてくれない?」

「ええ、宜しくてよ」

あやねは、かすみの突然の申し出にキョトンとしたが、すぐに承諾した。

かすみは3時間目の授業を仮病で抜け出し、付き添いを装つたあやねと共に体育館に向かった。

「どうして」の時間ですの?」

あやねが不思議そうな顔で尋ねた。

「あこいつの空き時間だからよ」

「あいつ？」

「ワケは後で話すわ

かすみとあやねは、体育館の用具室の前に来た。

「ここですか？」

あやねは嬉しそうに言った。

「ええ。炎の向こうにみずほ先生がいて、そのそばに跳び箱が見えたのよ」

かすみが扉に手をかけた時、中からみずほ先生の叫び声が聞こえた。

「イヤアアアアアッ！」

「先生！」

かすみとあやねが用具室に入ると、縛られたみずほと、蠟燭と鞭を持った坂出がいた。

突然入つて来た2人に、坂出は狼狽えた。

「何をなさつているのですか、坂出先生？」

あやねが普通の調子で言った。その隙にかすみはみずほに駆け寄り、縄を解いた。

「何があつたのですか、先生？」

「坂出先生に薬を嗅がされて、気がついたらここに……」

「キャアアアッ！」

かすみがみずほと話していると、今度はあやねが坂出に捕まつた。

「お前でもいい、奴隸になれ！」

「何をなさるの！？」

あやねは激しくもがいた。そのせいで、坂出は蝋燭を投げ出してしまい、それが近くにあったマットの上に落ち、火が燃え広がった。

「何で？」

かすみが呆然としていると、みずほが

「そいつがさつき、変な匂いのする油を撒いたのよ。そのせいだわ

「何で事を！」

火は彼女達の想像以上に早く大きくなり、用具室に煙が充満した。

「へやうー。」

目的を達成できないと悟った坂出は一番先に逃げ出し、あわててとか、外からつかえ棒をして、3人を閉じ込めてしまった。

「扉が開かないですわ、かすみさん」

力一杯挑戦したあやねが言った。かすみはみずほを庇いながら、炎から逃れようと用具室の隅に行つた。

「そうか。だからどこでいつなのかわからなかつたのか…」

かすみは朝の予知夢の曖昧な理由がわかつた。

「かすみさん」

「道明寺さん」

あやねとみずほが不安でいっぱいの顔をかすみに向かた。

「大丈夫。助かるわ」

かすみは予知夢の続きをさつと確認していく。

だから自信があったのだ。

体育館から逃げ出した坂出は、このままではまずいと考え、学校から逃亡するため職員の駐車場に走つていた。

「しばらく行方不明になつて、ほとぼりが冷めた頃戻れば…」

坂出は自分の車のドアを開いて乗り込んだ。

「遅かつたですね、坂出先生」

助手席に、何故かかすみがいる。後部座席にはみずほ。

坂出は発狂しそうだつた。

.....'וְעַד־יְמֵי־עַד־יְמֵי־עַד־יְמֵי־עַד

「ハニカム」とですわよ、坂出先生。」

みずほの正拳突きが炸裂し、坂出はダウンした。

用具室の火事は、あやねの連絡で駆けつけた他の教師と多くの生徒の手で消し止められ、大事には至らなかつた。

そして坂出は、みずほに対する監禁と暴行の容疑で警察に逮捕さ

れた。

さて、かすみ達は、炎と煙に包まれた用具室からひたひたで脱出したのか？

かすみはテレポート能力も発現するようになつたのだ。

それを教室での予知能力によつて知つた。

その能力を使ってみずほとあやねを伴つたまま体育館の外に移動したのである。

「ますます男子に怖がられちゃつかな？」

そんな心配をしてしまつかすみは、『ぐく普通の女子高生にしか見えない。

## イライラ

最近彼はイライラしている。

仕事もつまくいっていない。

上司には叱責される。

家に帰れば妻には愚痴られ、子供には無視され。

何もかも消えちまえと思う程、イラついている。

その上、趣味で始めたインターネットの小説の投稿でもイラついている。

1人、ストーカーもどきがいて、彼がアップする小説全てを口汚く罵るのだ。

最初は「厳しい意見」と受け止めていた。

しかし、相手はエスカレートし、「生活態度が悪いのでは?」から始まり、人格否定にまで及んだのだ。

さすがにこれには彼もガマンできず、遂に反論した。

すると相手は、

「小説にはその人の品格や人生観が滲み出るものだ。貴方の小説は

貴方の全てを曝け出している」

と書いて来た。

彼はギクッとした。

確かに彼はイライラしながら、私小説的な物語を書いていた。

しかし、自分の事を書いているとは一言もコメントしていない。

見抜かれている。

彼は、このストーカーもどきの人物が、実は高名な作家なのではないかと思つた。

そう思つと少しは落ち着き、その厳しい批判を真摯に受け止められるようになった。

やがて彼の小説は賞賛されるようになった。

彼のイライラは收まり、仕事もつまづくようになつた。

ほんのちゅうとしたきつかけ。

それが彼を変えた。

彼は営業先が自宅の近くだったので、妻を呼び出し、昼食を共にした。

「どうしたの、今日は？ 偉く」機嫌ね

妻が言った。彼は照れ笑いして、

「そうか？」

妻は悪戯っぽく笑って言った。

「私の小説批評、当たってたでしょ？」

## ホラー作家の憂鬱

皆さんは信じますか？

怖い話をすると靈が集まつて来るといつ話を？

私は信じます。

何しろ、身をもつて体験してしまったのですから……。

私はしがないホラー作家、天道よし子。これ、本名。

デビューこそ華々しかつたけれど、その後は鳴かず飛ばずで、染みだつた編集者も月に一度連絡をくれればいい方だ。馴

そんな状態がしばらく続いたある日の事。

資料の中に妙に目を引く一冊の本があった。

「百物語」だ。

皆で怖い話を出すと、本当に怪異が起こるといつ話。

私はある出版社から短編の依頼を受けていた事を思い出し、

「書いてみるか」

とパソコンに向かった。

しかし、何も思いつかない。

怪異？ 妖怪？ 幽霊？

どうしよう？ もう編集部に電話して、

「すぐ書けますから」

と言っちゃったよ。困ったな。

あ。そうだ。この前、友人から心霊体験聞いたな。

それをアレンジして書きこいつ。

すると嘘のように書き進められた。

いつそオムニバス形式で、他の心霊体験も書いちやえ！

私は古びたネタ帳を机の引き出しから引っ張り出した。

心霊体験はいくつか取材してるので、五話や六話は書けそうだ。

何なら、編集部に売り込みをかけて、連載にしてもいい。

私は急に調子が出て来たのを不思議とも思わず、次々に書き進めた。

うん？ 何時間パソコンに向かっていたのだ？

時計に目をやると、深夜一時だ。

十時間くらいパソコンに食らいついていた事になる。

「さすがに疲れたな」

え？ 今、窓の外を誰か横切った？

夫は出張でいないし、子供達は修学旅行でいない。

誰？ まさか、泥棒？

もしそうだつたらどうしようつ？

その時私はギョッとした。

私がいるのは二階。窓の外はベランダがない。

つまり、人が横切る訳がない。

そんな……。

冷や汗が噴き出す。

ホラー作家だが、実体験はないし、本当は「超」がつくほど怖がりなのだ。

怖い話をするとい、靈が集まつて来るつて奴？

嫌だーつ！ そんなの絶対に嫌！

私は震えが止まらなくなり、パソコンの電源もそのままに部屋を出た。

そして家中の明かりを点け、鍵という鍵をロックし、外が見えないよう全部カーテンを閉じ、家の中央にある居間に陣取った。

ついでにお香を焚き、数珠を持ち、お経を唱えた。

まるで「耳なし芳一」だ。

しかし、それは取越苦労に終わった。

結局何も起こらないまま、夜が明けた。

私はよくあるパターンを知っていたので、本当に朝なのか、テレビをつけて確認した。

あの暑苦しい同会者が気持ち悪い笑顔で映った。

確かに朝だ。何もなかつた。

ある訳がない。あんなの、作り話なんだから。

私は自分の大袈裟加減を恥じ、部屋に戻つた。

「あら？」

パソコンがメールの受信を知らせていく。

「誰から？ もう編集部から催促？ まさかね」

私は差出人不明のメールを開封した。

まさしく息を呑んだ。

「先生のお力になれて良かつたです」

何？ 誰？ 本当に何か来ていたの？

そのメールは誰が送ったものなのか、未だにわからない。

でも一つだけ考えていることがある。

あの話が見事採用されたら、お礼をしよう。

どうすればいいのかわからぬけど、きっとメールで教えてくれるだろ？。

これからもよろしくね、ビビの誰かわからぬけど、親切な方。

江戸時代の頃の事。

長く浪人をしている男が町の裏通りを歩いていると、一人の少女が泣いているのを見かけた。

男はその少女のそばを一度は通り過ぎたのだが、どうも氣になつて仕方がないので、踵<sup>きびす</sup>を返して少女のところに戻つた。

「どうした、何故そのように泣いておる?」

「親の仇を探して、国元を離れて江戸までまかり越しましたが、どうにも見つからず、銭もなくなり、途方に暮れて泣いております」

背中を向けたままで、少女はしつかりした口調で答えた。男は不憫に思い、少女のそばにしゃがんだ。

「どうか。それは難儀な事だな。親の仇を探しておるのか。それで、その仇の人相風体は知つておるのか?」

「わかりませぬ」

「わからぬ? それでは探しよつがないぞ。随分と無鉄砲な事をする女子<sup>おなこ</sup>じやな」

浪人は少女の行動を哀れに思った。親を殺され、気が動転し、後先の事も考えずに国元を立つてしまつたのだろうと。

「でも、一つだけわかる事が『ござ』います」

少女は泣き止んで言つた。浪人は少女の顔を覗き込んだ。

幼いながらも、美しい顔立ちだ。立ち居振る舞いからして、武家の娘であろう。

「わかる事？ 何がわかるのじゃ？」

「匂いに『ござ』います」

「匂い？」

これはまた面妖な事を申すと、浪人は眉をひそめた。

「はい。匂いに『ござ』います。これはしかと父母おやぢより伝えられまして『ござ』います」

少女はスースと浪人を見た。浪人はその少女の目の冷たさにゾクッとした。

「何！？」

浪人が退こうとした時、すでに彼の脇腹は少女の右手の鋭い爪で斬り裂かれていた。

「グウッ……」

浪人は何故と問おうとしたが、声にならない。少女は氷のような眼で尻餅をついた浪人を見下ろし、

「わからぬか、お前は？ 私の父母はお前に殺されたのだ。仇、討たせてもらひやがれ」

「……」

浪人はようやく少女の正体を知った。

「ま、ま……」

しかし言葉にならない。少女は背筋が寒くなるような笑みを浮かべて、

「そうだ。お前に殺された、野良猫の子だ。お前も血反吐を吐いて死ぬるがいい！」

「ゲホッ……」

少女の鋭い爪が浪人の首を抉つた。

そのまま仰向けに倒れて、浪人は息絶えてしまった。

そして数日後。

町の裏通りで、浪人姿の男が蹠つていた。

「どうなさいました、お武家様？」

通りかかった商人が声をかける。

「仇討ちをしたいのであるが、仇の人相風体がわからぬ。どうすれば良いのか教えてくれぬか?」

そう言って振り返った浪人は、首がパッククリと斬り裂かれていて、喉から子猫が顔を出していたと言う。

T市の団地群の一つの棟の五階に、佳子は住んでいる。

彼女には二つ年上の夫と、今年三歳になる男の子がいる。

「寒い寒い」

年が明けてようやく冬らしくなり、朝晩の冷え込みが厳しくなつた。

一昨日から故障している湯沸かし器のせいで、彼女は大鍋にお湯を沸かして洗い物を使っていた。

「さてと」

朝食の後片付けをすませ、風呂掃除をし、洗濯物を全自动洗濯機に放り込む。

佳子は居間のソファにグターッと寝そべつた。

「テレビ、テレビと」

リモコンを操作し、電源を入れ、いつも見ているチャンネルに合わせる。

途端に画面に映つたのは「連續婦女失踪事件を追う! 事件の真相を透視する美人靈媒師!」といつ字幕だった。

「またア。嘘臭いわね」

佳子はテレビを消すとリモコンを投げ出し、ソファから起き上がりてキッチンに行つた。

「もうこんな時間か」

壁に掛けられた時計は、十時五十分を指していた。

「お昼ご飯は何にしようかな」

佳子は冷蔵庫のドアを開いた。

ところがそこには卵が三個、使い切ったマヨネーズ、ほとんどの身の入っていない焼き肉のタレの瓶、少しヨタつたトマトが二個あるだけだった。

「あらま、いつの間にこんなに片付いちやつたのかしら? 買い出

しに出かけなくちゃ」

彼女は寝室兼子供部屋に行つた。

男の子が携帯ゲーム機を動かして遊んでいる。

「勇、<sup>ゆう</sup>お出かけするからゲーム終わりにしてね」「はーい」

勇と呼ばれた男の子は、ニッコリ笑つてゲーム機をおもちゃ箱の中に片づけると、

「お母さん！」

と佳子に飛びつき、二人で部屋を出た。

「お父さんがチャーリンゴで行つたから、ブーブーで行けるよ、勇」「わーい！」

佳子は勇を伴い、玄関を出た。

その時彼女は、ずっと離れた同じ階の部屋に、マネキンの脚のようなものが入つて行くのを見た。いや、見た気がした。

「何だろ、今のは？」

佳子が思案していると、勇がたまりかねたのか、「早く行こうよオ、お母さん」

と手を引いた。佳子はハツとして勇に目をやり、

「ああ、ごめん。行こつか

「うん！」

一人が反対方向にあるエレベーターホールに向かつて歩き始めた時、そのマネキンの脚らしきものが消えた部屋から、氣味の悪い人相の男が顔を出して廊下を見渡し、スー<sup>ツ</sup>とドアを閉じた。

しばらくして二人は近所の大型スーパーに着いた。

その時だつた。

「佳子じゃない？」

と声をかけられた。

佳子はハツとして振り向いた。

そこには彼女と同じ年頃の、大きなレンズの丸眼鏡を掛けたショートカットの美人が立っていた。

佳子はびっくりして、

「ミイコー、ミイコじやない！？」

「久しぶりね。それもこんなところで再会するなんて」

「そうねエ。貴女、相変わらずお勉強？」

佳子はミイコの右手にある紙袋を見た。

エキナカにある大手の本屋のものである。ミイコは頷いて、

「ええ。何としても現役合格したいのよ。でないと、私的人生設計が狂っちゃうわ」

「夢は大きく持たないとね」

佳子がおどけて言うと、ミイコは少しムツとして、

「夢じやないわよ。近い将来の現実。貴女が警察の『厄介になつたら、タダで弁護してあげるわよ』

「何よ、それ？」

今度は佳子がムツとした。やがてミイコは勇に気づいた。彼女はしゃがみこんで、

「あら可愛い。この前会つた時は、お猿さんみたいだつたのに」と勇の頭を撫でた。勇は佳子を見上げて、

「お母さん、このおばちゃん、だアれ？」

「あらま、憎らしことを！ 私はね、お母さんと同級生なのよ」

ミイコは勇のほっぺを突つついて言つた。勇はキョトンとして、「ドウキユウセイつて何？」

「あつ、そつか。お母さんとね、年が一緒なのよ」「じゃあやつぱりおばちゃんだ」

勇は笑つた。ミイコもつられて笑い、

「貴女も随分老けて見られてるのねエ」

と佳子を見た。佳子は溜息を吐いて、

「子供の年齢感覚つてわからないわ。先輩が遊びに来ると、『お姉ちゃん』って言うのよ」

「まあ。どういう感覚してるの、勇君？」

「ミイコは勇見た。

「人はその後もとりとめないこと話をしながら、買い物をしました。

「ねエ、ミイコ、これから大学に戻るの？」

「いいえ。今日はもうおしまい。帰るわよ」

「なら私たちに来ない？」

「あら、いいの？」

「ミイコは勇見た。

勇はまだミイコをちょっとばかり怖がっているようだ。

私も夫の聖司も眼鏡をかけていないせいかも知れない、と佳子は思つた。

「勇君は賛成してくれるかな？」

「いいわよね、勇？」

と佳子は勇の頭を撫でながら尋ねた。勇は佳子を見上げて、

「いいよオ。お母さんのお友達でしょ？」

「よし、これで決まり。さて、駐車場に行きましょうか

今度はミイコが尻込みした。彼女は苦笑いをして、

「け、佳子、まさか貴女、ここまで車で来たの？」

「そうよ。勇を連れて歩いて来られるわけないでしょ？」

「そ、そうねエ……」

ミイコは顔を引きつらせたままである。佳子は変に思つて、

「どうしたのよ？」

「だ、だつてさア、半年かかって、それもお情け同然で卒検受かつた貴女の運転がどんなものかってことくらい、私だつて知つている

のよ」

「あつ！ 私の運転技術を信用してないってこと？」

「そこまでは言つてないわよ」

ミイコは佳子に詰め寄られてタジタジである。そして考えあぐねた挙げ句、解決の糸口を掴んだ。

「やうそう。やつぱり行くわ。最近物騒なのよね、この辺。痴漢出まくりだし。ブティックとかデパートのマネキンがよく盗まれてるらしいの」

「マネキンが?」

佳子は出かける時見かけたマネキンの脚のようなものを思い出した。

「何か思い当たることでもあるの?」

「い、いえ、別に……」

ミイコは佳子の反応に納得していない様子だった。

ほどなく三人は団地の駐車場に着いた。

「あーっ、やっぱり怖かった。猫が飛び出した時は、猫より貴女の悲鳴に驚いたわ」

「仕方ないじやない! 黒猫だったんだもの。何か不吉なことが起こらないといいけど」

佳子が神妙そうに言つて、ミイコは田を見開いて、

「あらま、貴女ってそういうこと気にするタイプなの?」

「そう。どうもそういうのって、気になつちやうのよね」

佳子達はエレベーターホールに向かった。

「早速不吉なことが起つたわね」

とミイコが言つた。エレベーターが故障中になつていたのだ。

「出かける時は動いていたのに。ホント、嫌だわ、黒猫」

「ハハハ」

ミイコは佳子の言葉に苦笑した。

三人が五階の佳子の部屋に着いた時、時計は十一時を回っていた。

「大変大変、お昼の用意しなくちゃ!」

「私も手伝うわ」

とミイコが言つと、佳子は満面の笑みを浮かべて、

「遠慮してくれ、オロゲのミイコさん」

——あー！

「今度はミイコが止めを刺された。彼女は肩を竦めて、  
「わかつたわよ。貴女、性格はともかく、料理はおいしいもんね」  
「何よ、その言い方は?」  
「まアまア」

マイコはキツチンから逃げ出し、リモコンでテレビをつけた。ちょうどワيدショーで婦人連続失踪事件をやっているところだった。マイコは貰つて来たお菓子を一つ頬張り、

「まだやっているノーノ二糸ノの後はせうこればこがりねニシムさりだわ」

「ええ？ 何か言った？」

「何でもないわよ」

と答えた。勇は//「コから離れたといひでとてもわかるとは思えな  
いが、おじいちゃんがおじいちゃん。

「つまり、女性の失踪している場所、時間はバラバラでも、その女

性達の住んでいたところと一致が見られるところですね?」

に目を向いた。

「そうなんですが、その住んでいたところといふのが、丁市にある田地なんですね」

女性レポーターが見せたパネルを見て、ミイコは仰天した。

「あつ、あの写真、この辺の畠地じゃない？」

佳子は包丁を片手に居間に来た。そしてテレビに近づき、

「ホントだ。あれ、この辺よ。どうしよう？」  
注んでるってことだわ。

「うーん。怖いわね。マネキン泥棒どーひじやないわ」

ニイコと佳子は顔を見合せた。

勇が不思議そうに一人を見上げて、

「どうしたのオ、お母さん、おばあちゃん？」

「それがね……」

と佳子が説明しようとした時、玄関のチャイムが鳴った。

「はーい」

佳子はドアに小走りで近づき、チャーンを掛けてから開いた。

「お昼時に失礼します」

そこに立っていたのは、制服姿の若い巡査だった。いわゆるおまわりさんだ。

「実はここ何日かの間に、あちこちでマネキン人形が盗まれているのを」存じですか？」

と巡査は切り出した。佳子はチラッとミイコを見てから、

「ええ。それが何か？」

「そのことで、ここの中の方々が何人か、マネキン人形を運んでいた男を目撃したというのです。一応店からも被害届が出ていますので、こうして団地の方にお伺いしているのです。奥さんはそのような男を見かけたことはありませんか？」

佳子はマネキンの脚のことを思い出した。そして、「男の人は見かけていませんけど、マネキンの脚のようなものがある部屋に入つて行くのを見かけた」とはあります

「それはどの部屋ですか？」

巡査は手帳にメモを取りながら尋ねた。佳子は、

「同じ階の一一番端の部屋だと思います。ただ、はつきりと見たわけではないので」

と自分の証言の重大さに気づき、逃げ腰に答えた。しかし巡査は、「ちょっとど」一緒に願えませんか？ その部屋の方にお話を伺いたいので

「ええつ？ 私も行くんですか？」

佳子は不安そうにミイコを見た。ミイコは、

「勇君は私が見てるから。もしその人がマネキン泥棒なら、早く捕まえた方がいいし、そうじゃないなら、それも早くはつきりした方

がいいわ

「うーん」

巡査は真剣な顔で佳子を見ている。佳子は、「じゃ、行きましょうか」

「はい。ありがとうございます」

二人は廊下を歩き、その部屋の前に来た。

表札が出ている。「慶道寺真介」と書いてあつた。

「随分厳めしい名前ですね」

佳子のはるか上で巡査が言った。

二人の身長は三十センチくらい違っていた。

巡査は佳子に田配せしてから、チャイムを鳴らした。

「何ですか？」

ドアが少し開き、むさ苦しい無精髭の男が顔を出した。巡査は、「実はこの団地にマネキン人形泥棒がいるんです。貴方はそのような男を見かけていませんか？」

「いいえ、見たことありませんね」

男はドアを閉めようとした。巡査はそれを手で制し、

「ちょっと待つて下さい。貴方の部屋にマネキン人形の脚が入つて行くのを見かけた方がいるんですよ」

男はしばらく黙つていたが、やがて大笑いし始めた。

「何がおかしいんですか？」

巡査はムツとして言った。しかし男はニヤニヤしたままで、

「入りな。俺はマネキンなんか盗んでいねえよ」

とドアを開いた。巡査と佳子は導かれるまま中に入った。

「何この臭い？」

佳子はハンカチで口と鼻を押さえた。巡査も手で口と鼻を覆いながら、

「何でしちゃうね？」

男は部屋を仕切っているカーテンの前にいた。

「この向こうには俺のコレクションがある。これを見れば俺がマネ

キン泥棒じゃないってわかるさー！」

と男はカーテンを引いた。そこには美しく着飾つたマネキンらしきものが三体立っていた。

「やつぱりマネキンじゃないか！」

巡査は怒りの目で男を睨んだ。しかし佳子は真っ青になつて、「お、おまわりさん、マネキンじゃありません！」「これ、人間、人間です！」

「！？」

巡査はびっくりしてよくマネキンらしきものを見た。

それは確かにマネキンではなく、紛れもなく人間であつた。

蝶で塗り固められた、女性の遺体だったのだ。

「どうだ、これで俺がマネキン泥棒ではないとはつきりわかつただるつー！」

男は勝ち誇つたようにけたたましく笑つた。

その笑い声は五階中の廊下に響き渡つた。

## 大食い食堂紀行

俺は自他共に認める大食いだ。

たくさんの選手権に出場し、優勝して来た。

海外でも栄冠に輝いた事がある。

但し、俺はプロのフードファイターではない。

あくまで大食いは趣味なのだ。

そんな俺が、もう一つの趣味であるインターネットで、今まで行つたことがない大盛りの食堂を見つけた。

場所は群馬県。東北地方だったかな？　どこだったか記憶が定かではない。

俺は地理が苦手で、関東地方の「一都六県」も知らない。

世間ではそれを「おバカ」と呼ぶらしいが、知らなくても生活に支障がない事を覚える方が「おバカ」だと思つ。

俺は実利主義者なのだ。

そんなわけで、俺は早速その食堂「大具井食堂」に出かけた。

東北地方なら東北新幹線で行けば着けるだろうと思い、東京駅から東北新幹線に乗った。

住所は群馬県大利根郡の士似神村外忽だ。凄い名前だ。  
じにがみむら がいじつけだ

しばらくすると車内販売のオバちゃんが来たので、コーヒーを買って、

「群馬県の大利根郡に行くにはどこで降りればいいのかな?」

と尋ねた。するとオバちゃんは大袈裟に驚き、

「お客様、群馬県大利根郡は新潟に行く上越新幹線に乗らないと行けませんよ。大宮で降りないと」

「え?」

まづい。もの凄いバカだと思われた。そうか、群馬は新潟なのか。

「ハハハ、そうだよね。群馬は新潟だよね」

俺はうつかり乗り間違えたフリをして笑って誤魔化したが、立ちはだかるオバちゃんの目は、可哀相な人を見る目だつた。

大宮駅で上越新幹線に乗り換え、俺は新潟に向かった。

まだ時間があるようだ。

一眠りするか。

俺はシートを少し傾けて眠った。

うん？

随分寝た気がする。

窓の外を見た。新潟駅に着いたようだ。

俺は改札を出て、タクシー乗り場に向かった。

「どうひらまで？」

運ちゃんが尋ねて来た。俺は落ち着き払つて、

「群馬県の大利根郡土似神村まで」

「は？ 本当ですか？」

運ちゃんは疑つよつた目で俺を見た。

「本当だよ。急いでくれ」

「でも遠いですよ

「かまわないよ。どのくらいかかりそつなんだ?」

俺は腕時計に手をやつて尋ねた。すると運ちゃんは、

「高速で飛ばして四時間でとりますかね」

「は? 四時間? そんなに遠いの?」

俺はビックリした。そんな辺鄙なところなのか?

「そんなにかかるのなら、新幹線で行った方が早いかな

「だと思こまよ。私はかまこませんが、お密やんもその方が安くすむでしちしね」

俺は運ちゃんの優しさに感動した。

「で、大利根郡はどの駅で降りれば近い?」

「群馬の大利根高原平駅で降りればすぐですよ、確か

「群馬? 群馬は新潟だよね?」

「違いますよ、群馬は群馬です。お密やん、どいかつお手でですか?」

「まーー。また何かやらかしたか?」

運ちゃんの手が車内販売のオバちゃんの手と回りこなつた。

「東京。群馬なんて行つた事がないからそ、どこにあるのか知らない  
くて」

運ちゃんの視線が痛い。可哀相な子を見る目だ。

「お客さん、今度はお友達と出かけた方がいいですよ」

俺は礼を言つてタクシーを降りた。

俺は結局もの凄い遠回りをしていた。

地理を知らない事は生活に大きな影響がある。

それに気づいた。

ようやく「大具井食堂」に辿り着いた時、すでに店は閉店していた。

俺は仕方なく近くの旅館に泊まり、次の日の朝再び出向いた。  
ところが店は開いていなかつた。

よく見ると張り紙がある。

「弊店はお客様に緊急入院された方がいたため、営業を停止されました」

俺は目まいがした。

## 告白

気の小さい私は、好きな人に告白できないでいた。

イジイジ考え、オロオロ歩き回った。

ウロウロした挙句、電柱にぶつかった。

ボンヤリして、側溝に落ちた。

同じ空間にその人がいる。

そう思つだけでドキドキした。

仲間にも話していない。

言えるはずもない。

止められるに決まっているから。

本当に秘密の片思い。

我ながら「キモい」と思った。

あの人の事を考えると、夜も眠れない。

あの人の声を聞くだけで幸せを感じてしまう。

重症だと思った。

末期症状だとも思った。

そんな私に酔っている自分がいる。

片思いでいいから、などと思つ私がいる。

本当にそれでいいの？

自問した。

悩んだ。

でもこつまで経つても答えは出なかった。

そんなんある日、朝のテレビの上などで、

「今日はハッピーな事がある日」

と言っていた。

些細なきつかけで未来が変わる事がある。

妙なところで前向きな私は、決心した。

「前からあなたの事が好きでした。付き合って貰って」と

あの人の前に回りこみ、思い切って告白した。  
でも無視された。

わかつていた。こうなる事は。

絶対に諦めない。

私達の間にある壁は高くて厚い。

でも必ず乗り越えてみせる。

犬が人間に恋しちゃいけない決まりなんてないんだから！

傷心旅行は氣をつけて（前書き）

ある企画に参加する前の練習作です。

## 傷心旅行は気をつけて

魅せられてしまった。

バリ島へ傷心旅行をした時の事だ。

露店で見つけた、まさに真紅の仮面。

そのまま吸い込まれそうな赤。新鮮な血の色にも似た衝撃的な色彩。

私はいくらのかも確かめずにその仮面を購入した。

それ程の金額ではなかったと思う。

手持ちの現金で買ったのだから。

すっかり興奮していて、記憶が飛んでしまっている。

思えばそれは前兆だったのだ。

私はその仮面を自分の部屋に飾った。

母は気味悪がった。父は趣味が悪いと言った。

しかし私は気にしなかった。

魅せられていたのだ。

いや、魅入られていたのかも知れない。

その夜、私はハイテンションのまま眠りについた。

夢を見た。

どこかの洞窟。周囲には誰もおらず、松明が四つ灯されてくる。炎が近いため、時々私に火の粉が降りかかる。

しかし、熱さは感じない。

何故こんなところに？

しかも私は何も身に着けていない状態で、平らな石の上に四肢を縛り付けられていた。

全部丸見えだ。

そうでなくとも情けない貧乳が、余計平らになつている。

な、何？

恥ずかしいよりも先に、恐怖が心を埋め尽くす。

夢から覚めた。ホツとする。

バリ島で見たファイヤーダンスの事が頭に残っているのかな？

そう思い、夢の事は忘れた。

会社の上司と同僚達にお土産を配った。

私はふと夢の事を思い出し、隣の席の真由美に話した。

「あんた、男に飢えてるんじゃないの？」

真由美はそう言つて笑つた。

「そ、そつかな？」

そうかも知れない。傷心旅行と言いながら、実は男を探していたのだから。

そう思い、それ以上夢の事を考えるのはやめた。

そしてその夜。

私はまた洞窟の夢を見た。今度は全裸の私を数十人の男達が取り

囲んでいる。

男達は皆、真っ赤な仮面を被つていて顔はわからない。着衣は全員腰巻のみである。

私はさすがに恥ずかしくなり、叫ぼうとしたが声が出ない。

そろばかりか、動くのは顔だけで、手も足も動かすどころか、感覚すらない。

いくら男に飢えているとは言え、このシチュエーションは変だ。そのうちに男達が奇声を発しながら、私の周りをグルグルと歩き出した。

よく見ると彼らは手に大きな斧を持っている。

何するつもりなの！？

そこで田が覚めた。

全身汗塗れだ。

あれ？

しかも、手首と足首には何かの痕が着いている。

「これは……」

縄で締められた痕だ。

私は怖くなつた。そしてアッと思い、壁の仮面を見た。

以前より仮面の色が濃くなつてゐる。

血が変色して赤黒くなるように。

私は思わず携帯を手に取り、時間も気にせずに連絡した。

相手は私の家の菩提寺の住職だ。

幸い住職はすでに起床していた。僧侶なら当然なのだが。

理由を話すと、住職はすぐにその仮面を持って来るよう指示した。

私は会社を休み、住職の待つ寺に出かけた。

「……」

住職は仮面を手にしたまま、しばらく何も言わなかつた。

「あの」

私は堪りかねて声をかけた。すると住職は、

「危なかつたですね。これは死仮面です。死んだ者の顔に被せて弔

いの儀式に使うのです

「ええ？」

私は住職の説明に仰天した。

「しかもこの仮面、より悪い事に何度も使われていてその死者達の念が取り憑いている

「そ、そうですか」

私が魅入られたのはそれだったのか。

「この仮面は私が供養します。貴方にはもう何も起こらなければす

「ありがとうございます」

私はよつやくホッとできた。

「これに懲りて、旅先で妖しげなものは買つてはいけませんよ

「はい」

最後に住職に痛いところを突かれた。

傷心旅行は国内にしどい。

やう思つた。

俺は自称グルメの男。

ラーメンにかけては相当数食しており、「通」に分類されてもいいと思つてゐる。

友人共は、俺のふくよかな下腹を見て、

「メタボ一直線だな」

などと悪口を言つ。

確かに最近はすぐに疲れるし、以前ほど豪快に食べまくることはできなくなつてゐる。

健康にも気をつけないと、妻と子供達が路頭に迷つ結果になりかねない。

これからは食べ歩きはめんどくさいよつ。

もう心に誓つた。

しかし、そんな誓いなどすぐ忘却にしちまつのが自称グルメたる所以であるつ。

早速新しいラーメン屋の情報をネットで入手し、場所を確認して出かけてみた。

そのラーメン屋は、商店街の片隅にあり、とても名店とは思えない雰囲気だった。

数をこなして来た人間ならではの勘だ。

失敗したかな、と思ったのだが、それでもここまで来たのだからと入口の引き戸を開いた。

「いらっしゃい」

店の中には客は一人もいない。

混雑を予想して時間をずらしたせいだろうか？

更に嫌な予感がした。

「何にしましよう？」

厨房には店主らしき老人がいて、考える間もなくそう尋ねられた。

「ラーメンを。ゆでたまご付きで

俺は一番無難な注文をした。

「はい」

老人は愛想が悪い訳ではないのだが、取り立てて印象がいい訳で  
もない。

俺は店内を見回した。

奇麗にされたカウンター。

雑誌が並べられている書棚も、雑然とではなく、整然としている。

店主が奇麗好きで、几帳面なのだろう。

すると急に期待が持てた。

もしかすると、本当に六場なのかも知れないと。

「お待ちどう様」

田の前にラーメンが置かれた。

「！」

スープの香りが鼻をくすぐる。

一口蓮華で掏つて飲んでみる。

凄い。

俺は大概の店の合わせ出汁を全部見破る自信があるのだが、これはわからなかつた。

魚の焼き干し、豚、鶏、何種類かの野菜。

水も違うのかも知れない。

しかしそれだけではない。隠し味に何か使われている。

それがわからない。

俺はまるで何かに取り付かれたようにスープを飲み、麺を啜つた。

完食。

不味ければ一口でやめるつもりだったが、スープも残さなかつた。

俺は満足感に浸りながら、店主に尋ねた。

「教えてもらえないでしょ？ けど、スープの隠し味に使つてるのは何ですか？」

店主はニヤッとして、

「隠し味なんて使つてませんよ。」く普通の組合せです

と厨房が暑いのか、ハンドタオルで汗を拭いながら答えた。

「すみません、失礼します」

店主は鍋が氣になるのか、踵を返した。

どうしても真相が氣になつた俺は、立ち上がって厨房を覗き込んだ。

まな板の上にあるのは、野菜の切り屑と包丁。

麵はどこかの製麵所から仕入れているものようだ。

もつと奥を見ようとした時だった。

「うーー」

こきなり店主に右手でアゴを掴まれた。

「お姫さん、覗かないで下をせい。困りますので」

「す、すみません」

店主の顔はわつきと変わっていた。

犯罪者。

言い過ぎかも知れないが、そのくらい口つきが鋭くなつていた。

「どうしても知りたいんですか？」

「い、いえ、それは・・・」

俺は怖くなつて逃げようとしたが、店主は意外に力があり、アゴを放してくれない。

「隠し味を教えてあげますから、口を開けて下さい」

「け、結構です」

「開けなさい!」

店主が怒鳴つた。俺は恐怖のあまり、口を開いた。

「隠し味知りたいんですね? これですよ、これ!」

店主は俺の口の中に左手の指を突っ込んで、舌を引き出した。

「あいれれ!」

俺は悲鳴にもならない情けない声を出した。

「特にグルメ白爛の連中のこれが、一番いい出汁が採れるのですよ!」

店主の手は血走り、右手には包丁が握り締められていた。

## 真紅の盃（前書き）

某覆面企画参加作品です。タイトルを参加時のものに戻してみました。

## 真紅の空

大坂の役の決着は戦国時代の完全終結を意味し、同時に徳川氏の天下掌握を意味する物でもある。

栄華を誇った豊臣家も僅か<sup>わずか</sup>二代で滅ぶ。

秀頼と淀殿は自害し真紅の血の海に倒れ伏した。

火が放たれて二人の遺骸を焼き、大坂城落城の炎で難波<sup>なにわ</sup>の夜空が真紅に染まつた。

その真紅の空は遠く京の都からも見えたと言つ。

大坂の役以降時代は変わつて行く。

戦乱の無い時代そしてやがては外国との交易を制限する鎖国。

明治以降百四十年余りであるが未だ江戸時代の長さには追い着いていない。

日本の文化や風俗の多くはこの時代の影響が色濃く残されており明治政府が最初にした事は徳川時代の破壊であった。

それは今思えば大変な暴挙である。廢仏毀釈等其の最たるものだ。政府そのものが命令したものではないとは言え、結果的にその威を借りて破壊行動に出た輩<sup>やから</sup>は無数である。

時代の変動は、時として人間を狂気に駆り立てる。「古き物是即ち惡」という余りに即物的な発想である。

何れにせよ、大坂の役が日本の歴史の転換点であった事は紛れもない事実である。

そしてその中心に居たのが徳川家康でありその家康の一一番近くで彼に仕えて来たのが本多弥八郎正信である。

天下太平。共に目指した物であった。

時には敵と味方に分かれた事もあった。しかし一人は紛れも無い友。戦友である。

駿府城。

徳川家康の隠居城である。

家康は在位僅か二年で將軍職を二男秀忠に譲り徳川家が征夷大將軍の継承者の家系である事を天下に知らしめた。

その実幕府の実権は未だに「大御所様」にある。

その駿府城に二人の戦友はいた。

日も暮れて蠅燭の灯りの中に老人の顔が二つ浮かんでいる。

「大御所様には大坂の戦の大勝利、誠におめでとうございます」  
深々と頭を垂れて本多弥八郎正信は言った。目尻の皺がその人生の深さを物語つている。

「畏まるな弥八郎。今ここには儂とお主のみ。樂にせい」  
暑い訳ではないが額に薄らと汗を滲ませた家康は微かに笑みを浮かべた。

肥え過ぎなのだ。

正信はにやりとした。

「はは」

家康の手招きに応じ彼は間を詰める。

「それにつけても千姫様のお命ご無事で何よりでした」

「ああ」

余り関心がない様な声である。正信は眉を顰めた。  
「あれは秀頼と淀殿の命を助けられと申した」

「はい」

「あの時のあれの眼が今でも瞼に焼き付いてある」

家康の感情は読み取れない。表情に全く変化がない。

それ故千姫の助命嘆願が苦々しかったのかどうか、正信には判らなかつた。

「お一人はご自害でござります故その」

「そうではない」

「は？」

正信は家康の考えが判らない。

「あのような顛末にしたのはいかに取り繕おつとも儂だ。千はその事を見抜いておる。それを責める眼だった」

「……」

正信は返答のしようが無い。千姫がそれ程の深い思いを抱いていたのか彼には判断しかねた。

「だが、もう忘れてしもうた。否、忘れる事にした」

「それが宜しいかと」

正信は再び深々と頭を下げて応じた。家康は苦笑いをした。

「お主は昔からそうだな。場を読んで言葉を選ぶ名人よ」

「滅相もございません」

正信は若干の照れ笑いをして答えた。

「お主だからこそ申すのだかな」

家康は声を低くして正信に言った。

「儂は別に徳川家の為に豊臣を討つた訳ではない」

「はい。承知しております。天下太平の為。日の本の民の為にござ

ります」

「流石<sup>さすが</sup>よのう弥八郎。お主がおつてくれたからこそ儂もここまで来られたのだ」

家康は顔を綻ばせた。家康は面と向かつてはあまり人を讃めぬ男である。

正信は涙が溢れそうになつたのを誤摩化す為顔を下に向けた。頬を搔くふりをしてそれを拭う。

「この太平がいつまでも続く事が儂の夢。しかしいずれ徳川も敗者となる日が来るのも世の必定」

家康の声は真剣そのもので戯れの言葉とは思えない。正信はびっくりした。

しかしそれは一百六十余年後現実の事となる。

「そのような事を…。大御所様のお言葉とは思えませぬ

正信の反論に家康は笑つた。

「儂はそこまで自惚れてはおらぬ。清盛公も頼朝公も尊氏公も皆我が世の春が終わらぬとは思われなかつたはず。あの太閤でさえもな」

「御意」

正信はその言葉に納得した。諸行無常。平家物語の件を思い出すまでもない。

「だからこそ儂は待つた。否、待てたのだ。いづれは儂の番が巡つて来ると思うてな」

家康の忍耐強さは有名である。一部創作の疑いすらある程苦労話が多い。事実創作はあるだろう。

「お待ちになつた甲斐がございましたな」

正信は晴れ晴れとした顔で言つた。家康はにんまりとして真紅の盃を掲げた。

「さて今宵は飲み明かそつかの弥八郎」

「はは」

正信も真紅の盃を掲げた。一人だけの酒宴が始まった。

家康は元和元年（一六一六年）の四月に死去した。  
享年七十五歳。

その直後正信は家督を嫡男の正純に譲り隠居した。  
そしてまるで家康の後を追う様にして同年六月死去した。  
享年七十九歳。

二人共当時としては長命であった。

## 真紅の盆（後書き）

企画参加当時、「上から田線過ぎる」と指摘いただきました。

多分、その理由は、私が明治維新否定派だからだと思います。

龍馬や大久保利通等の目指した日本とは違う道を歩み始めたのが明治だと考えていますので、その気持ちが作品に表れたのかも知れません。

ご不快な方は、どうぞご容赦下さい。

## 如月茜の冒険（前書き）

如月茜は、風の葵の主要キャラの一人。私が3人の中で一番気に入っている子です。

彼女達3人は、元々は忍者ではなく、泥棒でした。いろいろと試行錯誤の後、今の形になりました。

今回のお話は、茜が、まだ高校を卒業して専門学校に通っている時に出会った、ちょっとした事件です。

主な登場人物は茜の他、まだよく知り合う前の大原統。2人のその後を予感させる「運命的な出会い」です。

ちょっと長めです。

## 如月茜の冒険

面倒臭いなア。

いくらお嬢様の探偵事務所に入所するために必要だとは言つても、経理の専門学校なんて、頭がどうかしそう。

あ。そうか。今回は私が主人公なのね。やつた！

何て言つてる場合じやない。

私の名前は如月茜。「あわいわあかね」と読む。時代劇に出て来そうな名前だと悪口言つた奴は、この前高一い鉄塔の途中に取り残して、心の底から反省するまで下ろしてあげなかつたんだけど、確かにそうかも、とも思つ。

何故こんな名前なのかと言つと、私の家は忍びの家系。それも平安の昔から続く由緒ある忍び。

聞いた話だと、あの第六天魔王とまで呼ばれた織田信長でさえ、決して攻撃しなかつたとか。それほど強く、そしてそれ以上に誇り高い一族なんだつて。私にはよくわからないんだけどね。

自己紹介はそのくらいにしてと。

私はようやく慣れて来たカリキュラムをこなし、夏の暑い日差しを浴びながら、大通りの歩道をバイト先のコンビニに向かつて歩いていた。

「如月さん！」

どこかで聞いたような、間延びした男の声がした。

クラスメートの神保正行という、冴えない男子だ。経緯はよくわからないのだが、どうやら私は彼がちょっと怖いお兄さん方に絡まっているところを助けたらしい。全然記憶にない。

私は彼を助けたつもりはないのだ。

ただ、自分の家のゴミを私のバイト先のコンビニのゴミ箱に無理矢理詰め込んでいるバカ共にちょっとお説教をしてあげただけなのだ。

それ以来そいつらは、頼みもしないのにゴミ箱の掃除をしてくれるようになり、私の事を、

「姐さん」  
「あね

と呼ぶようになった。

極道の人じやないのだから、その呼び方はやめなさい、と注意したのだが、

「わかりました、姐さん」

と言い、全然理解してくれない。

おかげで私はコンビニの同僚達に恐れられ、店長にまで敬語で話しかけられている。

困ったものだ。

おつと。回想が長くなつたわね。  
戻ります。

「何？」

私は取り敢えず、面倒臭そうに振り返つて神保君に応じた。

彼はまさしく「昭和」の香りがしそうなくらい古い感じのする男だ。

端的に言い表せば、大昔の優等生というのが一番彼を的確に表す言葉だろう。

かけている眼鏡も実に昔臭い黒縁眼鏡だ。

「これからバイト？」

神保君は何故か顔を赤らめて尋ねて來た。私は彼の顔色が気になつたが、

「そうだよ。何か用？」

「あ、その、あの……」

いつもいただ。この男は、本当に何を考えているのか、何を話し

たいのかよくわからない。

私はイラッとして、

「ねエ、私、急いでるんだけど?」

と声のトーンを上げて言った。神保君はビクツとして、

「いや、いいんだ。急いでるのなら、いいんだ。じゃ」

と言ひと、クルリと私に背を向けて、まさしく逃げるよひに走り去つた。

「何よ、あいつ?」

頭の中がはてなマークでいつぱいになるのを何とか打ち消し、コンビニに向かつた。

「お疲れ様でーす」

私は裏口から事務室に入り、そこで何かの計算をしている店長に挨拶した。

「あ、お疲れ様です、如月さん」

店長はまるで社長でも現れたかのようにアタフタとして立ち上がり、私に挨拶した。

そんな店長のリアクションにももう慣れたのだが、何か怖がられているようで嫌な感じだ。

私はそのまま隣の女子更衣室（とは言え、ロッカーが三つ並んでいるだけの実に狭い空間）に行き、制服に着替えた。

「今日は棚卸しでしたつけ?」

事務室に戻るなり、店長に尋ねた。

また店長はアタフタと立ち上がり、

「そ、そうですね。今日から三日間、棚卸しをお願いします。基本的には、本部がほとんど管理しているので、我々は実在庫を報告するだけですから、それほど大袈裟に考えないで下さいね」

「はア」

店長はどう見ても40代のオジさんだ。

私はまだ19歳。へタすれば親子程も年齢が違うのである。

それなのに、私に敬語。

「あの、店長」

「な、何ですか、如月さん？」

店長は職員室に呼び出された中学生のような顔で私を見た。

私は呆れ気味に、

「敬語、やめてくれませんか。何か落ち着かないので」と提案した。しかし店長は顔を引きつらせて笑い、

「そ、ですか。如月さんが気になるのなら、やめましょうか。でも、私は基本的にこういう話しか方なんですけどね」

「……」

私は苦笑いした。

店長は他のバイトには怒鳴つてばかりいる。

いつも命令口調。だから実に白々しく聞こえたのだ。

「あっ、タイムカード！」

打刻していないのを思い出し、事務室の隅にあるタイムレコーダーのところに行こうとすると、

「大丈夫ですよ。私がしておきましたから」と店長が言った。私はホッと溜息を吐いて、

「ありがとうございます」

と頭を下げるから、店内に歩を進めた。

今のは、私の前に2人のバイトの子が入っている。

そのうちの1人が、あと30分で退店。

もう1人はこれから3時間私と一緒にだ。

その子は専門学校のクラスメート、今坂理美。

ちょっと見た目はヤンキーフぽいが、実はお金持ちのお嬢様らしく、言葉遣いはTPOで使い分けられる子だ。

私のことをただ一人、偏見なく見てくれる親友である。

「お疲れー！」

と私が陽気に声をかけると、理美は「コッとして、

「お疲れー。今日は何時まで？」

「10時まで。今金欠で、稼がないとならないの」

「ハハハ」

こんな会話は、理美としかできない。

以前他のバイトの子に、

「お金なくて」

と冗談で言つたら、顔を引きつらせて、

「い、今は持ち合わせがこれしかなくて……」

と財布からお札を出された事がある。

恐喝したわけじゃないんだけどね。

「いらっしゃいませーー！」

自動ドアが開くと同時に、私達3人の声が店内に響く。

私はレジ、理美は倉庫の荷物整理、そしてもう1人のヒヨロヒヨロした男子は、消費期限のチェックを始めた。

「あっ」

入つて来たのは、男1人。

その人は私の苦手な人。

一見、公務員風のイケメン男子なのだが、ちょっとと性格に難がある。

どうやら、「ロリコン」らしいのだ。

えつ？ 何で苦手なのかつて？ 説明したくないなア。ま、仕方ないか。

その男の人の名は「大原 統」<sup>はじめ</sup>。

警察関係の人らしいのだが、最初に来店した時、私の事を中学生と思つたらしく、二二二二口して近づいて来たのだ。

「君、いくつ？」

いきなりそんなこと聞かれれば、普通の女の子ならびっくりして叫んでしまうだろう。

でも私はその時大原さんがそんな人だとは思わなかつたので、

「19歳です」

と即答した。すると大原さんはまさしく仰天したらしく、しばらく

私の顔をマジマジと見てから、

「そう。中学生かと思った。『ごめんね』  
と言い、また二コ二コして買い物をすませ、帰つて行つた。  
それだけなら何の事はない。

たまにいる変な客ですむ。

ところが大原さんは、それから毎日店に現れるようになつた。  
しかも必ず私がいる時。

たまに私のシフトが変わつて不在だと、理美達に尋ねるらしく、  
あの子は何時に来るのか、と。

理美達も最初は面白がつっていたのだが、段々危険を感じたらしく、  
「茜、店長に相談した方がいいよ」

と忠告してくれた。しかし私はそんなことはしたくなかったし、別  
に大原さんに危害を加えられるとは思わなかつたので、

「大丈夫だよ」

とだけ答えて、店長には何も話さなかつた。

「やア、茜ちゃん。元氣？」

大原さんはまるで友達みたいな口調で話しかけて來た。私は苦笑  
いして、

「いらっしゃいませー」

と応じた。

大原さんは二コ二コしたまま雑誌コーナーを通り過ぎ、一番奥の  
飲料コーナーでいつもの紅茶を取り出し、戻りながらパンの棚のあ  
んぱんとサンドウィッチを取り、レジに來た。

「今日は何時まで？」

「はつ？」

私はキヨトンとした。

今までそんなことを訊かれた事がなかつたからだ。

どうとうストーキングを始めるのかな、とほんの少しだけ心配になつて答えあぐねていると、大原さんは、

「『ごめん。変なこと訊いちゃつたね。実はさ、ここ何日か、この辺

りで物騒な事があつたので、気になつてぞ」

私はレジを操作しながら、

「物騒な事?」

新聞はとつていないし、世情にあまり関心のない私には何の事かわからなかつた。

大原さんはお金を財布から取り出して、

「暴力団の抗争があつたんだ。拳銃を撃ち合つたんだよ。だから茜ちゃんが怖がつていなかつてさ」

「はア」

仮に知つても、暴力団の抗争くらいで怯える程、私はヤワな神経の持ち主ではない。

危害が及ぶようなら、組事務所まで乗り込んで落とし前をつけさせてもいいくらいだ。

「とにかく、気をつけるに越した事はないから。それと」と大原さんはスーツの内ポケットから名刺入れを出して一枚名刺を取り出し、

「何かあつたら、ここに連絡して。携帯の方でも大丈夫だから」

「はい」

私は大原さんのもの凄くマイペースな行動に気圧されたまま、名刺を受け取つてしまつた。

「じゃあね」

大原さんは二口二口したままコンビニを出て行つた。

私は名刺を手に持つたまま、しばらく呆然としてしまつた。

「大丈夫、茜?」

理美の声に私はハツと現実世界に戻つた。

心配そうな理美の顔がカウンター越しにあつた。

私は名刺を制服のポケットにねじ込んで作り笑いをし、

「大丈夫だよ。それよりさ、暴力団の抗争があつたんだつて?」

と話をそらせた。それよりさ、暴力団の抗争があつたんだつて?」

「ああ、そんなこともあつたみたいね。他のバイトの子も何か言つ

てた気がする」

「そう」

理美もどちらかといふとそんなことには関心がないタイプなので、それほど不安に思つていなければいい。

「確かまだ犯人が捕まつていないんだよ。そう考へると、ちょっと怖いかな」

理美はそう言いながらも全然怖がつてゐる様子はない。

「むしろあの大原とか言う男の方がよっぽど危険だよね」

「そうかも」

と私は同意してクスッと笑つた。

やがて外はすっかり暗くなり、仕事帰りのサラリーマンやＯＬのお姉さんが大勢歩いている時間になった。

そして理美も退店した。

店は店長と私だけだ。

でもこの時間になると、私の「しもべ」達5人が呼びもしないのに集まつて来る。

見た目があからさまに悪い連中だが、よく話をしてみるとそれほど悪い奴らではない。

「お疲れっす、姉さん」

「しもべ」の中のリーダーであるタカシが挨拶しながら入つて來た。店長はタカシ達に気づき、そそくさと事務室に逃げ込んだ。私は

小声で、

「あのね、その『姉さん』はやめてつて言つたでしょ。私はあんた達の姉さんじやないんだから」

「そうでしたね、姉さん。すいません」

タカシは申し訳なげに頭を下げながら、なおも「姉さん」を口にしている。

「バカなのかな、こいつ？」

「じゃあ何でお呼びすればいいんすか？」

とサブリーダー格のショウが言った。

私はショウに目をやつて胸のネームプレートの「如月茜」を指差し、

「名前でいいんじゃない、普通に」

「そんな。それは無理つす。お名前でお呼びするなんて、恐れ多くてできないつすよ」

タカシが言つ。

ショウが頷く。他の3人も頷いている。

私は呆れて、

「じゃ、もうここには来ないで」

「そ、そんなア！ 自分ら、もう姐さんについて行くつて決めたんすから、そんなつれない事おつしゃらないで下さい」

タカシが泣き出しそうな声で言つ。

私は店長が事務室の防犯カメラでこちらを見ているのを思い出し、「とにかく、仕事の邪魔。何も買わないのなら、帰つてよ」と5人を追い立てた。タカシが、

「取り敢えず、ゴミ箱の掃除してます」  
と言い、4人を引き連れて外に出て行つた。

私は大きな溜息を吐いた。

「何なのよ、あいつらは」

タカシ達と入れ違いに、サラリーマン達が何人か入つて來た。

「いらっしゃいませー」

私は営業スマイル全開で挨拶した。

タカシ達はゴミ箱の掃除とか言つたきり、随分と長い時間戻つて來なかつた。

別に戻つて来て欲しいわけではないし、あいつらにゴミ箱の掃除を任せたつもりもないから、そんなことはどうでもよかつたのだが、それにしても出て行つてから1時間は経つていたので、少しだけ気になつてはいた。

「どうしたんだろ？」

私は外に出た。入り口脇にあるゴミ箱は、片づけられた様子もなく、タカシ達の姿もない。

「何やつてんの、あいつらは」

結局口ばかりで何もしてないのか、とも思つたが、あいつらがゴミ箱の掃除を自主的に始めてからもう半月以上。今まで一度だつてサボつた事はなかった。

やはり何かあつたと考える方が正しい気がした。

「姐さん！」

ショウの声が後ろでした。私は声に応じて振り返つてしまつた自分が情けなかつたが、

「どうしたの？」

と、息を切らせて近づいて来るタカシ達に尋ねた。

「ゴミ箱に自分の家のゴミを捨てようとしている奴がいたんですよ。で、注意しようとしたら、ゴミをゴミ箱に押し込んで、もの凄い勢いで走り出したんです」

とタカシが息を整えながら言つた。それを受けてショウが、「偉く速い奴で、俺達も必死に追いかけたんすが、逃げ切られてしまいました」

「そこまで頑張らなくてもいいわよ。捨てられてしまつたんだから、こちらで処分するしかないでしょ」

と私が言うと、タカシ達は、

「同じ事をした自分らは、姐さんにこつてり説教されたんすけど」と言つたそうな顔で私を見た。

私は苦笑いして、

「とにかく、ありがとう。でももういいよ、追いかけなくて。追いかけて厄介なことになつたら、その方が困るから」

「はア」

タカシは不服そうだつたが、ショウが、

「それなんすよ。俺、はつきり顔見たわけじゃないんすが、あいつ、

多分口吉会のチンピラですよ。この辺で何度も見かけてるんで、ま  
ず間違いないつす。ガラが悪い奴つすから、目立つんすよ  
と口を挟んだ。

5人の中で一番身体が大きくて、強面のショウがそう言つのだか  
ら、相当凶悪な顔をしているのだるつ。

「ヤクザなの？」

私が興味深そうに言つと、ショウが、  
「あ、あいつはやばいつすよ、姐さん。いくら姐さんが強くても、  
あいつは無理つす。命が危ないつすよ」

と妙に弱気なことを言つた。タカシも、

「そうそう。あいつは、この辺じや、どんな不良も道をあける程の  
喧嘩の達人なんすよ。確か以前、元プロレスラーを病院送りにした  
とか」

「プロレスラーは引退すると途端に弱くなるわよ」

と私が反論すると、ショウが、

「そのプロレスラーがどれほど奴かは知らないつすけど、とにかく  
あいつはやばいつす。俺ら、追いかけてるうちに気づいてちょっと  
とだけビビったんすから」

私はそいつがそれほど強いとは思わなかつたけど、一つ疑問が湧  
いた。

「そんなに強い奴なのに、どうして逃げたのかしら？ 私より強い  
のなら、あんた達なんかあつと言つ間に片づけられるでしょ」

「そ、そうですね。何であんなに必死になつて逃げたんだろ？」

タカシ達は顔を見合わせて考え込んだが、謎は解明しないようだ。

私は一つの仮説を導き出し、

「とにかく、何を捨てたのか見てみましようか」

と「ゴミ箱の蓋を外して、中を覗いた。

「あつ、その大きなレジ袋つす。多分生ゴミつすよ。何か変な臭い  
がしてますから」

一緒に覗き込んだタカシが言つた。

私はその大きなレジ袋をゴミ箱から取り出した。歩道を歩いている人達がジロジロ見ているので、

「何だ？ 文句あんのか？」

とショウがいきなり通行人達にガンを飛ばし始めた。

「やめなさいよ、恥ずかしいな！」

私はショウの頭をパソコンと叩いた。

「すみません」

私は5人を引き連れて、コンビニと隣の建物の間を抜け、裏口に回った。

「ここなら人目につかないか」

私はレジ袋を下ろし、結んである部分を開いた。

「うわっ……」

タカシの言った通り、中身は生ゴミだった。

それもドロドロの残飯に、腐った肉のようなものが混ざっている、吐きそうになるようなものだ。

「今度は逃がさないように私が見張るか、それとも……」

その独り言をショウが聞き逃さずに、

「やばいっすよ。やめた方がいいっすよ」

「でも、こんなもの何回も捨てられたら、迷惑でしょ。その組の場所教えて。バイト終わったら、話つけに行くから」

私の言葉にタカシ達は固まつた。

命知らずな女だと思っているのだろう。

「ちょっと持つてて」

とレジ袋をショウに渡し、私は事務室に入つてゴム手袋を持つて戻つた。

「どうするんすか？」

ショウにレジ袋を持たせたまま、私は手袋をはめると、生ゴミの中に手を突っ込んだ。

「いっ！」

少しハネが飛んでショウの顔にかかった。

「「めんね」

私は二コツとして誤魔化した。そして、

「やつぱり。そりや走つて逃げるわけよ」

と言つと、中から残飯まみれの拳銃を取り出した。

「ゲエエエエエッッ！」

タカシ達は腰を抜かしそうなぐらい驚いていた。

「チャ、チャカつすか？」

ショウがやつとそれだけ声に出した。

私は残飯を拭い落として、

「そうね。これさ、使い捨て用に密造された拳銃みたいね。壊れてるわ

「け、警察に連絡を……」

と慌てるタカシに、

「あとあと。取り敢えず、組事務所の場所教えて。ちょっと話つけて来るから」

と私が言つと、タカシは泣きそうな顔で、

「ダメっすよ、姐さん。殺されちまいます。教えられません

「大丈夫よ。あんた達の姐さんをもう少し信じなさいよ」

私は口にしたくなかったのだが、「姐さん」効果を期待してそう言つてみた。そしてダメ押しで、

「私がそんなに弱いのなら、その私に負けたあんたらはどうしようもないほど弱いって事よ。そんなふうに思いたくないでしょ？」

タカシ達は顔を見合させて、小声で何か話している。

私はイライラして、

「何でもいいから場所を教えなさい！」

「は、はい

私の声のトーンが変わったのに気づいたショウが応えた。

私はその後店に戻り、退店時間まで業務をこなし、

「お疲れ様でした」

と店長に挨拶をすませてタイムカードをガシャンと押して外に出た。

「姐さん」

待ち合わせ時間には遅れるなど厳しく言つてあるだけあって、タ

カシ達はすでに建物の裏にいた。

「タカシの携帯の番号教えてよ」

私がバッグから携帯を取り出して言つと、何故かタカシは顔を赤くして、

「は、はい」

と言つと、赤外線通信で私の携帯にデータを送信した。他の4人の視線がタカシに注がれていたが、どういうわけかそれは敵意に満ちたものだった。

何でだろう？

しかしそれには構わず、

「片がついたら、あんたの携帯に連絡する。そしたら、この人に電話して、さつきの拳銃を渡して、組事務所の場所も教えてあげて」と大原さんの名刺を渡した。

「ええっ？ あの、姐さんに付きまとつてる変態野郎にですか？」

タカシは不満そうだ。

私は携帯をしまつて、

「あの人は警察の偉い人なの。あんた達に話してもわからないだろうけど、警察庁つて言う日本の警察の一一番上の組織の人なのよ」

「そこもあんな奴がいるようじや、大したことないっすね」

ショウが言つた。タカシ達はそれに応じて笑つた。

私はムツとして、

「私の言つ通りにできないつてこと？」

「と、とんでもないっす！」

タカシ達は最敬礼して応えた。私は満足して大きく頷いた。さて、ちょっと運動して来るか。

タカシ達に教えられたその場所は、意外にも私の住んでいるアパ

一トからそれほど離れていないところにあった。

あいつらの言つ通り、「口」を捨てて逃げた奴がそんなに強いのなら、そしてそれほど有名なのなら、私の耳に入らないはずはない。そして見かけない事もないはずだ。

どうも逃げたのには何かまだ裏がある。

拳銃の事もあるだろうが、本当は全然強くないのでは、という疑惑。

「ここか」

私は小さい交差点の角に建つ5階建てのビルを見上げた。入り口の脇にある看板に、「5F 日吉建設株式会社」と印字されている。

ま、「暴力団 日吉会」とか書いてあるはずもないんだけど。「まだ誰かいるようね」

日吉建設の窓には、まだ明かりが灯っていた。

私はビルの玄関を入り、エレベーターに向かつた。

誰もいない。

今は午後10時過ぎだから、他の会社は皆閉まっている。エレベーターのボタンを押すと、5階に停まっていた表示が動き出した。

機械音が響き、エレベーターが到着した。

チン、という音と共に扉が開く。

私は中に入ろうとしたが、中から5人の強面のオジさん達が降りて来て、行く手を遮られた。

「おい、何だ、お前。中学生がこんな時間までうわうわしていると、人さらに連れて行かれるぞ」

と1人のオジさんが今時誰も言わないような事を言つて來た。

私は「人さらに」という言葉より、「中学生」に反応した。

「失礼ね。私は19歳。中学生じゃないよ」

すると5人のオジさん、いやもうそんな呼び方する必要はないな、

5人のジジイ共は大笑いを始めて、

「中学生じゃなかつたか。そりや悪かつたな、お嬢ちゃん。どつちにしてもここは子供の来るところじゃねえんだ。帰りな」と別の1人が言い放つた。

私はキツとそいつを睨んで、

「あんた達、あの日吉建設の連中だね。そこに用があつて来たんだよ。組長はいるかい？」

と怒鳴つた。

5人の親父共は互いに顔を見合せた。

「何言つてやがるんだ、このガキヤア。ふざけた事抜かしてると、ぶつ殺すぞ」

とさらに別の1人がいきがり始めた。

「いるのかいないのか、それだけ答えな。私は今、機嫌が悪いんだよ」

その言葉に嘘はなかつた。

さつさと片づけて帰ろうつと思つていたのに、こんな余分な連中に邪魔された挙げ句、中学生呼ばわりされて子供扱いされたのだ。もう限界に近かつた。

「このヤロウ、舐めた口利きやがつて！」

1人が私を押さえつけようと飛びかかつて來た。私はスツと後退し、そいつの後ろに回り込むと、「邪魔すると怪我するよ」と他の4人に言つた。

「何だ、こいつ？ 只のガキじゃねエぞ」

親父共は後ずさりしながら言つた。

その時、後ろにいたもう1人が懲りもせずに、

「この！」

とまた襲いかかつて來た。

「一度目は手加減なしね」

私はそいつをヒラリとジャンプしてかわし、首に手刀を叩き込んだ。

「グウッ……」

そいつはそのまま前のめりに倒れた。4人は仰天して私を見た。

「次は誰？」

「くそつ！」

束になつてかかれど勝てると思つたのか、残りの4人はいつせいに私に飛びかかつて來た。

「バーカ」

私は天井までジャンプし、互いにぶつかり合つた愚か者達を一気に蹴倒し、エレベーターに乗り込んで先に進んだ。

（　噂の男はいなかつたみたいだ。下つ端で、もう帰つたのかな？　）

扉が開き、その廊下の先に「日吉建設株式会社」の看板の掛かつたドアが見えた。

どうやら下の親父共の連絡があつたらしく、中からドヤドヤと柄の悪そうな、そして同時に頭の悪そうな連中がわんさか出て來た。

「てめえか、小娘。ヤクザ舐めると、命落とすぞ、コラアッ！」

その中でも特にバカそうな奴がしゃしゃり出て來た。

私はニコッとして、

「何人いるの、あんた達？」

するとそのバカが、

「30人くれエいるぞ。もう降参しても許さねエからな」

と胸を張つて言つたので、私はそれを鼻で笑つて、

「冗談でしょ。私と喧嘩するつもりなら、もう一ケタ人数集めてからにしな。怪我したくない奴は、下がんなよ」

「このガキ、言いたい放題言いやがつて！ やつちまえ！」

30人は確かにいたようだ。

しかし、そんな枯れ木も山の賑わいのような連中が例え300人いても今の私の敵ではない。

「邪魔！」

私はそう叫ぶと、まさしく田にも留まらぬ速さであつといつ間に

そいつらを倒し、日吉建設の中に入った。

「魂消<sup>たまげ</sup>たな。あいつらもそれほど弱くねエのによ」

ドアの向こうにいたのは、普通の19歳の女の子なら間違いなく泣き出してしまったような強面の男だった。

しかし身体はそれほど大きくない。

多分、元ボクサーか、空手家だろう。

「あんた、まさか……？」

私は眉をひそめた。その男はフツと笑って、

「察しがいいな。俺がお前の店のゴミ箱にブツを捨てた人間だよ」と言った。私は瞬時にその男の強さを感じた。

（ じいつ、本当に強い。何、この殺氣は？ ）

「お前の事は少し調べたよ。あの不良共がぶちのめされたって聞いたからな。あいつらも相当この辺じや鳴らしてた連中だ。そいつらをまとめて締めたお前が強いつことはわかつていたつもりだが、ここまで強いとはな。ちょっと本<sup>タ</sup>氣出さねエと、ヤバいかもな」強面の男は軽快なフットワークでシャドウボクシングを始めた。かなり俊敏だ。今までの連中とは、明らかにレベルが違う。

「何であるゴミ箱に拳銃を捨てたの？」

私が尋ねると、男はせせら笑つて、

「まだわかんねエのかよ。お前をおびき寄せるためだよ。見事に時いたエサに食いついてくれて嬉しいぜ。俺はな、つえエ奴と戦いくつて仕方がねエんだよ」

「はア？」

私はその返答に呆気に取られた。

「社長はもつとマシなとこに捨てて来いって言つてたけどさ、俺はどうしてもお前と拳を交わしたかったのさ。ま、俺の敵じやねエだろうけどな」

男はそつ言つと素早いステップで私との間合いを詰め、攻撃を開始した。

「くつ！」

私は男のショートフックを交わし、後退した。

「どこまで退がる気だ、嬢ちゃん。後ろは壁だぜ」

一見すると、私は絶体絶命に見えた。

「ちょっと待つてね」

私はそう言うとスニーカーを脱いだ。男はへッと笑つて、  
「何のマネだ、嬢ちゃん？ 靴脱いでどうするつもりだ？」

「ちょっとだけハンディを軽くしたのよ」

私は脱いだスニーカーをドアの脇にあつた大きな壺にぶつけた。  
壺はスニーカーが当たると粉微塵に砕け散った。

男はそれを見てギョッとしたようだ。

「な、何だ？ 何のトリックだ？」

「トリック？ 私の履いていたスニーカーは片方だけで10kgある  
のよ。これで少しばかく動けるようになつたわ」

「なつ、何だと？」

私は早く帰りたかつたので、容赦しなかつた。

「えつ？」

多分男の目には私の動きは見えなかつたはずだ。  
「世の中には上には上がいるつてことを知りなさい！」

鳩尾に左の肘鉄を一発。男は白目を剥いて倒れた。

「後は社長か」

私は先に進んだ。

残念な事に、社長はいなかつた。

あの強面がやられたのを監視カメラで見ていたらしく、裏口から  
逃走した後だつた。

「ここから先は、大原さんに任せよっか」

私はタカシの携帯に連絡し、日吉建設を出た。

コンビニに戻ると、タカシ達が待つていた。

店長は雑誌コーナーの隙間から、外を窺つていた。

「姐さん！」

タカシ達は嬉しそうに私に近づいて来た。

何か飼い犬がエサを待つっていたような光景だ。

ちょっと気になるのは、5人共顔を少し怪我している事だった。

「どうしたの、その顔？」

「いえ、別に何でもありません

今度は5人が5人共顔を赤くしている。私は首を傾げた。

「あんた達、わけわかんないわ」

翌日、私はいつものように夕方からコンビニに行つた。

すると店長がガタガタ震えながら、私を出迎えた。

「ひ、非常に言いにくいんですが、如月さん

「はい？」

唐突な言葉に私はキョトンとしてしまつた。

店長は唾を呑み込んで、

「今日で辞めていただけませんか？ もちろん、今月分は全額支給しますので」

と言いながら、後ずさりした。

私は目の前が真っ暗になつた。

「ど、どうしてですか？ 私、何がミスしましたか？」

身に覚えのない私は、真顔でそう尋ねた。

すると店長は、

「あ、貴女がこのままここにいるなら、他のアルバイトの子がみんな辞めると言つんです。今日休みの今坂さんは続けてくれるらしいのですが」

「……」

完全な誤解だ。私はあきらめた。

いつかこんな日が来るのではないかと思っていたのだ。

「何人かの子が、貴女にお金を脅し取られそうになつたとか・・・

「

「そんなことしませんよー。」

私が反論すると、店長は事務室の隅まで逃げて、「わかつてます、わかつてますよ。そのことばは別に警察にも言つませんし、その子達も訴えなこと言つてますから」

私はもううつでもよくなつてしまつた。

誤解とは恐ろしいものだ。つぐづぐうつ思つた。

「わかりました。給料はいいです。『迷惑をおかけしたお詫び』、皆さんで使って下さい。お世話になりました」

「あー、ちよつとー。」

私は店長が呼び止めるのを無視して、事務室から飛び出した。

「何なのよ、ホントに……。」

他のバイト先を探そつ。

それしかない。

次のバイト先では、もつと可愛い子を演じよう。

今時の子になり切る。

怖がられないように、ちよつとバカっぽい喋り方にしよう。

そうすれば、こんなことは一度と起きない。

理美はびっくりするだろうな。

彼女にだけは新しいバイト先を教えておこう。

そんなことを思いながら、アパートへの道を歩き始めた時だ。

「如月さん」

とまたあの間延びした声がした。神保君だ。

「何?」「

私はできるだけ穏やかな声と顔で言った。すると神保君は、

「忙しくない?」

「うん、忙しくないよ。どうしたの?」

「これ……

と神保君は手紙のようなものを差し出した。

「えつ?」「

彼は頭を下げたままそれを私に向かって突き出してくる。

私は一瞬気が動転したが、

「あ、あのさ、えーと……」

と返答に困っていると、神保君は顔を上げて、

「これ、今坂さんへ渡して下さい。とても直接渡せないので」と言った。頭が煮えたぎるのに一秒とかからなかつた。

「自分で直接渡せ、この愚図！」

私は仰天してへたり込んでいる神保君を残し、その場を去つた。

何なのよ、私の人生は！ その日は散々な一日だつた。

「それで、そのしもべの5人はどうして怪我していたの？」

葵がソファに座つて尋ねた。美咲はパソコンから顔を上げて、「茜ちゃんは知らないんですけど、タカシって言う子の携帯にある茜ちゃんの携帯の番号を他の4人が教えるつて騒いで、喧嘩になつたらしいんです。それで怪我をしたんですつて」とクスクス笑いながら言つた。葵も笑つて、

「茜つて結構モテてたのに気づいていなかつたのね。大原君とそんなところで出会つていたのは初耳だわ」

「ええ。その話は私も聞いた事がありませんでした。あの2人、案外運命の人同士なのかも知れませんよ」

美咲がそう言うと、葵は美咲を見て、

「貴女と外務省君も運命の人同士かもよ」

とからかつた。美咲は赤面しながら、

「それを言うなら、所長と篠原さんだつて……」

「あいつは運命じゃなくて疫病神よ」

葵はムツとして言つた。そして、

「それより茜はどこまでアイスクリーム買いに行つてるのよ。待ちくたびれたわ」

「 そうですね。どこまで行つたんでしょう? 」

その頃茜は、大原とコンビニにいた。

「 奇遇だね、茜ちゃん、こんなところで会うなんて

「 ほ、ホントですね」

茜はニコニコして言った。

「 覚えています、大原さん? 私達、ここで初めて会つたんですよ」

「 あつ、そうか。ここがあのコンビニだつたのか」

2人はニッコリして顔を見合せた。

葵のところにアイスクリームが届いたのは、それから一時間後だ  
った。

## バスを待つ間に

私はふと気づくと、見知らぬ町のバス停に佇んでいた。

私の前には、たくさん的人が皆俯き加減にバスを待っているのが見えた。

誰も彼も笑顔がない。何故だろう?

私も笑顔ではないのがわかる。何か物悲しいのだ。

バス停の時刻表を見ても、いつバスが来るのかわからない。私は腕時計もしていない。携帯もどこかに置き忘れたらしく、バッグの中にはない。

一体今は何時なのだろう?

辺りには深い霧が立ちこめていて、全く時刻がわからない状態だ。

明るいような、暗いような……。

振り向くと、私の後ろにもたくさんの人達が並んでいる。

やつぱり、皆一様に笑顔がなく、俯いている。

何でこんなに心が重いのだろう?

理由がわからない。何が原因なのか、思い当たらない。

あ。

そんな事を思い巡らせていると、バスが走つて來た。

霧の中をかい潜るよつこ、車体が近づいて來る。

そしてバスは停車し、ドアが開く。

先頭に立つておじいさんが乗り込む。次に小さい女の子。

中年のサラリーマン、おばあさんと続いた。

そして、私が乗り込もうとした時、

「待ちなさい。貴女はまだ乗つてはいけない。私が乗ります」

と止められ、その人が乗り、バスは出でてしまった。

「ああ

私は、振り返つたその人の顔を見た。

伯母さん。私の父の姉。どうして突然現れたの？

不思議に思つていると、どこからか、私を呼ぶ声が聞こえた。

「ああ、意識が戻りました」

？ 何？ どうこいつ事？

田を開けると、父と母、そして妹と弟が泣きながらじかひを見ていった。

「良かった。助かつて」

母はそう言つと泣き崩れた。父が母を支えている。

そうか。私は、旅行に出かけて、事故に遭つたんだ。

バスが崖から転落して……。

たくさん的人が、苦しんでいるのが見えて……。

氣を失つたのだ。

「伯母さんは？」

私は不意にそう言つた。父と母がギョッとする。

伯母は私と一緒にそのバスに乗つていたのだ。

「……」

誰も答えてくれないのが、まさに答えだつた。

そして、あの夢の意味を理解した。

私はあの世へのバスに乗れなかつたのだ。

乗りそうになつてゐるのを、伯母に助けられたのだ。

そして、伯母は私の代わりにバスに乗つてくれたのだ。

涙が溢れた。止まらなかつた。

喜べない。助かつた事を喜べない。

私は泣き続けた。声が出なくなつても、涙が枯れても、泣き続けた。

「はーい、どうもどうも、本日もたくさんの方にお集まりいただきまして、ありがとうございます」

「そんな陽気に声かけるなよ。みんな死んだばかりで滅入ってるんだから」

「関係ないだろ？ 僕達漫才師なんだから、陽氣に行かないよ。俺達が陰氣じや、意味ないだろ？」

「そりなんだけども」

「それではですね、これから皆さんがこの世界の決まり事をお伝え致します」

「大事なことですから、よく聞いて下さいね」

「決まりを守らないと、最悪死ぬ事になりますので」注意下せよ」

「もう死んでるだろ？」

「バカヤロウ、ここで死ぬと生き返るんだよ」

「それならその方がいいじゃないか」

「何もわかつていしないな。ここに集まってる方々は、みんな生き地獄を味わった人達なんだよ。みんな何があつても生き返りたくないの」

「何だよ、それは。意味わからないぞ」

「お前バカが原因で死んだのか？」

「違うよ。変なこと言うな」

「ま、こんな奴でもやつていける世界ですから、そんなに緊張しないで大丈夫です」

「今もの凄くバカにされた気がするんだけど」

「気がするんじゃない、実際バカにしてるから」

「余計悪いよ。ちゃんと説明しろよ」

「この世界で守つて欲しい事。まず一つ」

「はー、一つ目です」

「死神さんには季節の付け届けを怠りなこと」

「そんな決まり事ないよ」

「2つ目です」

「ないつて言つてゐるのに先に進むのかよ」

「閻魔大王の事は、朝日晚、寝る前に必ず拝む」と

「だからないつて、そんな決まり事」

「3つ目」

「おい、勝手に進むな」

「1日1回は化けて出て、生きてる人を怖がらせる事」

「極めつけにないよ。ちゃんと説明しろよ」

「だからしてるだろ」

「はア？ 訳わかんないこと言つたなよ。してないだろ」

「してるよ」

「してないつて」

「だから、何も決まり事はないつて説明してゐるでしょ」

「いい加減にしろ」

「どうも、ありがと「ひー」やこました」

ひとつでも知りたい

朝から妙だ。

私は、じく一般的なサラリーマン。

のつもりだ。

しかし、今日はどうも様子がおかしい。

本社勤務になつたため、実家に妻と子供を残しての単身赴任の生活を始めて半年。

それなりに今の環境にも慣れ、職場でも意思疎通がしっかりと出来て来た。

だが。

今日は違つ。

具体的に何という事は出来ないが、会社の人間ばかりでなく、通勤途中に出会う人達までが、私を見てクスクス笑っているのだ。

鼻毛でも出でているのだろうかと駅のトイレの鏡で顔を見たが、鼻毛は出でていない。

服装もいつもと同じ。

ワイシャツが飛び出していたり、靴下がチグハグな訳でもない。

第一、私を見ている人達は、身体ではなく、顔を見て笑っているのだ。

いくら鏡で見ても、何もわからない。

社内はともかく、通勤途中の人までが私を引っ掛けようとするは考えられない。

どうしても理由が知りたい私は、同じ課の部下に尋ねてみた。

「私の顔、何か変かな？」

「えっ、課長、『』存じでなかつたのですか？」

部下は私の質問にビックリした顔で言った。

「どういう意味だ？ そんなにわかり易い事なのか？」

「はい。もしかして課長、私をからかっているのですか？ 本当は『』存じなのでしょう？」

部下は苦笑いした。私は大真面目に、

「全く何の事かわからんのだ。教えてくれないか」

「本当ですか？」

部下はそれでも疑いの眼差しで私を見ている。

「本当だ。私は人をからかう趣味はない。何がおかしいのだ？」

部下はようやく私が本当に何も知らない事を信じてくれた。

「課長は新聞をお読みではないのですか？」

「新聞？ ああ、いつも社に来てから全紙目を通しているが

部下はやつと命令がいったという顔をして、

「そうでしたか。ではそこに答えがありますので、『見下せ』

「新聞に答え？」

私は部下が私をからかっているのだと思った。

しかし、新聞に重要な事が掲載されていて、それを知らないがために何か致命的なミスを仕出かしているのかも知れない。

考えにいく事だが、通勤途中の人達まで私を見て笑っていたのだから、そんなのかも知れないと思い、私は私の机の上に届けられている朝刊を見た。

「テレビ欄の下です。そこに出でますよ

部下が教えてくれた。

私は言われるがままにテレビ欄の下を見た。そして凍りついた。

何故かそこには私の顔写真が大きく掲載されており、

「私はこの男と離婚します。この男を見かけたら、笑つてやって下さい」

ところの妻のコメントが載っていた。

## 取立人

俺は新橋義雄。

リストラで職を失い、生活保護を受けるために市役所に行つたが、税金の滞納があるため、難しいと言われた。

どうやら資格なしといつ事のようだ。

あきらめた。そんなところで粘ついてるくらいなら、職を探した方がいいと思ったからだ。

しかし、それも甘かった。

俺は三十代後半。妻も子供もいないお気楽人生だったが、それでも遊んで暮らせるほど貯えもない。

ハローワークも冷たかった。と言つより、俺にはそう感じられたという事かも知れないが。

そんな訳で、俺はつい消費者金融に頼つてしまつた。

一時はそれで飢えをしのぎ、俺は生き延びる事ができた。

ところが、そこから別の苦難が始まった。

俺が借りたのは所謂闇金いわゆるだったのだ。

とにかく催促が激しく、俺はアパートに帰れないほどだった。

最初は友人の家などを転々としていたが、そのうちにそこまで見つけ出され、乗り込まれてしまった。

友人も激怒してしまい、俺は追い出された。

そして行き場を失い、公園やガード下で夜露を避ける生活を始めた。

ところが、絶対に見つかるはずがないと思っていたのに、闇金は俺を探し出し、脅した。

「金返せよ、おっさん。ふざけてるんじゃないねえぞ！」

ヤクザと変わらない凄みで、闇金の取立人は俺に怒鳴った。

「わ、わかった。返す。返すから」

俺は遂に決断し、そいつを伴つて歩き出した。

「おー、どーに行くんだよ?」

「「」の先に親戚がいる。そこで金を貸してもいいから

俺は咄嗟に嘘を吐いた。取立人は訝しそうに俺を見て、

「嘘だつたら只じゃおかねえぞ」

「あ、ああ

俺はトボトボと道を歩いた。

人もいない。ここなら。

「おい、家がなくなつて來たぞ。てめえ、騙したな！？」

取立人が怒り出した。俺は隠し持つていた護身用のナイフで、いきなりそいつの胸を刺した。

「うおおお……。てめえ……」

完全に不意を突けた。取立人はそのまま仰向けに倒れ、死んだ。

俺はナイフを引き抜き、近くの川に投げ捨てた。

これで逃げられる。そう思った。

俺は安心し切つてアパートに戻つた。

そして、久しぶりに暖かい布団で眠つた。

しかし、そつまくは行かなかつた。

また取立人が現れたのだ。

しかも、殺したはずのあいつが。

死んでも取り立てに来るなんて、何て執念なんだ。

「てめえ、金返せー。それと俺の命も返せよー。」

窓を少しだけ開けて見てみると、胸から血を流したあいつが立っていた。

「おー、こーんんだらー?」

奴はドアを叩く。顔色は青白くなつていて、まるでゾンビだ。

俺は怖くなつて、窓から逃げ出した。

そして近くの公園の滑り台の下に隠れた。

「おい、何逃げてるんだよー。」

奴が覗いていた。

「わあああー!」

俺は絶叫して駆け出した。

どに逃げても奴は追つて来た。

俺はとうとう耐え切れなくなり、海に飛び込んで死んだ。

これで解放される。そう思つた。

しかし。

「てめえ、何死んでるんだよー!? 金返してから死ねよ、おこー!」

俺はあの世に行つても、奴に追つ回されている。

もう逃げ場はなかつた……。

幽靈出没スポットで、五本の指に入る「トンネル」。

今日は、そんなトンネルの中でも、1、2を争う恐怖のトンネルのお話をしましちゃう。

関東で有名なのが、G県M市のトンネルです。

白い服を着た女性の靈が目撃されています。

赤い車で通ると、出現率が高いといつ噂があるやつです。

この話は、偶然現地に行つてしまつた氣の毒な者の体験談です。

丸山鉄也。23歳。

大学を卒業し、地元の企業に就職して早3ヶ月。

業務にも慣れ、職場の人達との交流もつましくなり、充実した日々を過ごしていました。

そんな鉄也君が、上司に言われて隣県のT県に出張しました。

出張と言つても配達を兼ねた挨拶のようなもので、仕事そのものは何事もなく完了しました。

運転免許は大学入学前に取得していたものの、実際遠距離を走行したのは初めてだったので、鉄也君は帰り道で曲がるところを間違え、会社のある工市ではなく、逆の方向へと進んでしまいました。

それに気づいたのは、随分と帰路から外れてしまつてからでした。

「どうだ、ここ?」

地図も持つていない上、乗っているのはナビがついていない社用車。

鉄也君は完全に自分がいる場所がどこなのかわからなくなつていました。

携帯は圈外、いくら走つても人家はなく、公衆電話も見当たりません。

しかもさらに悪い事に、雨が降り出し、太陽で方角を割り出す事も出来なくなりました。

「参つたな、ホントに」

鉄也君は普段からあまり焦つたりしない性格なのですが、さすがに狼狽えていました。

時刻は午後6時。

まだそれほど遅い時間ではありませんが、会社にはもう誰もいません。

「直帰していいから」

上司にはそういう言われていたのですが、それでも連絡を入れられなかつたのは悔やまれました。

あいつ、ビリかでサボってるんじゃないの？

そんな風に思われるのでは、などと考えたりもしました。

「何とか、国道に出ないと」

鉄也君は勘を頼りに道を曲がり、広い道路に出られないかと試行錯誤しました。

でも、周囲の風景はますます山深い様相を呈して来ており、これ以上動を回るのは得策ではないと思つようになりました。

「何で地図を忘れたんだろう」

今更そんな事を悔やんでも仕方ないのですが、そんな事を考えてしまつ程、鉄也君は追いつめられていきました。

「あつ」

「あつやべ国道に出られました。」

「確かに、こっちでいいはず」

鉄也君は迷わず右折しました。その国道は、T県に行く時、走った記憶があつたからです。

しかし、鉄也君は思い違いをしていました。

彼が走ったのは、その国道のバイパス。

今彼が走っているのは、旧道。今はほとんど通行がない道です。

彼はその時、その先に例のトンネルがあるとは夢にも思っていました。

その上、鉄也君の乗る社用車は、会社のロゴが入ってはいましたが、赤でした。

サービスと降り続ける雨の中を、鉄也君の乗る赤い車が走っています。

車はやがて緩やかなカーブを曲がり、「ケだらけのトンネルに差し掛かりました。

「一。」

鉄也君はトンネルの入口に気づき、ギョッとしました。

G県の者なら、大抵の人気が知っている話なのです。

彼はその話を思い出しました。

「やっぱ、ijiのトンネルじゃないか。戻ろ。しかもこの車、赤だし…」

鉄也君は慌ててブレーキを踏み、切り返しを数回して、方向転換しました。

「危なかつたな」

入る前に気づいて良かったとホッとしていると、何故かまた前方にトンネルが見えてきました。

「バカな…。そんなはずない！」

鉄也君はもう一度切り返しをし、車を方向転換させました。

「畜生、ビビり過ぎだぞ。方向を変えたつもりで、そのまま進んでたんだな」

恐怖のあまり、独り言が多くなつて来てします。

靈の力で惑わされているのでは、と思いつくなるのを必死にやめ、鉄也君は車を走らせました。

「嘘だ…」

何故かまたトンネルが見えてきました。

急ブレーキをかけ、車を停めます。

彼は外に出て、周囲を見渡しました。

「おかしい。どっかを見ても、同じに見えるが……」

彼はおかしくなつた。

その時です。

後ろからライトに照らわれ、ギョッとして振り返ると、そこには  
煙から帰る途中の風体のおじこさんが乗る軽トラックが停まっています。

「どうしたい、あんけやん？」

おじこさんは窓から顔を出して尋ねました。

「道に迷ったみたいで。市に行くな、どちらに行けばいいのですか？」

「向だ、市に行くのなら、市のまつんネル越えればいい

「や、やりますか」

鉄也君はおじさんの顔に顔色を変えました。おじさんは、

「さうか、幽霊が怖いんか。そんなら、俺のあとついて来い。そうすれば、怖くねえだんべ」

と笑つて言いました。鉄也君はおじいさんと臆病者と思われたのが悔しかつたのか、

「いや、その、道がわからなくてですね……」

と言ひて訳めいた事を口にしました。

「まあ、どうでもいいや。とにかくつこて来いや。間違いねえから」

「は、はい」

ひとつと走り出す軽トラに驚き、鉄也君は車に戻ると、おじいさんを追いかけました。

おじいさんは躊躇つ事なくトンネルに入り、そのままのスピードで走つて行きました。

「凄いな、あのおじいさん。全然ビビつてない」

これが年の功と言う奴か。鉄也君はそう思いました。

「へつー。」

入つてすぐに、彼は固まりそうになりました。

トンネルの先に、白い服を着た女性が立つていたのです。

しかも女性には足がありません。

間違いないこの世の者ではないのです。

しかし、おじこやんの軽トラは全く『気づいていない様子で、その女性の脇を通り過ぎました。

「見えない、見えない」

鉄也君もおじこやんに倣い、女性を見ないよつにして進みました。

「待つてエエエッ…」

女性の叫び声が聞こえます。まるでこの世の終わりを思わせるような声です。

「空耳、空耳…」

鉄也君は女性の叫び声を無視して進みました。

女性は更に叫びました。

「そのおじこやんにつれて行つてはダメ！ その人は悪靈なのよ！」

## 逆恨み

私はどちらかと言つて、正義感が強い男である。

妻は、

「余計な事に口を挟み過ぎ。もつ若くないのだから、揉め事には気をつけ」

などと妙な心配をする始末。

しかし、正義感が強い事の何が悪いのだろう。

悪い事は悪い。

そう主張しない人が多過ぎる。

だから愚かな連中が付け上がるのだ。

ある日の夜。

家に向かう途中、駅のホームで若い女性に絡む酔っ払いの男を見た。

周囲の人達は傍観しており、助けようともしない。

私は酔っ払いにも周囲の傍観者達にも腹が立ち、その場に近づいた。

た。

「やめないか。お嬢さんが嫌がってるじゃないか」

大声で言つた。すると酔つ払いは私をギロリと睨み、

「何だ、ジジイ。関係ねえだろ。向こうに行つてや」

「関係ないとは何だ！」

私はさう一喝し、尚も女性に絡もうとする酔つ払いの肩を掴んで引き離した。

「ここのヤロウ！」

酔つ払いは私に飛び掛つて來た。

「何をするー！」

酔つ払いの強襲をあつたらと交わし、右腕をねじ上げた。

「こひでー！」

「もう行きなさい。今日の事はこの場限りで忘れるから。一度とこんな事をするんじゃないよ」

酔つ払いは私の助言を聞いていたのかどうかわからないが、その場から逃げ去つた。

「お嬢さん、大丈夫ですか？」

私は蒼ざめた顔の女性に声をかけた。

「は、はい。ありがとうございました」

女性は頭を深々と下げる。サッとその場から立ち去ってしまった。

私は苦笑いをして、家路についた。

私の家は住宅地の端。駅からだと一番遠いところにある。途中、公園や交番があるが、そこを過ぎると少々寂しい通りになる。

それほど遅い時間ではないのだが、古くから住んでいる高齢者が多いため、人通りは全くと言つていいほどない。

「？」

私は、その辺りまで来て、私の歩調に合わせて誰かが後をつけて来ているような気がした。

立ち止まって振り返つてみる。

誰もいない。

気のせいだ。こんな風に感じるなんて、意外に気が小さいのかな、

と思ひながら、再び歩を出した。

「一。」

じつや「ひのせ」ではない。

誰かがついて来ている。

「誰だ？」

私は振り返つて怒鳴つた。

しかし、何の応答もない。

「出て来い。先程の君か。文句があるなら、顔を見せたまえ！」

私は周囲を見回した。

「む？」

「うー。」

その時、いきなり脇道から何者が飛び出した。

その何者かは長い棒のようなものを持っており、私を殴りつけた。

「ぐあー。」

私は防御する間もなくこの一撃を後頭部に食らい、地面に倒れた。

「卑怯な・・・」

私は襲撃者の方を見て呟いた。そしてその正体に言葉を失つた。  
そこにいたのは、あの酔っ払いではなく、若い女性だったのだ。

「何故？」

私の疑問に女性は険しい形相で怒鳴り散らした。

「何故だと！？ あんたのせいで、あの親父の財布を盗み損ねたんだよ、ジジイ！ 余計な事しやがって！」

女性は続けざまに私を棒で殴つた。

私は遠のく意識の中で、人を見る目がない自分を罵つた。

愛の五分間劇場「別れ話」（前書き）

五分大祭に間に合わなかつたので、勝手に自分で祭をしてみました。

## 愛の五分間劇場「別れ話」

桜の花が満開の四月初旬。風も暖かさを増して来ている。

皆が新しいスタートを切る季節。皆が希望に胸を膨らませる時である。

律子は都内の中堅建設会社の「○」。今日は仕事は休み。

その上特に予定もなく、彼女は自分の部屋で机に向かって携帯を睨んでいた。

律子は同じ会社の建築設計士の平井と付き合っている。

平井は、会社の受付の葉月涼子(はづきりょうこ)と争った末、交際を始めた男だ。

受付嬢の中でも一際美しい涼子に勝てるなんて、律子は思っていたので、本当に嬉しかった。

それ以来涼子は会社に来なくなり、無断欠勤が続いている。

律子に負けたのが相当ショックだったのだろう。

様子を見に行こうかとも思ったが、それも嫌味になると考え、やめにした。

受付嬢達も同じ課の女子達も、涼子がずっと連絡を入れずに会社を休んでいる事を心配していた。

携帯に連絡しても、マンションに連絡しても電話に出ないらしい。

どこかに行ってしまっているのかとも思われたが、実家にも行っていないし、友人の所にも現れていない。

とうとう涼子の両親も心配して九州の福岡から彼女のマンションを訪れた。

しかし部屋には涼子はいらず、両親は遂に警察に捜索願を出した。さすがに涼子も涼子の安否が気になった。涼子は律子にとって恋敵ではあつたが、憎んでいた訳ではないから。

それ以上に気になったのは、涼子が涼子と平井を争つたという事実だ。

その事を警察に知られれば、涼子が疑われる事になる。それは非常に困る。

別にやましい事は何もないけれど、警察が自分のアパートを出入りするのは気分のいいものではない。

しかし、涼子が平井と付き合っているのを知っているのは、涼子以外にいないはずだ。

涼子もあまり公になるのは嫌だつたので、誰にも話していない。

平井も誰にも話していないだらう。

では何故涼子は平井と別れる事にしたのか？

それは、平井が涼子の事を忘れていないからなのだ。

彼はいなくなつた涼子の心配ばかりして、律子に全く優しい言葉をかけてくれない。

「あんな冷たい奴だとは思わなかつた」

涼子がそれ程好きなのなら、最初から私を選ばなければ良かつたのに！

最初は涼子に同情していた律子も、平井があまりにも涼子の事ばかり気にしているので、我慢ができなくなつたのだ。

「バカにされてるの、私？」

そう思つよくなつた。

そして遂に別れる決心をし、バッグから携帯を取り出した。

意を決して、携帯のボタンを押す。

スススッと平井の番号が表示され、通話状態になる。

「ああ、ダメ！」

キャンセルボタンを押し、切つてしまつ律子。

「どうしてもダメ。言えない。言ひ出せない！」

律子は田に涙を浮かべ、机に顔を埋めた。

そんな事を何回か繰り返すうちに、平井の方から電話をかけて來た。

律子は画面に表示される「平井健」の文字にギョシヒーとし、出るのを躊躇つた。

着信音が部屋に鳴り響く。それでも律子は出ようとしない。

そのうちに留守番電話モードに切り替わり、平井の声が聞こえた。

「何度か着歴が入つっていたので電話したんだけど。今度はわかるよう携帯持つてるから、電話下さい。待つてます」

平井はいつも通りのトーンで話し、通話を切つた。

しばらぐ、部屋を静寂が支配した。律子は息を殺して携帯を見つめる。

彼女はボタンを押さうとするが、どうしても押せない。

指が硬直したように動かないのだ。

「待つてます」

平井はさつまつと話してくれた。嬉しい言葉だ。でも本心なのだろうか？

「待つてます」

ずっと待たせておこうか？ そつ細づ。

でもそれでは何も進展しない。それでは意味がないのだ。

私は彼と別れる決心をしたのだから。このままではいけないと思つたのだから。

「よし、今度は切らない」

律子は自分に言い聞かせて、ボタンを押した。

呼び出し音が鳴る。

「はい」

穏やかな声で平井が出た。律子は喋ろうとしたが、何も言い出せない。

「もしもし、もしもし…」

平井が呼びかけるが、律子は何も言わない。

そして何度も平井の呼びかけを聞き、通話を切ってしまった。

「ダメだ、私。まだ未練があるのかな……」

律子は田に涙を浮かべ、また机に顔を埋める。

彼女はしぶり声を立てずに泣いた。何故か無性に悲しかった。

「でも、こんな事を続けていれば、彼が戻ってくれるかも」

律子はそんな甘い考えをし、再び携帯を取り出す。

「よしー。」

思い切って発信ボタンを押す。ワンコールで平井が出た。

（ずっと待っていたのかな？）

少しだけ嬉しくなってしまつ。

（ダメダメ、そんなのー、別れるのよ、彼とはー。）

律子は無言のまま通話を切つた。

「これでいいのよ。これで、彼は私の事を嫌いになつて、自然消滅……」

涙が溢れて来た。止まらない。止められない。

「ううう……」

携帯をベッドの上に放り出し、律子は泣いた。

（全然諦め切れてないのね、私。そんなに彼の事、好きだったの？）

自分でも今の感情が理解できない。

（自分から別れようと想つていたはずなのに、何で未練がましいの

よ、私は…)

律子は自分で自分が嫌いになりそうだった。ここまで優柔不断だとは思わなかつたのだ。

その時、携帯が鳴つた。律子は慌てて手に取つた。

平井からだ。律子は出ようしない。

着信音が鳴り止み、留守番電話に切り替わつた。

「また出でくれないんだね。かけて来ても、何も話してくれないしどうしたんだ？ 一体何があつたんだ？ 憂く心配だよ。君が今どうしているのか…」

白々しい。何よ、今更。よつやく決断ができるそだわ。

「このメッセージを今聞いているのなら、電話に出て欲しい。もし、再生しているのなら、僕の携帯にかけてくれ。ずっと待つてゐるから。どこにも行かないで待つてゐるから。本當だよ。僕を信じて欲しい」

信じろですつて？ 何を言つてゐのよ？ 貴方の何を信じろつて言つの？

「バカじゃない、全く！ 何様のつもりなのよ、こいつは？ もつ何も未練はない！」

「心から願う。君が連絡をくれる事を。本當にお願いだ、返事が欲しい」

まだそんな事いつの？ 本当に嫌な奴ね。

「今でも君の事を愛しているよ、涼子」

## 幕末ホラー（前書き）

某国有放送の大河人気に乗ったわけではありません。もつと以前に書いたものです（と日記には書いておこいつ）。

ある時からその噂が広まり始めました。

京の町に龍馬の亡靈が出ると。

噂好きの人達は、いろいろな場所で龍馬の亡靈が田轟されている事を話しています。

明治政府にとつては聞き捨てならない噂でした。

「龍馬は生きているのではないか？」

そんな仮説まで立てられました。

亡靈と見せかけ、世間と官憲の眼を欺き、極秘に某かの謀を巡らせる。

まさしく疑心暗鬼をかき立てられていました。

しかし龍馬は間違いなく暗殺されています。

それは実行犯を送り込んだ現政府が一番良く知っている事です。

外国の政治を見聞し、日本にもそれを取り入れようとするばかりか、外国との自由貿易をも考えていた龍馬は、幕府のみならず、倒幕派にも危険人物と思われていたのです。

ですから、世間の人達以上に政府関係者は、龍馬の亡靈に怯えた

ようです。

その理由の一つに亡靈の出没場所が挙げられます。

龍馬は京都御所周辺に多く現れているのです。

京都見廻組が実行犯というのが大方の見方でしたが、本当はそうではありませんでした。

龍馬の考えに危機感を抱いた薩摩藩が、彼を暗殺させたのです。

現代では少數説ですが、それが真相なのです。

しかし、龍馬を知る人達は彼の亡靈が現れたと言つ話を一笑に付しました。

「奴ははやあの世で忙しいからこひびて戻る暇はないひつ

それもそうちも知れません。

龍馬は決してイジイジと後ろを振り向くような人ではなかつたの  
でしようから。

俺は元ボクサー。

試合中にキレてしまい、レフューリーをボコボコにしたため、ボクシング界を永久追放された。

そのため、今では「殴られ屋」などという商売で食いつないでいる。

実は俺は、ボクサーとしての能力はそれほど高くなかった。

俺は相手の心が読めるのだ。

だから、次に対戦相手がどんな攻撃をして来るのか、完全に予測できた。

つまり、「これから右ストレートを出す」と言われているのと同じ事。

どれほど優れた才能のあるボクサーでも、俺にかかるれば素人同然で、相手にならなかつた。

もちろん、無心で向かつてくる奴もいた。

だが、理屈では「無心」でも、心の声までは沈黙を守れないものなのだ。

だから「無心」なんて気にならなかつた。

パンチの鋭い相手にだけは苦戦した事は確かだが。

そんな俺だから、「殴られ屋」は始めるべくして始めた「商売」だった。

まず、殴るお客様に千円払つてもいい。

もし、俺の顔をかすめる事ができたら五千円、殴れたら一円、ダウントルセたら三万円という取り決めをしていた。

無論、賭け事と思われ、警察の「厄介になると困るので、おおっぴらにはできない。

客を集めるための余興として、場末の飲み屋や、ストリップ劇場の幕間を活動の場にしていた。

相手は酔っ払いか、ヨレヨレの中年。

俺は現役でも十分通用する身体。

勝負にならないのは、よくわかつていたので、殴られると思つた事はなかつた。

そんなるある日。

ストリップの幕間に、俺のショーが始まる。

何人が酔っ払いが挑戦し、まるで見当違いのパンチを繰り出した。

俺は心を読むまでもなく、あっさりとかわした。

今日は楽な仕事になる。

そんな風に思つた時だった。

「私もお願いしたい」

老人が舞台に上がつて來た。

多分、俺の父親より年上だ。七十代だろうか？

「では、挑戦料の千円をお支払い願います」

俺は微笑んで言つた。するとその老人は、

「いや、一万円払あう。但し、私のパンチを避けられなかつたら、倍返し。どうかね？」

何だ、このジジイは？ ビンビンに自信満々なんだ？

俺はムカついたが、殴られるとは思つていないので、

「わかりました。後で取り消しはできませんが、よろしいですか？」

「無論だ。お前さん」しかし、なかつた事にしてくれとは言わせんぞ

「承知しました」

クソジジイめ。吠え面かくなよ。

俺は胸糞悪さを抑え、構えた。

老人は俺の前に立ち、俺を睨んだ。

この気迫は！？ こいつ、本当に老人なのか？

「行くぞ」

老人が言った。右のパンチが繰り出された。俺はそれを予期していたので、あっさりとかわした。

「ゲヘッ！」

ところが何故か俺はかわしたところに繰り出されたパンチをまともに食らい、倒れてしまった。

周囲の観客が歓声を上げた。

「避けられなかつたな。倍返しだ。それに、ダウンしたから三万円も追加だな」

老人は不敵な笑みを浮かべ、俺を見下ろしていた。

「インチキだ。今、もう一発パンチを出したな、ジジイ！」

俺は飛び起きて老人に食つてかかった。

「いや、『老人はパンチを一発しか出していない』よ

端で見ていた劇場の支配人が口を挟んだ。

俺は啞然として老人を見た。

老人は五万円を手にし、劇場を去った。

俺はどうしても納得がいかず、老人を追つて劇場を出た。

「待つてくれ。どんなトリックを使つたんだ?」

「トリック? そんなものは使つていない

老人は振り向かずに答えた。

「確かに俺は右のパンチをかわしたはず。なのに……」

老人はようやく振り返つて、

「私は相手に嘘の心を見せる力がある。お前さんと逆だ」

「え?」

老人は俺と同じだった。力を使って俺を惑わしたのだ。

「本来、お前さんのその力は、あのような事に使う物ではないはず。そつは思わんかね?」

「……」

俺は何も言い返せなかつた。

「私が言いたいのはそれだけだ。後はお前さん次第だな」

老人はそう言い残すと、立ち去つてしまつた。

老人の言葉は、俺の胸に深く突き刺さつた。

## 黄泉返り

私は最愛の妻を失ってしまった。

しかも、私の不注意で。

脇見運転をしていて、道路脇から飛び出した少女に気づくのが遅れ、私はハンドル操作を誤った。

車はそのまま電柱に激突し、妻は潰れた車体に挟まれ、圧死した。

私は気が狂いそうだった。

妻が死んでしまった事だけでも衝撃的なのに、その原因が自分にあるのだ。

何度も後を追おうと思った。

その度に友人や親戚の人達が、私を止めた。

私は、

「死なせてくれッ！」

と絶叫したらしい。

そんな状態が何日も続き、私は痩せ衰えた。

そして不意に妙な事を思い出した。

我が家に伝わる秘伝。

私の一族は、古くから続く呪術師の一族であつたらしい。

その力は、祖父の時代に捨ててしまったようだ。

しかし父はこつそりとその秘術書を保管し、死ぬ直前に私にその在処を教えてくれた。

私はその秘術書を読んでみる事にした。

確かに、「死人を黄泉返らせる術」が載っていたはずなのだ。

屋敷の奥、まさに開かずの間にその書はあり、私は遂に封印を解くことにした。

秘術書は父に教えられた所に確かにあつた。

埃まみれだつた。

私は埃をフーッと吹いて飛ばした。

辺り一面にカビ臭いニオイが充満した。

ハードカバーを開き、ページを捲る。

「黄泉返り」

その術は確かに載っていた。

私は貪るように読んだ。

必要な物、呪文、手順、全て事細かに記されていた。

これで妻は黄泉返る。

私は恐ろしい事をしようとしているという罪悪感より、妻が生き返るという喜びの方を強く感じていた。

そして満月の夜、私はその秘術を決行した。

大きな壺に必要なものを全て投げ込み、呪文を唱えた。

「はつー！」

私は壺の中から叫び声がするのに気づいた。

「まさか？」

それはやがて人の声とわかるくらい大きくなつた。

「！」の声は？

私は歓喜の涙を流した。

妻だ。妻の声だ。

壺に駆け寄つた。

ああ、愛する妻よ。

早くその姿を見させてくれ。

ボンと大きな音がした。

その音と同時に、壺から妻が飛び出して來た。

間違いない。

あの妻だ。あの美しい妻だ。

私は一抹の不安を感じていた。

死人は黄泉返つても過去の記憶を失つていると聞いた事があったのだ。

しかし妻ははつきりと言つてくれた。

「貴方」

私は更に涙を流した。

良かった。思い過ごしだった。

彼女は私を覚えている。

妻は私に歩み寄り、

「何で私を死なせた！　あの時の苦しみ、味わわせてやるー。」

私は妻に首を絞められた。

遠のく意識の中で、それでも私は妻が黄泉返つた事を喜んでいた。

## 小説家になりたい！

私は夢見る乙女。

だつたのは四半世紀前だ。

もうすっかり「おばさん」。

子供には「三段腹」を笑われ、夫にはいびきを指摘され。

そんな私にもまだ「夢」があつた。

小説家だ。

恐らく、定年はないし、何歳から始めても大丈夫なはず。

子供の頃から、思い込みと前向きさには「定評」のある私は、覚えたてのパソコンを使って、無料で投稿できるサイトを探した。

あつた。

「小説家になれるよ」という投稿サイトだ。

早速超低速で入力した拙い短編を投稿した。

すると。

思った以上に好評だった。

それに味を占めた私は、再び短編を投稿した。

それも好評だった。

更に投稿した。

それも好評だった。

すっかり小説家気分の私は、次に長編に取り掛かり、第一話を投稿した。

数日後、ドキドキしながら、評価欄を覗いた。

評価は一件のみだった。

しかも低評価。

がっかりしてしまった。

うん？

良く見ると、その人は自分の作品も読んで欲しいと書き添えていた。

私は勉強になると思い、その人の小説を読んだ。

しかし、その人には申し訳ないのだが、それほどのものではなかつた。

感想も湧かないし、評価する氣にもなれない。

それでも何もコメントしないのは悪いと思い、

「素敵な作品で、勉強になりました」

と書いた。

すると次の日、私の「マイページ」にその人からのメッセージが届いてた。

私のコメントに対する感謝の言葉と、次の作品の評価依頼が書かれていた。

気乗りしなかつたが、読んでみた。

やはり思った通りで、何の感想も浮かばない、きつい言い方をすれば「独りよがり」な小説だった。

どうやら自分を主人公にした話のようなのだが、「白魔話」に終始しているのだ。

私には理解しかねるナルシズムの人ようだ。

今度はコメントする気になれず、そのまま放置した。

数日後、マイページに何通ものメッセージが送られて来ているのに気づいた。

全部例の人からだつた。

しかもそれぞれの送信時間の間隔がわずか10分程度。

1つ開いてみた。

私に対する評価の催促。

普通の文面。

2通りはやや強い催促。

3通りは句故コメントしないんだといつ怒り。

#### 4 通田は黙黙雑談。

5 通田は、お前の居場所を調べて直接文句を言つてやる、といつもつすでに常軌を逸した言葉。

いくら何でも、私の家がわかる訳がないと思ったので、次からはその人からのメッセージは開かないで削除した。

それから数日後、私は郵便受けに切手が貼られていない封書を見つけた。

まさか？

そんなはずはないと思いながら、封書を開き、便箋を取り出して読んだ。

「すぐそこにいる。逃げないで待つてろ！」

私は仰天して便箋を放り出した。

そしてすぐに家に駆け込み、ドアをロックした。

更に家中の窓の鍵を全てかけ、カーテンも閉めた。

結局何もなかつた。

それでも私は不安だったので、夫に相談した。

夫はサイトに相談してみる、と言った。

私はその夜、サイトの管理者にメールした。

次の日、サイトの管理者から返信があった。

私はその回答を見て驚愕した。

私は脅迫紛いのメールを送りつけて来た人は存在していなかった。

その人のIDは数年前に削除されて、現在使用されていないとい

う。

私は不審に思い、小説を検索した。

確かに存在していなかった。

どういう事なのか、さっぱりわからなかつた。

すっかり終わった。

そう思っていた。

しかし終わっていなかつた。

また郵便受けに切手が貼られていらない封書が投函されていたのだ。

便箋に「おひいき」記されていた。

「おこ、こつまで窓ガラスだ、早くコメントしない。」

## お風呂の怖い話

あらかじめ申し上げておきますが、このお話はお風呂に入る直前の人は決して読まないで下さい。

お風呂。

ホンワカとして気持ちのいい響きです。

でも、事と次第では、非常に恐ろしい場所に早変わりします。

勇作はお風呂好きです。

仕事から帰つて来ると、まずお風呂です。

一人暮らしの独身サラリーマンは、誰もがそんな暮らしなのかも知れません。

あまり感心しない事なのですが、彼はどんなに酔つ払つても、  
まずお風呂です。

以前付き合っていた彼女に、その事を咎められたのですが、勇作  
は全く意に介さず、ベロベロに酔つても、平気で湯船に浸かり  
ました。

彼女はその事を呆れた訳ではないのですが、勇作の自由気ままさ、悪く言えば身勝手さに耐え切れず、自然と付き合いは解消されてしましました。

しかし勇作はその事で落ち込みもせず、毎日を過していました。

そんなある日。

その日も残暑が厳しく、外回りをした勇作は、一刻も早くアパートに帰つて、湯船に浸かるうと家路を急いでいました。

「到着!」

勇作はドアを開けるなり叫び、ロックをすると、玄関で服を脱ぎ始めました。

いくら一人暮らしとは言え、あまりに行儀が悪いです。

彼はあつとこに素っ裸になり、バスルームに向かいました。

お風呂はタイマー予約ですっかり準備完了です。

「よーしー!」

入るまでは行儀知らずですが、きちんと掛け湯をしてから湯船に浸かるのは、さすがお風呂好きです。

「あアー……」

肩までお湯に浸かり、まるで頑固ジイさんのような唸り声を出します。

「生め返る」

本当にお風呂が好きななひとつです。

「わいど」

湯船から上がり、まずは頭を洗います。

「フオーッー」

すつきり爽快のシャンパーで洗うと、そんな声が田のよひです。

「あああ」

ゴシゴシと指の腹で頭皮マッサージです。

その時でした。

「えつ?」

自分の手以外のものが、彼の頭皮を刺激しているのです。

思わず手を止めてしまいます。

「?」

勇作は顔に着いた泡を拭いながら、恐る恐る振り返ります。

案の定誰もいません。

「氣のせいか

自分に言い聞かせるように呟き、彼は再び頭を洗い始めました。

「ひつー。」

「氣のせいではありません。」

確かに誰かが頭皮を刺激しているのです。

「誰だ！？」

彼は、日にシャンプーが入るのも構わず、素早く振り向きました。

しかし誰もいません。

「いない……」

勇作は、今度は「氣のせい」には出来ませんでした。

確実に誰かが頭を触っていたのです。

その時、ポタン、と天井から水滴が垂れました。

「？」

その水滴は、何故か泡立つており、粒も妙に大きいものです。

勇作は生唾を呑み込み、天井を見上げました。

するとそこには、長い髪の痩せ細った白装束の女が、涎を垂らしながらヤモリのようにへばりついていました。

## 雪の夜の怖い話

冬の夜の怖い話は、身体の芯まで凍えるような恐怖を味わうことはあります。

わざわざ本格的な冬到来の今にピッタリのお話を致しましょう。

ある村に一人暮らしのおばあさんがいました。

おばあさんは決して裕福ではありませんでしたが、亡くなつたおじいさんが残してくれた畑を耕し、牛の世話をして、野菜と牛乳を売つて生活していました。

そんな冬のある日の事です。

おばあさんの村から遠く離れた町で、銀行強盗事件が起りました。

ニュースで事件を知つたおばあさんは、

「この村はそんな事が起らなくて平和で良かつた

と思いました。

ところが、その強盗がおばあさんの村に逃げて来て、あわててか、おばあさんの家にやつて來たのです。

「ババア、騒ぐと殺すぞ」

強盗は若い小男で、田出し帽に革のブルゾン、ジーパンという出立ちで、銀行から奪つた札束の入つたバッグを持ち、獵銃でおばあさんを脅かしました。

「私の家には何もあげるものがないよ」

おばあさんは針金のよつに細い身体を震わせながら言いました。強盗は家の中を見渡して、

「確かにやうだな。なら一度いい。」  
ひらひらせんべいをかじりながら言いました。  
「せ

と言いました。おばあさんは腰を抜かさんばかりに驚きました。

その日から強盗はおばあさんに食事の支度や洗濯、お風呂の準備までさせました。

そして何日かが過ぎました。

警察は強盗の足取りを掴めず、まだ犯行現場付近の聞き込みをしていました。

おばあさんは強盗が入浴している間に、いつそ手紙を出し、警察に強盗がいる事を伝えました。

警察はおばあさんの家に強盗がいる事を知り、いろいろと作戦を考えました。

おばあさんが人質に取られているので、迂闊な事はできません。

最初は説得工作で臨む事にしました。

しかし、万が一を考え、狙撃班も配備する事になりました。

そして一日後。

警察は黒塗りの車で交渉人を差し向け、強盗の説得を始めました。

「君は完全に包囲されている。武器を捨てて出て来なさい。今ならまだやり直せる」

「つるせえ！」

強盗は窓ガラスを割り、狙銃を警察の車に向けました。

狙撃班に緊張が走ります。

「その家にいるおばあさんだけでも、解放してくれないか？ 何なら、私が代わりに人質になつてもいい」

しかし、交渉は難航し、時間ばかりが過ぎて行きました。

やがて日が暮れ、空から雪が降り始めました。

雪は辺り一面を真っ白にし、警察の人達の英気を奪つて行きました。

交渉は続きましたが、一向に強盗は警察の条件を呑まず、膠着状

態に陥つて行きました。

そして夜が明けました。

それでも交渉人達は粘り強く強盗を説得しました。

やがて強盗も精神的に参つて来たのか、交渉人が代わりに人質になる事を受け入れました。

交渉人はホッとして、おばあさんの家に歩き出しました。

するといきなり強盗が猟銃を構えて現れました。

雪の降りしきる朝に轟く銃声。

胸から血を流し、交渉人が倒れ伏しました。

強盗はサッと家の中に隠れました。

「助けてー！」

おばあさんの叫び声がしました。

そして静寂。

何が起こつたのかと、刑事達は固唾を呑みました。

やがて、遠巻きに待機していた刑事と機動隊が一斉におばあさんの家に駆け寄ります。

強盗は割れた窓ガラスから刑事達を見よつと顔を出しました。

次の瞬間、狙撃班が一斉に強盗を狙撃し、強盗は蜂の巣になつて倒れました。

交渉人と強盗の死によつて、事件は幕を閉じました。

刑事達がおばあさんの家を捜索しましたが、強盗が奪つた現金はどこからも出て来ませんでした。

「おばあさん、強盗は現金を詰めたバッグを持つていませんでしたか？」

刑事が尋ねました。

「いえ、持つていませんでしたね。手ぶらでしたよ」

「そうですか」

刑事達はガツカリしておばあさんの家を去りました。

おばあさんは一ヶ口コして、狸のよつてふつくりしたお腹をわざりました。

「やつれ。手ぶらでしたよ」

おばあさんは嬉しそうに歎きました。

新撰組始末記（前書き）

新撰組ファンの皆さん、重ね重ね「めんなさい。」

発足当時、局長一人と言つ不安定な体制で動き出した新撰組。やがて時の流れと共にその体制に綻びが生じ始める。

筆頭局長芹沢鴨の乱暴狼藉は日に余る物があり、これを憂えた土方歳三らが芹沢暗殺を画策したのである。

「芹沢ー、マジウザいしー、マジキショいしー、マジムカつくんすけどー」

土方が近藤に言つた。近藤勇も頷を、

「歳りんに同じー、芹沢、マジムカつくー」

と同意した。

「殺つちやつー、芹沢、殺つちやうー?」

沖田総司が話に加わつた。

「でもー、芹沢ー、マジ強いしー、マジ怖いしー」

近藤は慎重だった。しかし土方は強氣だった。

「芹沢ー、水戸藩とか言つてゐるけどー、ウソつぽいしー」

山南敬助も慎重派だ。

「私怪我したくないしー」

それでも土方は引き下がらなかつた。彼には秘策があつたのだ。

「みんなでー、芹沢ー、ボコればいいしー」

「いい感じー、みんなで芹沢ボコつー」

近藤が同意した。沖田が立ち上がり、

「私いちばーん」

「私にばーん」

と土方も立ち上がる。山南は仕方ないと溜息を吐いて、

「じゃあ、私さんばーん」

「あー、私局長なのにー、みんなひどーー」

近藤は順番を変える事を主張した。

「イサミーはー、局長だからー、締めでお願いしまつす

土方の取りなしで、近藤は止めを刺す事で決着した。

芹沢鴨らを襲撃殺害した。

そして近藤を局長、土方を副長とする体制が完成する。

その翌年である元治元年、新撰組は池田屋事件でその名を知られるようになるのだった。

かゆい！

かゆい。かゆい。かゆい！ かゆい！

猛烈にかゆい！！

背中の、ビ�しても描が届かないところ。

うーっ！ ひーっ！ くーっ！

ダメだ。

精一杯頑張つてみたが、ビ�しても届かない。

柱の角で擦つてみた。

難しい。うまくそこには届かない。

とにかく、ピンポイントでかゆいのだ。

あ、今かすめたのに。ダメだ、またずれた。

ますます我慢できなくなる。

何なんだ、このかゆさは？

鏡で見てみよ。

ゲゲッ、かゆいところ以外が、引っかき過ぎて酷い事になつてゐる

原因わからないな。鏡で見たのでは無理なのか。

そうだ、相棒に見てもらおう。

それが一番だ。

「なあ、俺の背中、凄くかゆいんだけど、どうなってる？」

相棒はチラシと俺の背中を見て、

「小さい虫に食われてるよ。そのせいだろ」

「ええ？ 虫に食われてるのか？ そいつは大変だ」

「おー、誰か来たぞ」

相棒の声に俺はハツとして明かりを消し、定位置に戻った。

コソコソ足音が近づいて来た。

警備員だ。巡回の時間か？ いつもより早いな。

やばかった。

お、入って来たぞ。いつも通り過ぎるの。

「誰もいないよな」

奴は俺達の方に懐中電灯の光を向けた。

でも大丈夫。ばれたりしないさ。

警備員は立ち去りながら、

「いつ見ても理科室の人体模型と骸骨は氣味悪いよな」と俺達の悪口を言つた。

## メリークリスマス

私は恵比寿有希。「ぐく普通の〇」。

今日は去年のクリスマスイヴに出来つて、バレンタインデーから付き合い始めた彼とのお食事。

二十ウン年の人生で、初めて恋人と過ごすイヴなのだ。

彼はホテルのレストランに予約を入れてくれて、私を優しくエスコートし、ディナーが始まった。

「はい、メリークリスマス、有希」

彼はさり気なくプレゼントを差し出した。

私が前から欲しかったブランドのショルダーバッグだ。

「ありがとう。嬉しい」

「喜んでもらえて、僕も嬉しいよ」

彼は何故か照れ臭そうに言つた。

「あ

彼の照れている理由がわかつた。

バッグの中にホテルのカードキーが入つていて、

まさか？ これは……。

もちろん、もうそれなりにお付き合いをして来ているから、今日が初めてという訳ではないけど。

でも、こんな高級ホテルでなんて、ちょっとドキドキだわ。

「いいかな？」

彼が尋ねる。私は俯いて、

「うん」

と承諾。当たり前でしょ。もひつ、何を今更。照れ屋さんなんだから。

そんなシャイな彼が堪らなく好き。

つい、笑顔が溢れてしまつ。

彼を見る。彼も私を見て微笑んでいる。

「「めん、ちょっとトイレ」

彼は苦笑いをしながら、席を立つた。

緊張しているのかな？ そうよね。こんな高級ホテルを予約して、いつも通りでいられないわよね。

私はあまりにも幸せで、おかしくなりそうだった。

「……」

彼が戻つて来ない。トイレにしては長い。  
何かあつたのかしら？

私は心配になつて、彼の携帯にTELした。

えつ？ 現在使われておりません？

嘘？ 今朝は通じたのに。どういう事？

私は不安に駆られて席を立つた。

すると、向こうからホテルの支配人がやつて來た。

「恵比寿有希様ですか？」

「はい、そうですが

支配人は厳しい表情をしている。何だろ？

「お連れ様の渋谷瑛太様が、宿泊料金をお支払いにならないままで連絡がとれなくなつています」

「はあ？」

私は全身から嫌な汗が出て來るのを感じた。

「お部屋に、請求は貴方様にするよつたとメモが残されておりました」

「何ですって！？」

私は驚愕した。あいつ、何て事を！

このバッグは、そのお詫びつて事？ だからカードキーを入れてあつたの？

私は支払いを拒否しようつと思つたが、ここで揉めるのも嫌なので、バッグに免じて許してあげる事にし、立て替えた。

そう、あくまで立て替えたのだ。

痛い出費だつたが。

今年のイヴは散々だ。

来年こそ、良い年にじみつ。そう心に誓つた。

そして、年が明けて二〇一〇年。

良い年にはならなかつた。

あのバカは、バッグの支払いも、私のカードでこつそりしていたのだった。

だからクリスマスなんて大っ嫌いなんだ！

## グロテスクな夜

その日は熱帯夜となつた。

気怠い一日が終わり、辺りが闇に支配され始めた。

そんな夜には、突飛な行動をとる者も多いかも知れない。

その男は鉈のような出刃包丁を右手で持ち、死体の前に立っていた。

死体は全裸で、目を背けたくなるような姿をしていた。

男は一矢口とした。

「ひおおおつー！」

出刃包丁が振り下ろされ、死体の首が切り落とされた。

男は無造作にその首を放り投げ、ゴミ箱に捨ててしまった。

「へへへ」

男は皿を爛々と輝かせ、舌なめずりした。

「ふおおつー！」

次に男は包丁を寝かせ、バシッと叩きつけた。

グシャッ。

何かが潰れた音がした。

赤い液体が飛び散る。包丁に液体がまとわりつく。

「ヒヒヒ」

さりに男は死体の両脚を無理矢理広げた。

何をするつもりなのか？

ああ、そんな。

男は強引にねじ込んだ。

異常だ。もはや人間の所業ではないと思えてしまう。

しかし男はやめない。

さりにねじ込む。

死体は悲鳴もあげる事が出来ない。

男はやがて満足そうに頷き、開いていた脚を戻した。

こんな行為が許されるのだろうか？

もう私は堪えられない。

男を止めなくては。

「そのまま黙つて見ていいわけにはいかない。

「もう我慢できなイぞ」

私は意を決して叫んだ。

男は手を休めて私を睨んだ。

「何ー?」

殺される?

一瞬怯んだ。しかしこゝで引き下がる訳にはいかない。

「お前にこれ以上好きにはさせない。その包丁をよこせ!」

「何だとー?」

男は包丁を持ったままで私に近づく。

私は冷や汗を垂らしながら、思い切つて言った。

「お前に任せてこると、折角の鳥の丸焼きが台無しだ。私に代わる

大恋愛の末結ばれたわけではありません。

幾度となくしたお見合いの末、やっと結婚に漕ぎ着けた、といつ  
私です。

夫はとても優しく、その「両親もとてもいい方です。

一男一女にも恵まれ、私はとても幸せ。

独身時代、恋愛できない自分に焦りを感じていました。

あの頃の憂鬱感が嘘のようです。

友人達にも羨ましがられました。

多くの人が大恋愛をして劇的なゴールインをし、やがて熱が冷め  
るよう冷え切った夫婦関係に陥っているのに、私と夫の間にはそ  
んな事は皆無です。

妄想ではありません。

私は本当に今の生活に満足しているのです。

只一つの事を除いては。

「の際だから、思い切って言つてしまします。

唯一の不満。我慢しかねる事。

それは、お義父さん。

いえ、優しい方です。

子供の面倒も良く見てくれます。

私に対するセクハラはありません。

そんな方でしたら、まだ対処のしようもあります。

私が我慢できないのは、お義父さんの生活習慣です。

手を洗わないんです。

トイレに入つても、外から帰つても、手を洗わないんです。

ああ、お願いだからそんな手で子供を抱いたり頭を撫でたりしないで！

そんな手で冷蔵庫を開けて中のものを触らないで！

私は毎日お義父さん達が寝てから、家中の消毒をしています。

子供達はお風呂で念入りに殺菌効果のある石鹼で洗つてあげます。

夫に相談した事もありました。

「気にし過ぎだよ

と言されました。

確かにそうかも知れません。

それでも、こればかりは譲れないのです。

私は直接あの優しいお義父さんにそのような事を聞かせません。

自分がおかしいのでしょうか？

日々その感情が高ぶるのを抑えるのが大変です。

ああ、今日も洗わない手でつまみ食い。

しかも2切れ取ったキュウリを1切れ器に戻しました。

私はつい包丁をジッと見つめてしまします。

お義父さん！ いい加減にして！

そう言える日と私が暴走してしまつ日のどちらが早いのか……。

ああ、また包丁をジッと見ている私……。

お化け屋敷に挑む（前書き）

群馬県には、本当に怖い心霊スポットがあります。

## お化け屋敷に挑む

「よひ、久しぶり」

正雄が茂に言った。

「GW以来か?」

茂が応じた。

俺達は今、「お化け屋敷」と呼ばれている村の外れの一軒家に行こうとしている。

「本当に出るのか、そこ?」

壮太が言った。すると正雄が、

「らしいぜ。俺のバスケの先輩の友達が追いかけられたって

「まさか!」

俺は驚いて言った。慎吾が、

「マジでやめていいですよ、そこ。俺、帰りたくないって来たなあ

「相変わらずのビビリだな、慎吾?」

からりかうつむいた茂が言った。慎吾は剥れて、

「エエコロジヤねえよ！ 何だよ、その言い方はーー？」

「そんなに怒るなよ、慎吾」

正雄が仲介した。

「とにかく行ってみよひよ。」ソレで話していくもラチが開かない

俺がそつ提案すると、

「そりですね」

と壮太が同意した。

やがて俺達は噂の「お化け屋敷」のすぐそばに着いた。

「つひー、確かに凄く出でやうな外觀だな」

壮太が言った。俺が、

「そりか？ 何も感じないけど」

「いや、すつげえ氣持ち悪いつすよ。俺マジやばいかも」

茂が寒氣を感じたよひに身を震わせた。

「大丈夫か？ 顔色悪いぞ。戻った方がいいよ」

俺は茂の変貌振りに気づいて言った。

「そうみたいですね。茂、車に戻った方がいい」

正雄もそう言った。

「あれ？」

その時正雄と壮太、慎吾と茂が顔を見合せた。

「あのや、お前らの先輩じゃないの、そりゃー、

慎吾がブルブル震えながら尋ねた。壮太も蒼ざめて、

「ち、違うよ。お前らの先輩かと思つてたぞ」

4人が一斉に俺から離れた。

俺は一ヶとして言った。

「ようこそ、我が家へ」

## 愛されたいから殺したい

私は悩んでいた。

私の妻が浮気している。

興信所からの調査報告書を見た。

疑つてはいた。

年の差婚なのでそんなことを考えてしまつのだ、と自分を戒めた事もある。

そして、そんな事はないとずつと信じていた。

私の思い過ぐしだと。

しかし、現実は違つていた。妻は紛れもなく「クロ」だった。

私は悲しかつた。

何十年も一緒に暮らして來たのに。

私は一度も妻に手を上げた事はなかつたし、暴言を吐いた事すらない。

何故浮気をされたのか全く理解できない。

相手の男は若い男なのかと思つたが、私と変わらない老年の冴え

ない男だ。

ますます浮気の理由が分からなくなつた。

私は調査報告書を薦めるように読み、妻が一体どこでその男と知り合つたのか知つた。

ボランティアで参加していた介護施設の中でだつた。

妻は以前から福祉に興味を示し、熱心にその類いの講習を受けて資格試験を受けていた。

彼女は若い頃から何事にも一生懸命で、またその試験勉強をしていた頃は、私も妻の事を疑つていなかつたので、彼女をサポートした。

その甲斐もあって妻は資格を取得し、ボランティアに関わるようになつた。

そして例の男と知り合つたのだ。

私が出張で何日か留守にすると、決まってその男と連絡を取り、会つていた。

酷い時は泊まりがけで出かけたりもした。

報告書を読むのが辛くなつたが、それでも私は何とか耐えて読み進めた。

さすがに人目を気にしているのか、ラブホテルのような場所には

行かず、決まってシティホテルがビジネスホテルで会っていた。

相手の男も妻子がいる。

両方共に不倫だ。

一時は相手の奥さんにしての事を話し、2人で現場に乗り込もうかと考えもした。

しかし相手の奥さんは病弱で、そんな事はさせられないし、するわけにもいかない。

私は決断した。

私は自分で解決しようと思った。奴には奴で、自分の家族と向き合つてもらつた方がいいと。

私は妻が帰るのを待つた。

その夜遅く、妻は帰宅した。

彼女は私がまだ起きていたのに驚いていた。

「どうしたの、こんな遅くまで起きて。明日も早いんでしょう？」

「構わんさ。明日は休暇を取つた。お前とゆっくり話し合おうと思つてな」

「話し合ひへ。」

妻は何の事だといつ頃で私を見た。私はほりわたが煮えくり返る  
思いだつたが、

「これを見てみろ」

と調査報告書を放つた。

「何、これ？」

妻は驚愕していた。報告書を持つ手がブルブルと震えている。

「何よ、これ？ 私を調べていたの？ 酷いわ！」

「酷いのはどっちだ？ お前は私がいない時、いつもその男と会つ  
ていた」

「それは……。話そうと思つていたのよ

「話す？ 何を話すつもりだったんだ？」

「でも、なかなか言い出せなくて……。私もどついたらいいのか悩  
んでいたから」

「何が悩んでいただ！ 私はお前の何倍も悩んでいたんだぞ！」

「何を悩むつて言つのよー？ 貴方は仕事ばかりで、私の事何も構  
つてくれなくて！」

私は妻のその言葉にカチンと来た。

「何を言つたか！ お前が試験勉強をしていた時は、仕事も早めに切り上げて、協力したじゃないか！ それを構つてくれないとはどういつ言い草だ！？」

「せうやつでいつも恩着せがましいのが貴方の嫌なところなのよー。」

「あこつはあこつといふのがないから好きなのか？」

「違うわ！ それは誤解よ。貴方はとんでもない思い違いをしているわ！」

「どんな思い違いだ！ そうだ、お前の事か？ 確かに思い違いしていたな！ お前はとんでもない女だったよ」

「何ですか！？」

妻はテーブルの上にあつた皿を私に投げつけた。

「くつー。」

私はそれをかわそりとして顔を両腕で庇つた。

皿は私の右腕に当たつて砕けた。

「ギャッ！」

妻の叫び声がした。私は腕を下げる妻の方を見た。

「ー。」

彼女は皿が砕けた時に飛び散った破片の一つを喉に喰らい、そのまま倒れていた。

「バカな……」

私は妻に駆け寄り、声をかけた。名前を呼んだ。しかし妻はピクリとも動かなかった。

確かに殺してやりたいと思つた。しかし、本当に殺そうと思つた事はなかつた。

いくら浮氣をしたとは言え、それがそこまでの罪とは思つてはいなかつた。

私は妻の遺体にすがり、泣き続けた。

気がつくと私は妻の遺体を抱いて寝てしまつていた。

悲しみに耐え、彼女の遺体を寝室のベッドまで運んだ。

「何で事だ……」

私は昨夜の事を思い返し、また涙した。

その時、私の感情を全て消し去るかのように玄関の呼び鈴が鳴つた。

時計を見ると朝の7時だ。

「こんな朝早く誰だらけへ、私は誰であるかとすばぐ追って返そつと  
思つて玄関に向かつた。

「えつ？」

ドアを開くとそこには立つていたのはあの男だつた。

何だ、どういう事なんだ？

「朝早くに申し訳ありません。娘はまだ寝ていますか？」

## 「**爆氣を出して**（前書き）

「大ドンテン返し」改め、「爆氣を出して」です。

## 勇気を出して

僕は中学2年生。

1年の時から、好きな子がいる。

彼女とは小学校が違つたので、入学式の時に見かけ、一目惚れしてしまつた。

しかし、残念な事にクラスは別になつた。

それでも彼女の事が気になり、同じクラスの奴に用があるフリをして顔を見に行つたりした。

小学校の時からの悪友には、僕の行動はわかりやすかつたりしく、すぐにバレた。

随分冷やかされた。

絶対無理だからやめとけ、とも言われた。

そして、優柔不斷な性格も手伝い、告白できないまま1年が過ぎた。

今年しかない。

そう思つた。

3年になれば、それどころではなくなつてしまつ。

僕はそんな事はないと思つたが、彼女は学年ドトップを争つ優秀な子なのだ。

僕とは違つ。

来年になつてしまつと遠い存在になつた。

諦めかけた事もあつた。

でも、何もしないで引き下がるのは、絶対に良くないとも思つた。

ダメでもいいじゃん。

そう言つてくれた奴もいた。

そうだ。

断られたからって、死ぬわけじゃないし。

決断した。

ところが、だ。

彼女が避けている。

そう思えた。

僕が廊下を歩いているのを見つけると、サッヒトイアレに入つてしまつたり、階段を駆け下りて逃げてしまう。

何だらう？

僕、彼女に何かした？ 覚えがない。

嫌われている？

そんな……。

さすがに心が折れかけた。

そんな口が続いた。

周りの悪友達も、僕の落ち込みよつて言葉もない様子で、決してその事は口にしない。

重い足取りで下校する。

あ。

少し前を彼女が歩いている。

今度こそ！

僕は走った。

彼女が角を曲がった。

僕もそれに続いた。

そして用意していた言葉を言おうと口を開いた。

「前から好きでした！ 付き合って下さい！」

角を曲がったところで逆にさう言われた。

「ええー！？」

そしてやっと言えたのが、

「いや、いやいや！」

僕は何が何だかわからなくなるほど嬉しかった。

## 呪殺依頼

私は呪術師。

表向きは占い師だ。

時々ではあるが、私に「裏の仕事」の依頼がある。

それは「呪術による殺人」だ。

まだそれほど受けた事はないが、これは大変な疲労を伴つ。

人一人を呪い殺すには、その者の生命力を完全に消滅させるだけの呪力が必要なのだ。

だから報酬は高額。

都心の一等地に大豪邸が建てられるくらいは頂く。

高額の理由はもう一つある。

あまり依頼を受けたくないのだ。

呪殺の疲労は常人の想像を絶する。

一度と受けたくないと思うくらい。

だから今まで受けた依頼は、私が依頼者の言葉に納得し、確かに生かしておけない存在だと思えた場合に限られている。

その代わり、一度受けた呪殺の依頼は撤回ができない。

殺すのはまずいと後悔しても、依頼者は一生その咎を背負つしかない。

そのくらいの覚悟があつて初めて、呪殺の依頼をするべきなのだ。  
相手がのた打ち回つて死んだと聞き、発狂した依頼者もいるのである。

ある日、神妙な面持ちの老夫婦が、私の店に現れた。

私は一目で殺しを依頼に来た、と感じた。

それくらい一人から発せられる気が、澁み、歪んでいたのだ。

「本日はどういった用向きでお出でになりましたか？」

私はそんな思いを押し隠して、にこやかな顔で尋ねた。

「実は……」

夫の方が小声で呟いた。

「はい？」

私は話を聞き取ろうと身を乗り出した。

「ぐ……」

横に座っていた妻の方が、いきなり私の腹に出刃包丁を突き刺した。

「な、何故……？」

私は出刃包丁を両手が切れるのもためらわず、押し留めながら言った。

「私の息子は貴女に呪殺を依頼して、その結果、相手の死に様を知り、それを悔やんで自殺したのよ！」

「……」

私は言葉もなかつた。夫の方が私の両手を掴んで、包丁から引き剥がし、

「お前のせいで、死ななくていい息子が死んだんだ！ あの世で息子に詫びるがいい！」

と叫んだ。

私はこんな日が来るとは思っていた。

所詮、呪術師の最期はこの程度のものだ。

しかし、気力を振り絞って最後の嫌味を言い放った。

「残念ですが、呪術で人を殺めた私は天国にも地獄にも行けずに消滅するだけなので、息子さんに詫びられません」

## 安直作家の一 日

有楽町律子は作家。

とは言え、全然売れていないし、書店にも彼女の本は並んでいない。

たまたまあある雑誌の小説賞を受賞したため、何となく作家業に入つたお氣楽女である。

もちろん、専業ではない。

平日は新橋の会社に勤務するの」である。ブレイクダンスはできないが。

それでも、「ごく稀に仕事の依頼が来る。

短編を書きませんかと、デビュー作を掲載した雑誌の編集者から連絡があった。

律子は一いつ返事で承諾し、まずはプロットを練る為に大型書店に行つた。

いろいろと資料になりそうな本を漁る。

しかし、どうもペンと来ない。

しかたなく、家路に着く。

自分の部屋に籠り、ボンヤリ過ぐす。それでも何も思い浮かばない。

「あ

ふと思いつく。でも思い直す。これは以前誰かが書いていた。

暢気な性格だが、人と同じ物は書きたくないなどといつおこがましい事に拘っている。

骨格が似ていても、内容が違えば問題ないと編集者にも言われたが、題名すら被るのは嫌だと思つので、なかなか作業は渉らない。

「ああ

またふいに思いつく。書き始めてみる。

また手を止める。全部消す。

そんな事を繰り返しながら、律子は何とか短編を書き上げた。

意気揚々として編集者に連絡する。

すると編集者は、

「申し訳ない。差し替えがあつて、有楽町先生の短編はなしになりました」

と言つた。

普通なら文句の一つも言つたのだが、お氣楽な律子は別に何も言わない。

なら、投稿サイトでアップしようか。

などと想ひ程度である。

いつして日本一安直な作家の田は終わる。

めでたし、めでたし。

## あの夏の日

夏休み。

同窓会といつほどの堅苦しいものではないが、何となく集まる方向で話がまとまり、久しぶりに再開した高校時代の悪友共。

場所は近くの居酒屋。中には常連もいるよつた馴染みの店だ。

皆一端の社会人になり、早い奴はガキまで作ってる。

気楽な俺はまだ結婚どころか、彼女もない。

集まつたのはヤロウばかりなので、俺が女を作らない事に話題は集中した。

「お前、高校の時モテてたよな？ 何で彼女いねえのさ？」

「そりだよな。何でだ？」

「まさかお前ひつつか？」

「ちげーよー。まだ俺がガキなだけさ」

するとその頃一一番親しかった信一が言つた。

「もしかして、お前まだあれ引き摺つてんのか？」

「おーー！」

隣にいた晶が信一を嗜めるように睨んだ。信一は、

「あ

と小さく叫び、黙り込んだ。

「あの事つて何だよ？」

「何でもねえよ。気にするなって」

晶は俺の空になつたコップにビールを注ぎながら陽気な顔で言った。

「お、ありがと」

俺は零れ落ちる泡をズズッと吸い、一気にビールを飲み干した。

同窓会モードキは大いに盛り上がり、一軒目の店に行く話に発展した。

「翔の知り合いの店でさ。結構いい子がいるぜ」

すっかり酔いが廻つた幹夫が言つた。すると翔が、

「夜行くからそつ思えるのさ。耳聞合つてビックリするぜ」

俺達はそれに爆笑した。

「あ、そうだ、こっちが近道だ」

神社の脇まで来た時、翔が行つた。

「ここの通り抜けた方が早いんだよ。俺のこつものコース

「ええ？ やだなあ、こんな真っ暗なところは。俺は遠回りでも道を行くぞ」

信一が言った。すると翔は、

「お前昔から怖がりだつたよな」

「関係ねえよ！ 暗くて足元が見えねえから、やめといた方がいいつて言つてんの！」

しかし信一の「抵抗」も空しく、俺達は神社を通つて向こうの通りまで出る事になった。

「どうせならや、一人ずつ行く事にしねえか？」

酔っ払いの幹夫が提案した。

「おお、肝試しつぼくていいねえ。こんなに蒸し暑い夜は、絶好の肝試し日和だな」

陽気な声で晶が賛成した。信一は嫌そうにしていたが、また「怖がり」と言われたくないのか、何も言わなかつた。

ジャンケンで順番を決めた。俺は運の悪い事に最後になつた。

「畜生」

そう呟いて、一番手の信一が境内に入つて行つた。

「出るぞ出るぞ、信一。」

「ひみせえよ。」

翔の煽りに信一は怒鳴り返した。

次にその翔が、そしてその次に晶が、さらに幹夫が続いた。

「さてと」

俺は幹夫の姿が見えなくなつたのを確認してから、境内に足を踏み入れた。

「あれ？」

いくら進んでも幹夫の姿が見えない。

（俺を嵌めたのか？）

高校時代、仲間同士でよくこういつの悪戯をしたものだ。

俺は酔いが廻るのも構わずに走った。

境内を抜け、反対側の通りに出た。しかし誰もいなかつた。

「おい、冗談が過ぎるぞ！」

俺は大声で怒鳴つたが、誰も反応しない。

「どうせやつだよ……」

俺はイライラして周囲を見回した。

袁輪君？」

「え？」

俺はハツとして声がした方を見た。

「やつぱり蓑輪君だ。私よ、飯山由美子よ」

俺は酔いでかすむ目を凝らして、その女性を見た。

- ユミか？

懐かしい響きだつた。『//まーまー』とした。マークのハ  
重歯はまだあつた。

「…」

「お前」何してゐのや〜。」

「私、」の先にあるお店で働いてゐるよ。母子家庭は大変なんだか

「ひ

「へえ

俺達はどちらからともなく歩き出した。

「さつ わまで信一達と一緒にたんだ。居酒屋で飲んでたんだよ」

「信一君達？」

「」の顔色が変わった。

「どうした？」

「蓑輪君、忘れちゃったの、信一君達と一緒にツーリングに行つた時のことさ」

「歯壓崩れに巻き込まれて死んだのよ」

俺は驚愕した。思わず背中に手をやつた。

「貴方も巻き込まれたけど助かったの

「ああ」

俺はこうこう思っていた。」の背中の傷、その時のものか？

俺だけ助かった……。なんだ……。

親に聞いても話してくれなくて……。

しかも俺はそのまま引っ越し越して……。

「思い出した？ 信一君達はもつといないのよ」

「ああ

「危なかつたわ。きっと貴方を連れに来たのよ。今日が命日なんだもの」

俺はユリの葉にゾッとした。

「いじよ、私の働いてる店」を、入って

「うん

俺はユリに導かれるまま店の中に入った。

「俺があんな」とを言い出さなければ……

翔が悔し涙を流しながら言った。晶が、

「お前のせいじゃねえよ。偶然だよ」

「だつてさ、まさかあの神社が待ち合わせ場所だつたなんてさ。それにあの日がコリの命日だなんて……」

「だからどうしようもなかつたんだよー。蓑輪とコリはクラス公認の仲だつたんだ。俺達の友情の力より、コリの蓑輪への愛情の力の方が上だつたんだよ」

「でもれ……」

それでも尚自分を責めようとする翔を畠は遮つた。

「あの時、信一がコリの話をしかけたのを止めた俺にも責任がある。いつまでも誤魔化して来たから、コリが怒つたんだよ」

その言葉に一同は静まり返つた。

俺は全てを思い出した。

コリを後ろに乗せ、ツーリングに出かけた事。

そして崖崩れに遭い、コリが死に、俺だけ助かつた事。

事故のショックでその時の記憶を全て失つていた事。

友人達が氣を遣つて俺にコリの話をしないようにして、両親も居た堪れなくてその町から引越しをした事。

「やつと、やつと会えたね、蓑輪君。つづき、瞬。もう一度一緒にツーリングに行こう」「ひー

ユリの顔は穏やかで、俺に恨みがあつて会いに来たとは思えなかつた。

でも俺は構わない。ユリとなら何でも行ける。

俺とユリは高校の制服に着替えていた。

そしてバラバラになつたはずの俺のバイクは新車で現れた。

「行ひ、ユリ」

「うさ」

俺達の乗るバイクはどことも知れぬ広い道路を走つた。

道はどこまでも続き、果ては見えなかつた。

私、いつづき者（死神）です（前書き）

「いつづき？」 私は誰？

私、こうこう者（死神）です

は。

あれ？

私、確かに通学途中、トラックに跳ねられて、グシャって地面に叩きつけられたはずなんだけど？

おかしいな。

顔を思い切りアスファルトにぶつけたような気がしたのに、血も出でないし、怪我もしていない。

なんだ、夢だったんだ。

良かつた。

さてと、学校に行かなくちゃ。うん？ 私つてば、制服のまま寝てたの？

あれ？ 何だ、こー？ 一面お花畠。

どこよ？

「ああ、気がつかれましたか」

男の人の声がした。

「イヤーッ、痴漢ンンンー！」

私は変態に部屋に忍び込まれたと思い、叫んだ。

「酷いなあ。私は痴漢ではありません。」いつも者です」

声のした方をふと見ると、スーツ姿の男性が名刺を差し出して立っていた。

「ああ、どうも」

私は立ち上がり、それを受け取る。

「え？ 死神さん？」

その人の姿と職業のあまりのギャップに啞然とする。

「本当に？」

私は名刺とその人を何度も見比べてしまった。

「初対面の人には、よく言われます、ハイ」

死神を名乗るその人は、頭を搔きながら言った。

え？ って事は、もしかして？

「はい。貴女はめでたくこちらの住人になりました」

えええええええええツツツツー！？

「じゃ、じゃ、じゃあ、ひょっとしてもしかして、まさかとは思つ  
けど、私、死んじゃったの！？」

私は死神の襟首をねじ上げて怒鳴つた。死神は苦笑いをして、

「貴女の生きていた世界では、やつこつ言い方になりますね」

「……」

私は啞然とした。すると死神は、

「さわさわ 笹霧美智流さん、高校一年生。享年十七歳ですね」

と楽しそうに言つた。

「あんたねええええ！」

私は更にそいつの襟首をねじ上げた。そいつは苦しそうに、

「や、やめて下さこ、苦しくて死にそうです……」

と言つた。

「死神が死ぬのか、このー！」

私は泣きながらそいつの襟を放した。

「はー、死にますよ。できればそつして欲しかったのですが

「はあ？ 死神が死にたいの？ ふざけないでよ」

とことん人をおちょくつている。バカにしないで欲しい。

「死神は誰かに殺されると、その人の代わりに生き返って、その人の人生を引き継げるんです」

1

全身に鳥肌が立つ。という事はよ、この冴えないおっさんが、私の身体を借りて、女子高生として生きるって事？

「冗談じやないわ！」

「はい、  
冗談ではありますん」

そいつはふざけた様子もなく、一一口一 口して言った。

「じゃあ、あんたが私を殺してくれれば、私が生き返れるのよね」

「それはできません。生を返す事ができるのは、死神の特権なのです」

「そんなあ」

私は脱力した。

「ですから、あなた方には、死神候補生として研修を受けていただ

きたいのです「

私は急に希望を見出した。

「じゃあさ、研修受けて、死神になれて、誰かに殺してもうえれば、生き返れるのね？」

「はい、そういう事です」

死神は相変わらず一貫二貫したままで答えた。

「よおし、頑張るぞー！」

私は自分が死んでしまったのを忘れて、死神研修に燃えていた。

そして、しばらくして知ったのだ。

それは方便なのだと。

私も死神になり、死んだばかりの女性に同じ事を言つた。

「死神になれば、殺されると生き返れるのですよ」

そんな風に騙さないと、最近の死んだ人達は、素直に自分の死を認めないのだそうだ。

あの世まで、嫌な「世の中」になってしまったのだった。

## 黄昏の恋の行方（前書き）

覆面企画用に書きました。全面的に甘つたるいのは、そのためです。

## 黄昏の恋の行方

「僕と結婚してくれ

腐れ縁の男に遂にプロポーズされた。  
背が高くて鼻も高くて眉毛もきりり。

きつちりと七・三に分けた実直そうな髪型。

一般的な分類だと高い確率で美男子だつ。でもあたしは実にあつさりと、

「無理」

と答えた。

当然のことながら男は目が点になり茫然自失、今にもビルの屋上から飛び降り自殺しそうな顔色になつた。

「どうして？ 僕達はずつと付き合つて来たんじゃなかつたのか？ あれば嘘だつたのか？」

男は涙ぐんでいた。こいつは本物の馬鹿。あたしは思つた。

「結婚してくれって言われてもさ、あたしらまだ中学生だし」朝早く起きて苦労して三つ編みにした髪を指でくるくるしながら言つ。

「でも、澄香……」

澄香と言つのはあたしの名前。

ついでに言つと名字は金井。

それであたしにプロポーズした馬鹿男の名は金井睦美。

名字は同じだが、親戚でも何でもない全くの赤の他人だ。

名字が同じせいであたし達はよくクラスのあほ男子どもにからかわれた。

「二人は夫婦？」

中坊辺りが思いつきそつな下らない話。

もちろんあたしはいつさい無視していたが、睦美のあほはそれにいちいち反応した。

「ち、違うよ、澄香さんとは名字が同じだけで何でもないんだよ」  
だから余計からかわれた。

それがわからないあほなのだ。

小さい頃はもう少しあつこ良かつたんだけね。  
どうしてあんなになってしまったのか。

「確かにあんたのことは好きだった時期もあるよ。でもそれは幼稚園の時じやん！ いつまでそんな大昔のことを引きずっているのよ、あんたは？」 それはもう終わったことだから

いじいじした男は一番嫌い。

童話や昔話を読んで本気で王子様やお姫様になろうと思っていた頃から一步も前に進んでいないの？

「澄香……」

睦美は今にも泣き出しそうな顔。

決壊寸前のダム並みに危険。でも同情はしない。

「とにかく今はまだ中学生なんだし、どっちにしても結婚はできないし！」

あたしはもう相手にするのが面倒臭くなり、歩き出した。

ついて来たら怒鳴りつけてやろうと思つたが、振り返ると睦美は姿を消していた。

（まさか本当に自殺？）

まさかね。あいつにそれほどの行動力はない。

断じてない。絶対ない。決してない。

そう思えば思うほど睦美のことが気になる。

あいつのことがこんなに心配だと思ったの生まれて初めてかも知れない。

「あたしつつてお人好しね」

自分に呆れながら睦美を探した。

あいつはそれほど足は速くないし、あたしが後を追つて来るなんて思わないだろうから、隠れるとかの高等技術も使わないだろう。でもあいつの姿はどこにもなかつた。

「睦美？」

名前を読んでみた。しかし返事はない。

何となく腹が立つて来る。

「馬鹿野郎」

誰に向かつてと言つわけでもなく叫び、家に向かつ。（無駄な時間過いした）

溜息を吐いた。

見上げると、二つの間にかすっかり秋の空で翻雲が流れている。西の空は茜色。もうすぐ日が暮れる。要するに昔の言葉で言つとここの「黄昏時」。またふと睦美のことじが頭をよぎる。

「考え過ぎ」

睦美の顔のイメージを頭の中から追いで出して路地を曲がった。

「そこな娘」

背中の方から妙に甲高い声が聞こえる。

しかしあたしを呼んでくるとは思わずそのまま歩く。

「おぬしのことじや、あほつー。」

いきなり何かで頭をどつかれた。

「いつたああ！」

涙目になりながら振り向く。すると今いま誰もいない。

「何？」

意味がわからずにきょろきょろしてみると、

「トじや、トー」

と足元から声がある。

「は？」

足元を見ると、そこは顔も着ている麻のよつな素材のこげ茶色のローブもしかだらけの小わなおじこさんが木の杖を持って立っていた。

髪は白く、くしゃくしゃで肩まで伸びている。

顎の鬚も白くて胸まである。

身長はさう見ても十五センチメートルくらいしかない。

その時はよく考える時間がなかつたのだが、後で冷静になつて思い出すと、何とも言えない恐怖体験だと気づかされる。

「何?」

思わず一歩退いて尋ねた。

その小さいおじいさんはにやつと顔のしわを併にして笑い、

「わしの名はシカム。おぬしとは違う世界の住人じや」

「そう。ではこきづんよう」

関わらないのが正解と瞬時に判断してその場を立ち去つとした。するとそのおじいさんは、

「おぬしの知り合いがどこにいるか知りたくはないか?」「え?」

思わず振り向いてしまつ。

もしかして睦美のこと?

「どうじや、気になるじやうつへ。好き合つた者同士……」

おじいさんの言葉が終わらないうちにあたしは素早く身を屈め、おじいさんの頭を人差し指で突いた。

「何をするんじや、たわけ者が! 田上の者の頭を叩くとはー。」

「誰が好き合つた者同士だ、このぼけじじいー。」

ぐんと立ち上がり、怒りに任せて怒鳴つた。

おじいさんはそれでも、

「では違うと申すか? あの者のことは好きではないと?」「うう……」

つい身じろいでしまつた。

何でこのじじい、あたしにプレッシャーをかけて来るの?

さつきは睦美に向かつて「もう終わったこと」と大見得を切つたのだが本当は違う。

親友の矢吹みそのが睦美のことを好きだと知つてから、何だかおかしいのだ。

睦美を好きでいてはいけないとどこかで思い始めた。

みそのとの友情を壊したくないから、自分の気持ちに躊躇をつぶ。何とも馬鹿馬鹿しいことだ。

するとおじいさんはそのあたしの心を見透かすかのよつて、アリタケで、

「おぬしはあの男のことが好きなのじやるつ~、自分に嘘をつこつて何とするのじや? 正直に生きよ」

「おじいちゃんに関係ないでしょ!」

またふこと顔を背けて歩き出した。

「わかった。仕方がない。では、もう一人のおなじのどひるに参る」とするか

「え?」

またしても振り向いてしまう。

おじいさんはそれを読んでいたかのよつてにやつとした。そのどや顔が何だかむかつく。

「おぬし、そのおなじが男のことをしてあるのを存じてあるのにな? だから慌てた」

「……」

本当に踏み潰してやりたくないるくらに憎らしこじじこ~でもそのどおりなのだから情けない。

「どうすればいいのよ?」

口を尖らせて投げやりな態度で言い放つ。

おじいさんは優しい笑顔になつて、

「わしとともに我が国に参れ。おぬしの思い人はそこにゐる」

殴りそうになる衝動を何とかおさえ、あたしは尋ねた。

「おじいちゃんについて行けば、睦美に会えるのね?」

するとおじいさんは何故か首をかしげて、

「うーん、そうだと良いが

「はあ?」

また殴りたくなる。

「何なんだ、このじじいは?」

「おぬしが下りぬじとを申してこるひがひ、あやつの気配を追えな

くなつてしまつた。今はどこのかわからん

「あんたねえ！」

襟首をねじあげたいところだが、小さ過ぎて無理だ。

「とにかくわしと一緒に参れ。我が國の女王陛下であれば、おぬしの思ひ人がどこにあるかおわかりになるであろう。

おじいさんは危険を察知したのか、あたしから離れてから言った。

「信用できな」

あたしは拒否した。

初対面の怪しいことをこなすかとのことで行くほどお人好しではない。

「ほひ。なるほどな。見たよりつは頭が切れるおなじよ

「ひひひ！」

いちいち癪に障ることを言ひこさん。

「では、どうすればわしを信じてくれるかの？」

じいさんがあたしをこなしてしながら見上げる。

一瞬その顔にぞつとしたが、

「あ、あたしの服をお姫様みたいなドレスにしてくれたら信じてくれる」

我ながらあほくさいことを言つたと思ったが、いずれにしてもじいさんにそんなことができるはずがないので、それでこの馬鹿馬鹿しい会話に終止符を打てる。

別にかまわない。

「何じや、そんなことで良いのか？」

「え？」

あたしはそんな答えが返つてくるとは思わなかつたので、じいさんに背を向けていた。

「本当に？」

またまた振り向いてしまつあたし。

その時自分の服がきらきらしてゐるのに気づいた。

「うわ！」

よく見ると私はきらびやかな純白のドレスを着ていた。

全体的にスパンコールが入っていて目が眩みそうなもの。ついでに髪にはティアラが載っている。

本当に姫様のような格好に変わっていた。だが、客観的に自分の姿を想像してみると、かなり危ない人。テレビカメラもないし。

「それで良いか？」

おじいさんはやりとして得意そう。

で、何者？ 魔法使い？ 妖精？ 妖怪？

「これでわしを信用してくれるかな？」

「え、ええ」

条件をクリアしたからには信用せざるを得ない。もつと難しいことを言えば良かつたな。

「では参らうか、金井澄香よ」

「は、はい」

どうしてあたしの名前を知ってるの？

そう尋ねたかったが、何故かあたしは気を失ってしまった。

どれほどの時が経つたのだろう？

あたしは目を覚ました。

ふと気づくと、服は中学の制服に戻っていた。

周囲を見るとそこは大広間。

遙か彼方に金ぴかの椅子があり、そこに女性が座っているのが見えた。

多分、じいさんが言っていた女王様だろう。

遠目でわかりにくいが、顔に比して大きな目をしている。奇麗な人のようだ。

それに長いブロンドの巻き毛に首が折れそつなくらい大きな冠を戴いている。

さつき私が着せてもらったドレスの何倍も豪華なお召し物。さす

が女王様といふことか。

「目が覚めましたか、澄香。わらわがこの黄昏の国の女王レガソタです」

ずっと遠くにいるのに声がやけに近くで聞こえる。

随分大きな声の人だと思い、起き上がる。

「気をつけなさい、澄香。天井にぶつかりますよ」

レガソタ女王が言った。

「いやいや、あたしはそれほど大きくないですから」

あたしは苦笑いをしながら、立ち上がった。

「ごきつと何かが当たる。

「え？」

ふとそちらに目をやると、あたしは天井すれすれまで背が伸びていた。

「何？ どういう事？」

すると女王様が、

「だから申したではないか！ そなたはこの国の住人ではないのだ

！ 動く時は気をつけよ」

と怒鳴る。

下を見ると、女王様はあたしのすぐそばに座っているのがわかつた。

てことは？

「ここは別の世界。そなたのからだはわが國の人間の十倍ほどあるのです」

「えええ？」

驚いて大声を出した。

すると城全体が揺れてしまった。

女王様は耳を塞いで、

「大きな声を出さない！ そなたはわが國ではモンスターと同じ。静かにしてほしい」

「モンスター……」

その言葉は中学生女子にはきつい。  
バスとか言われるよりへこむ。

「わかりました、女王様」

あたしは周囲の物を壊さないよう慎重に動き、正座した。  
「思い人を探しに参つたそうですね？」

女王様が微笑んで尋ねる。

もうどうでもよくなつたあたしは、

「はい」

と答えた。

「その思い人は真昼の国におつまわ」

「真昼の国ですか？」

ここには黄昼夜の国。

睦美がいるのは真昼の国。

ファンタジー全開なネーミングだ。

「はい」

女王様はここにこしている。

何だか嫌な予感がする。

もしかして、その国はもの凄く遠かつたりとかするのかな？

「その国はどこにあるのですか？」

私は恐る恐る尋ねた。

「わが国のとなつです。ここからであれば、馬車で半時ほどかかる」

「馬車で半時？」

よくわからない。

どれくらいかかるのだろう？

すると女王様は、

「ですが、そなたであれば数十歩でたどり着けましょ」

その言い方も何だか嫌だ。

自分が化け物みたいで落ち込む。

「但し」

「え？」

女王様の微笑みが顔から消えた。

「今は我が国と真昼の国は往来ができないのです。魔王が築きし壁によつて」

「魔王？ 壁？」

さらにはファンタジー。

どういふことだらう？

「神に追放された神官が邪な術を覚え、魔王を名乗りました。その者は天を操る術を使い、我が国と真昼の国の間に巨大な壁を築いてしまつたのです」

女王様は深刻な顔で語つてくれているが、どうにも意味がよくわからぬ。

「その壁のせいで真昼の国は一日中真昼、黄昏の国は一日中黄昏になつてしまつたのです」

「なるほど」

想像しにくいが、とても困つたことになつてゐるのは理解できた。「城の外に出ていらっしゃい、澄香。我が国の空は一日中茜色なのです」

女王様に言われて、私は身をかがめると大広間から廊下に出て、そのままほふく前進の要領で城の外に出た。

「本當だ」

空は夕焼けで赤くなつてゐる。

しかし反対の空を見ると、真つ黒になつてゐた。

夜ではない。星は見えないから。ただ黒い。

とても不気味。その壁はずつと上まで続いていて、果てが見えない。

「あれが魔王の壁です。あの壁のせいで我が国は……」

女王様が声をつまらせた。

「我が国はまだ良い。真昼の国は一日中照りつける日差しのせいで作物が枯れ、水は干上がり、人々は飢え苦しんでおります」

女王様は涙を拭つて語る。あたしも何だかうつと来た。

「お隣の様子がわかるのはどうしてなんですか？」

「壁のそばまで行けば話はできるのです。中には真昼の国と黄昏の国で離れ離れになってしまった親子、夫婦や兄弟もおります」

「何だかどこかで聞いたことがあるよつた状況。あの壁の向こうに睦美が……」

「もう会えないような気がして来て、すぐ悲しくなつた。澄香、頼みがあります」

「あたしは膝を着いて女王様に顔を近づけた。女王様は少しがよつとしたよう。何でしょうか？」

「答えは想像がつくが、一応聞いてみた。」

「そなたのその力であの魔王の壁を破り、二つの国を救つてくれまいか？」

女王様は悲しそうな顔であたしを見る。以前ペシトシヨップで見たチワワの顔に似ているなんて、絶対に言えないけど。

「わかりました。あたしも睦美に会いたいので、やってみます。」

「そうですか。そなた達に祝福のあらんことを」

女王様は不思議な動作をした。

もしかすると、それは宗教的な意味があつたのかも知れない。

「うして、あたしは魔王の壁を壊すために出かけることになつた。そなたにシカムを遣わします。わからぬことがあれば、何でもお聞きなさい」

女王様は言つた。わらわの小憎らしげじさんがまたあたしの前に現れた。

「では参らつかの、澄香」

「はい、おじいちゃん」

まるで巨大ロボットにでもなつた気分。

たくさんの中と市民の見守る中、城を出て魔王の壁を手指す。

あたしはそつと歩いているつもりなのだが、足を下ろすたびにそばにいる人達が倒れるのは、コントを見せられているようで切なかつた。

「澄香」

城からしばらく進んだ辺りで、小さな馬に乗ったシカムジいさんが話しかけて来た。

「何?」

前を向いたままで尋ねる。

すると「じーさんは、

「おぬしの世界のおなじは監視のような服を着ておるのか?」

「みんなじやないけど、あたし達は学校に行つてるからね。これは制服なの」

あたしはちらりとじーさんを見た。

「そうか。しかし不思議な服じやの? 尻に何かの顔が書かれておるぞ」

光速で反応した。

「どこ見てんのよ、すけべじい!」

スカートを押さえ、じいさんを睨みつける。

しまつた、今日はくまさんパンツはいてた、とか思つている場合ではない。

「何を言つておる? すけべとは何じや?」

じいさんはきょとんとしている。

ああ、そうか、この世界には「パンチラ」とか「スカートめぐり」とかは存在しないのか。

市民の中に女性もいたけど、誰もスカートはいてなかつたしな。

「何でもない。気にしないで」

苦笑いして前を見た。

そんなつもりはないと言つても、あの背丈だとどうしても丸見えなわけだから……。

あきらめるしかないか。でも何となく手でスカートを押さえてし  
まつ。

そんなことをしてじるつちこ、あたし達は壁の前に着いた。

遠くで見るのより圧迫感がある。

「りや、ベルリンの何とかよりす」こわ。何せ果てが見えないんだもん。

「伝令兵が先発して、壁の近くにいないよつて伝えてある。思つ存  
分叩き壊してくれ」

じいさんの言葉にかちんと来たあたしは、

「おりやああ！」

と黒い壁を殴つた。

痛くはないがじんじん痺れる。

ぐおおおんと振動が伝わり、壁が大揺れする。

空全体が動いたような錯覚に囚われる。しかし崩れる様子はない。

「もつと強く叩くのだ、澄香」

「わかった！」

さらに殴る。

しかし壁は崩れない。手の痺れが強くなつた。

「澄香、おぬし、本当に思い人に会いたいと思つておるのか？」

じいさんが嫌なことを思い出させてくれた。

睦美の間抜け面がイメージされるのを必死に消す。

「本当に思い人に会いたいと思わぬと、決してその壁は突き破れん

ぞ」

じいさんの嫌味な言葉は続く。

「つるさいなあ！」

いりついたあたしは今度は壁を蹴つた。

しかし、壁は搖れることはあっても崩れはしない。

「無駄じや。やめよ、澄香。おぬしから本氣を感じぬ。それ以上続  
けても仕方がない」

むかついてじいさんを睨んだ。するとじいさんは悲しそうな目を

していた。

「わしのたつた一人の孫娘が真昼の国にあるのだ。死ぬ前に一皿会いたかったが、あきらめるしかない」

「……」

そんなことを言われてやめられるほどあたしは腐っていない。要するに単純なのだろう。そして壁を見る。

（睦美）

あいつがこの向こうにいる。

この壁を破ればまた会える。あたしは拳を握りしめた。

「おおー！」

「ふう、ひつひつー！」

映画で観たワンシーンを思い出す。

自分は空手を習っているわけではない。

でも、この一撃にすべてをかける。集中。とにかく集中する。

「睦美ーー！」

ありつたけの声であいつの名を叫び、ありつたけの力で魔王の壁を殴った。

壁は今までより激しく揺れ、大きな音を立てた。

拳が当たったところから亀裂が幾筋も走る。

「やつたぞい！」

じいさんが叫んだ。あたしもつい口元が緩む。

世界が崩壊するような大きな音がして、がらがらと壁が崩れ始めた。

「澄香、離れよ。上から壁が落ちて来るぞー！」

じいさんの声がした。

「危ない！」

馬ごとじいさんを抱きかかえ、その場を離れた。壁の崩壊は随分長い間続いた。それはそうだろう。一つの国を完全に遮断していたのだから。

しばらく想像を絶するような土煙が巻き起り、何も見えなくなつた。

やがて土煙が收まり、真昼の国が見えて來た。

それとともに日差しが降り注ぎ始め、黄昏の国に昼が訪れた。一分されていた國の天が一つに戻つたのだ。

「澄香？」

真昼の国の向こうから、やはり巨大口ボットのような存在の睦美が現れた。

「睦美！」

顔を見てもそんな気持ちは絶対に湧き起らなないと思つていたのに、気がつくとあたしは駆け出していた。

「睦美！」

恥も外聞もなく、睦美に抱きついていた。

「す、澄香……」

あたしは泣いていた。

悔しいけど、こいつのことがどうしようもなく好きなんだと思い知られた。

「助けに来たよ」

「助けに？」

不思議そうな顔であたしを見る睦美。

「へ？」

涙を拭つて睦美を見た。

そして真相がわかつた。

真昼の国と黄昏の国。全部茶番だったのだ。

魔王なんて存在しない。

あの壁は、両国の先々代の王が争いの拳銃、技師達に造らせたものだつたのだ。

やがていがみ合つていた王達は死に、両国は和平を望んだ。

しかし壁を造つた技師達もすでに他界し、解除方法がわからなくなってしまった。

それで、苦慮の末、異世界の住人に壁を壊しても「うひ」としたのだという。

あまりにも身勝手な考えに腹が立つより呆れてしまい、何も言つ気がしない。

「それで、たまたま最初に出会つたのがおぬしなのじや、澄香」「シカムじいさんは悪びれもせずに言つた。

「そして、同じ時におぬしの思い人である睦美が真昼の国に呼び込まれたというわけじやよ」

じいさんは英雄譚でも語つているつもりなのか、豪快に笑つ。

「……」

あたしと睦美は顔を見合わせる。

「すまなかつたな、澄香。許してくれ」

じいさんはぺこりと頭を下げた。それを見てどうでもよくなつた。

「もういいよ、おじいちゃん。許してあげる」

「そうか」

じいさんは嬉しそうに頭を上げた。そして、

「わしらの話は全部作り話じやが、一つだけ真実があるぞ

「え？ 何？」

あたしは睦美とともにじいさんを見る。じいさんはにやつとして、

「好きな者への思いはどれほど壁も突き破るということじやよ」

その言葉に顔を赤くした。睦美は何のことかわからず、きょとんとしていた。

あたし達は女王様の待つ城に帰り、あたし達の世界に戻してもらうことになった。

「また会いたいわ、澄香」

女王様は何故か涙ぐんでいる。あたしまで泣けて來た。睦美はすでに泣いていたし。

「はい、女王様」

「元気でね」

「女王様も」

涙を拭つて答えた。女王様は睦美とあたしを交互に見て、  
「次に会う時はもう一人一緒に連れて参るが良い」

また顔が熱くなる。鈍感な睦美は、

「誰を連れて来ればいいのかな？」

と真剣に悩んでいる。馬鹿過ぎて悲しい。

「では参らうか」

シカムジーさんの声が聞こえ、あたしと睦美は氣を失った。

「うん……」

田を覚ますと、そこはじいさんに最初に会つた路地だった。  
空はまだ茜色のまま。

はつとして携帯を取り出すと、あれから五分も経つていなかつた。  
どうじうこと？

「あ、澄香……」

となりで田を覚ました睦美が呟いた。お互い顔を見合わせ、思わず吹き出す。

「帰ろうか」

あたし達は立ち上がり、家路に着いた。

「それでさ」

と言つてみる。睦美があたしを見る。

「何？」

あたしはにこりとして、

「さつきの話、つつしんでお受けします」

と言つと、走り出す。睦美はきょとんとして、

「何のことだよ、澄香？」

限りなく鈍感な奴。

もう面倒見切れない。

間にいろいろあったけど、じつちの世界のさつきの話はあれしかないじゃん、睦美。

「教えなーい」

あたしは笑いながら走った。

睦美が追いかけて来る。

「待つてよ、澄香」

そのまま家まで走り続けた。

そうそう。

シカムジいさんや女王様がどうしてあたし達の名前を知っていたのか、こっちに戻つて来てわかつた。の人達とは遠い昔に出会っていた。

睦美とあたしがまだ幼稚園に行つていた時、お母さんが買つて来てくれた童話の絵本。

その中に同じ名の登場人物がいた。

あの当時、あれほど仲が良かつた睦美とあたしの今の関係を見かねて、本の世界から飛び出して来たのだろうか。

そんな風に思えた。

ありがとう、シカムジいさん、女王様。

あたし達また仲良しに戻るよ。これからもずっと見守つてね。

## 嫁（前書き）

某企画勝手に参加作品です。ちなみにテーマは「憎悪」です。

私は所謂、姑<sup>しゅうとう</sup>。息子の嫁から見ればこの上ない邪魔者だろ。決して嫁はそんな素振りを見せない。私に逆らひような事は言わないししない。

しかし、言ひようのない怒りを抱いてしまつ。炊事をさせれば鍋を煮溢し、掃除をさせれば塵や埃をあちらからこちらに移動させだけ。洗濯物は皺だらけのままで干す。

息子は一体あの女のどこが良くて好き合つたのだろう。あの女はお世辞にも美人ではないし、スタイルも然程良い訳でもない。性格が穏やかなのは長所なのかも知れないが、それも度が過ぎれば短所だろう。あれは穏やかなではなくて愚鈍なのだ。使う言葉が間違つている。

あの女の姿が見えない。台所にも居間にもいない。庭で洗濯物を干していたのはもう数時間前だから、そこにもいないだろう。買い物か？あの女が買い物に行くと八百屋や魚屋に言い包められて、必要のない物まで買い込んで来るのも腹が立つ。帰つて来たら注意しようと思い、自分の部屋に歩き出した時、廊下の先にある手洗いから水が流れる音がした。ガチャッとドアが開き、あの女が顔を出した。

「お義母様<sup>かあ</sup>」

何故か苦悶の表情を浮かべ、私を見る。どうしたのかと尋ねようと思つたが、要領を得ない話を聞かされるのが目に見えていたので、何も言わずに顔を背け、あの女を押し退けるようにして浴室へと歩き出す。

「お茶を淹れます」

頼んでもいい事をするのは何か目的があるのだろうか？今更私に媚を売つても何も変わらないというのに。私は立ち止まつてチラツと振り返り、また歩き出した。あの女はそれを承諾と捉えたの

か、  
「すぐに」

と言つと、台所へと走り出した。走るんじゃないよ、埃が立つから  
！ そう言いたいのを堪え、私は自分の部屋に入つた。

「ふう」

一日中、あの女を見ていると私が精神的に参つてしまつ。夫に先立たれて三年。あの女は夫の葬儀の時、号泣していた。あの頃はまだ今程あの女を嫌つていなかつたから夫の死を悼んでくれた事に素直に感謝した。

しかしそうではなかつたのだ。翌年、息子の提案で飼い始めた柴犬が家の前の道路で車に轢かれて死んでしまつた。まだ飼つてから三ヶ月にもならなかつた。私は小さな命が喪われた事を悲しんだ。その犬を選び、「リン」と名づけ、毎日朝の散歩に連れて行つていた息子も酷く落胆していた。リンが事故死したのは、あの女がうつかりリンのリードを放してしまつたからだつた。もちろん、私も息子もその事での女を責めたりはしなかつた。息子はむしろ、あの女を慰めた。君のせいじゃないよと。その時は私もそう思つた。あの女が泣き出すまでは。

あの女は夫の葬儀の時と全く同じ表情と声で泣いたのだ。私の思い過ごしではない。本当に最初から最後まで同じだつた。恐ろしいくらい。私は、夫と犬を同列に扱われた気がした。

あの日以降、私はあの女に対する見方が変わつた。可愛いと思えていた話し方も仕草も全てイラつきの元になつた。それまでは鍋を噴き溢すと、

「火傷しなかつた？」

とまずは気遣つたのだが、その時からは無言での女を押しのけ、鍋を洗う。掃除が雑だと、

「こうすれば奇麗にできるのよ」

と見本を示したのだが、その時以降はあの女の手から掃除機を奪い取り何も言わずにやり直す。

そこまでされれば、普通の人間なら何か言つのだろうが、あの愚鈍な女は何も言い返さず、

「すみません、すみません」

と謝るだけだ。それが更に癪に障つた。

「失礼します」

あの女がノックもせずに部屋に入つて来た。私は何も言わずに舌打ちだけする。しかし、鈍感なので気づかないようだ。あの女はテレビの上に盆を置いて湯飲み茶碗を取り、私の前に置いた。

「あの人が出張で買つて来てくれた宇治茶です」

あの女は不器用に微笑んで言い添えた。私は湯気が立ち上る茶碗を覗きこんだ。確かに美味しそうな香と色をしている。只、この手の高級茶葉は熱湯で淹れてはいけないのだ。その時点で失格だ。

「火傷しそうな温度ね」

そう言つてあげようかと思つたがやめた。多分そんな皮肉も通じないので、この女には。私は茶碗の温度を指先で確かめ、そつと手に取る。これ程熱い茶碗を平然と持つたこの女はどれ程手が鈍感なのだろう？ そつと茶碗を顔に近づけ、口元に運ぶ。む？ それ程熱くなかった。むしろ適温だ。私は一口飲み、茶碗を置いた。

「……」

ふと気づくとあの女がにやりと笑つてゐる。まさか……。そんな

……。

「う……」

私は呻き声を上げる事もできず、畳の上に倒れた。毒？ 毒が入  
れられていたのか？

薄れ行く意識の中で私はある言葉を思い出していた。

あなたが嫌いな人はそれと同じくらいあなたの事が嫌いです。

嫌つていたのは、あの女も同じだったのだ。あの女が愛おしそうに腹を摩つているのが、私の見た最後の光景だった。

姑（前書き）

某企画勝手に参加作品です。ちなみにテーマは「不安」です。

凍てつくような寒さがいくらか和らいだ日曜の午後。私は、夫の両親と同居する形で新築した一世帯住宅の庭で、花壇の手入れをしている。

「ふう」

何もしていなければ、寒くていられない外の空氣も、庭弄りをして体温が上がつているとそれ程苦にならない。むしろ、やや冷たい風が、紅潮した頬に心地良いくらいだ。一息吐こうと立ち上がり、家の方に歩き出す。

「あ、こんなところにいたのか」

我が夫が居間の掃き出し窓を開けて言った。

「お袋の姿が見えないんだけど、どこに行つたか知らないか」

このマザコン。心の中で軽く罵る。夫は一流企業のサラリーマンで、眞面目で仕事もできて私にも優しい。只一点、母親に過剰なまでに頼つていてる事を除けば、何も問題はない。

「どこに行つたんだうつ」

私が知らないと答えると、夫はソワソワした様子で奥へと歩いて行く。忘れているのだろうか。義母は昨日から一泊三日で旅行に岡かける事になつているのを。忘れてはいるなら、その方がいい。私は教えるつもりはないし。

夫のマザコンが酷くなつたのは、義父が亡くなつてからだつた。義父が存命中は、義母は義父と仲睦まじい夫婦で、どこへ行くのも一緒だつた。私はそんな二人を見て、私達もあんなりたいと思つた。しかし、夫が一人を見る目は違つていた。その目は、嫉妬に燃える者の目だつた。私はおぞましい事を想像してしまつた。夫は義母に親子以上の愛情を感じているのではないかと。

やがて義父の身体に癌が見つかり、病院に入院した。義母は毎日

のようすに病院に行き、身の回りの世話をした。夫が、

「完全看護の病院だから、そんなに行く必要はないよ」と嫉妬心剥き出しで言つても、義母は通い続けた。

しかし、義母の献身も虚しく、義父は他界した。それが今から二年前。始めの数ヶ月は、魂の抜け殻のような状態だった義母も、夫の優しい慰めの言葉に癒されたのか、少しづつ明るさを取り戻して来た。そこまでは微笑ましかつたのだが、一人の親密さはそれで止まらなかつた。私に隠れて、一人きりで温泉旅行に行つたり、買い物に出かけたりしていたのだ。私は別に嫉妬はしなかつた。只、夫と義母の関係が気持ち悪かつた。

「おかしいな。親戚の家にも友人の家にもいなんだ。本当に知らないのか」

夫はあちこちに連絡したらしい。恥ずかしいとは思わないのだろうか。呆れ顔になる。

「お前、ちょっと冷たくないか」

私の態度にムツとしたのか、夫はそう捨て台詞のよつた言葉を吐き、また奥へと消える。以前の私なら慌てて夫を追いかけ、謝罪したろうが、今はそんな事はしない。その必要はないから。大きく伸びをして、もう一度庭弄りを始める。春には奇麗な花が咲く。楽しみだ。

「交番に行つて来る。何かあつたのかも知れないから」

血相を変えた夫が、玄関から飛び出して来て、コートの袖を片方だけ通した状態で私に言つた。ほんの少しだけドキッとした。交番に行くんだ。大袈裟ね。でも、大丈夫。警察が来れば、はつきりするから。お義母様は、旅行中だと。しかも、携帯電話を部屋に忘れたままでね。

「フフ」

思わず笑みが零れる。私は悪い女だろうか。花壇の土を入れ替えながら、ふとそんな事を考える。

しばらくすると、夫が息を切らせて戻つて來た。

「お袋が行方不明だつていうのに、呑気に庭弄りなんかしてるなよ。お前も一緒に来てくれ」

夫の言葉に心拍数が上がる。只、話が訊きたいだけよ。何かわからはずなんてないわ。自分を落ち着かせる。

「早くしろよ。警察も忙しいんだ。待たせちゃ悪いだろ」

夫は私が軍手をはずし、靴を履き替えるのをイライラして、見ている。私は別にわざとのろのろ動いているのではない。動搖。何か知られているのではないかといつ思い。そんなはずはないのだが、否定し切れない弱い自分。心の中の葛藤が、身体を強張らせる。

「そのままでいいよ。行こう」

業を煮やした夫が私に歩み寄り、右手を掴む。私は思わずその手を払いのけた。

「何だ、どうしたんだ、お前」

夫は不思議そうに私の顔を覗き込んだ。わたしの顔は紅潮していた。様々の思考が交錯して。

「外で汗搔いて、風邪引いたのか。顔が赤いぞ」

突然優しい言葉をかけられた。夫は私を気遣うように肩を抱いてくれた。

「怒鳴つたりして悪かつたな。交番へは行かなくていいよ。部屋で寝ていろ」

その言葉に思わず安堵したが、悟られないようにしないといけない。

夫は私を掃き出し窓まで連れて行つてくれた。そして交番へと走り出した。大丈夫だろうか？ 母親の姿が見えなくなつただけでの取り乱しよう。あんな男と今後も暮らしていけるのかしら？ 心配だわ。でもね。いくら探してもらつても誰に尋ねても、貴方の大好きなお母さんは見つからないよ。お母さんは今は、春に咲く花のために眠っているのだから。

ごめんね。  
心の中で夫に詫びた。

## 髪の毛

おや？

朝、顔を洗つていて、ふと洗面台を見ると、大量の髪の毛が。

「う

何だ？ こんな長い髪の毛、女房のものじゃない。

俺は怖くなつた。

何故なら以前、付き合つて捨てた女が自殺した事を知つたからだ。

長い髪が自慢の、細面の美人だつた。

確かにいは、三日前に死んだと聞いた。

「まさかな」

それでも信じなかつた。

その夜。

今度は風呂で頭を洗つていた時だ。

「げつ！」

排水口にまた長い髪の毛。

そんな！俺はあの女を捨てたが、殺した訳じゃない！

自殺だって、病氣を苦にしてのはずだ！

俺は懸命に自分に言い訳しているのに気づいた。

それほど怖かった。

「う

更に次の日の朝だ。味噌汁にも長い髪の毛。

「どうしたの？」

怪訝そうな顔で女房が俺を見ている。

「いや、味噌汁の中に髪の毛がさ

俺はそれを引き出して女房に見せた。

『まことに四十センチくらい』

女房は氣味悪がるかと思ったが、何故か呆れた顔になつた。

そして冷たい口調で言った。

「いい加減、床屋に行きなさいよ、貴方。まるで落ち武者よ

## タイムマシン

富田林博士は、時空跳躍を研究している若き科学者である。

彼の夢は「タイムマシン製作」であった。

誰もが無理だと言つた。

しかし彼には確信があった。

何故ならまだ子供の頃、タイムマシンらしきものに乗つて現れた男が残した設計図を今は亡き父親から譲り受けているのだ。

その男の顔も名前も父親は教えてくれなかつた。

父親はそのことを尋ねると黙して語らなかつた。

彼は諦めず、研究を続けた。

理論と実験のすり合わせをする。

そして遂に彼はタイムマシンを完成させた。

テストをしてみた。

一ヶ月前に戻つてみる。

成功した。

博士は競馬場に行き、大穴を連續して的中させ、巨万の富を得た。

ある地方へ行き、地震を予言し、多くの人を助けた。

彼はそうしたテストを繰り返し、遂に決断した。

父親が会った男が現れた時代に行く事にしたのだ。

今から50年前。

今までのテストでは一番古くて1年前への時間旅行だった。

緊張した。今までにない時間跳躍。

失敗するかも知れない。

そんな不安が、操作する手の動きを鈍らせる。

しかし博士は迷いを振り払い、タイムマシンを起動した。

50年前の日本。

男は自分が誰なのかもわからず、彷徨い歩いていた。

そんな男を見た小学生の富田林君は、男に声をかけた。

「おじさん、どうしたの？」

「私は、自分が誰かわからないんだ。誰かを探しに来たような気がするのだが、誰を探しに来たのか思い出せない」

男は白衣を着ていて、医者か科学者に見えた。

「これを渡したかったんだと思つ。ここに書いてある住所が、その人のいる家なのかも知れない」

富田林君は、男から大きな茶封筒を受け取つた。

中身は、機械の設計図だつた。文字が書いてあつた。

「たいむましん？」

富田林君は不思議そうな顔で男を見上げた。

「タイムマシン？ その言葉、何か関係があるような……。思い出せない……」

男はまもなく、通報を受けた警察官に連れられ、パトカーに乗せられて行つてしまつた。

富田林君は近くの交番に保護され、両親が迎えに来るまで設計図を見ていた。

「これ、何だらう？」

富田林君はそれを自分の秘密の宝物にするつもりで、ズボンのポケットにねじ込んだ。

「あのね」

編集者の冷たい視線が突き刺さる。私は下を向いたままで、

「はい」

「結局、記憶喪失の男つて、富田林博士でしょ？」

「はい」

「じゃあさ、その設計図は誰が書いたの？ タイムパラドックスじ  
ゃん」

「はあ」

そつは言われても、設計図を受け取ったのは、私なのだ。

そしてそれを科学者の息子に渡した。

で、息子はタイムトラベルをして記憶を失い、子供の頃の私の前に現れ、設計図を渡した。

現実にそうなのだ。

だから、

「タイムパラドックスじゃん」

とか批判されても、実話を元に再構成した小説なのだし、グダグダ  
言われたくないなあ。

わたしのねいひが、びんせんじやう。

なので、『ねんはあわいよ』だけです。

ねいひ『ねんは』、『いは』など、のとでがまんしま。

これえれ、おなががぐりうしなつしませかしこです。

それで、『ねんは』のとへりうがこつせんせやくかくうつれせつた。

「今日せうじ走だわ」

ねいひねえがねいひここまつた。わたしたちもねいひこまつた。

「今日せうじのく料理よ」

おかあねえよ、ねいひうてこまつた。

「わーー」

わたしここねいひ、ねいひうてこまつました。

でも、ねなががへつてこるのよ、ねいひせつまつました。

おかあねえせたくねいひうてこまつました。

わたしがこやかで、元気でたべました。

おなかがたぬれやんまたこひふくれて、ふたつでわいこました。

おとづれそとねかねわざわいこます。

わたしなんだかねむくなつて、こもわといおくせでねました。

「へーん。へるこよ。

わたしゃくらへて、めをれましまつた。

おとづれそが、わたつのくびをしきつこました。

おとづれそはなこしてこました。

「おとづれそ、へるこよ。やめとよ。わたしがいいじでなこから、おじひしのう。」

「違ひへ、違ひんだ」

おとづれそはまだなこしてこます。わたしもなきました。

「うおんなやこ、うおんなやこ。こころなむかへ、おじひなこで、おとづれそ」

わたしなんかこもここました。それでおとづれそはわたしひへびをしきるのをやめました。

「「じゆさん、」「じゆさん」

ねじりあわせわたしだれこもました。

「へぬこよ、「ねじりあわせ

ねじりあわせわたしだれこもました。

おかねこもなここめか。こもじはめだねこめか。

「「じゆさん、」「じゆさん。お父さんといお母さんのが懸かつた。」「めんな」

「「じゆさん、」「じゆさん。お母さんを許して」

おかねこもわたしだれこもました。

「「じゆさん、」「じゆさん。なかないで。わたし、こここなるか

い」

「おまんここだわるよ

「ねじりあわせ

ねじりあわせとおかねこせ、わたしあわせこもつた。

わたしあわせこもつた。

それでやになつました。

おひるねさせ、じるといこせました。

おかあわさまにさわめくへいひへこせます。

わたしこもはおいつだこです。

おひるねたみずかな?

おひるねがたべたいな。

でもここや。

おひるねべたべるひ、おひるねとおかあわんがなこわやつかひ。

がまんしなへひや。

## 笑いこそ命

俺は売れない漫才師。相方が最悪だ。

突つ込みなのに噛みまくりだ。

俺がいくら絶妙のボケをかましても、奴が噛んで滑る。

だからどんなコンクールに出ても、大会にエントリーしても、予選敗退。

ネタ合わせの時は完璧なのに、本番で悉くしぐじるは、故意にやっているのではないかと思ってしまうほどだ。

コンビを解消しようかと真剣に考えた事は幾度となくあった。

しかし、代わりの相方がいない。

それで諦めていた。

そんな俺の前に、まさしく天から遣わされたのではないかという相方候補が現れた。

突つ込みの達人だ。

どんなボケでも拾い、完璧に突つ込む。

是非コンビを組みたい。

しかし一つ問題がある。

そいつにも相方がいるのだ。

但し、ボケ切れないボケ役。

そいつの中途半端なボケすら、奴は拾つて「モノ」にしていた。

もうこいつ以外考えられなかった。

俺は思い切つて、そいつに話しかけた。

「俺とコンビを組まないか?」

俺は心臓が高鳴つていた。断わられるのを覚悟で言つたからだ。

だが、そいつの答えは意外だった。

「もう少し待つてくれ。相方がもうすぐ死ぬんだ」

「えつ?」

俺はギクッとした。ネタか? 最初はそう思った。

よくよく聞いてみると、奴の相方は、ガンなのだそつだ。

余命一ヶ月。それまでコンビを続けたいと言つ。

そんな話を聞いたら、俺は誘えなくなつた。

「相方が死ぬのを待つて、コンビ組むなんて、あまりにも非常識じやないか？」

俺はそいつに言った。するとそいつは、

「あのヤロウにはウンザリなんだ。解散したかつたんだけど、その矢先にガンになつてさ。それを理由に解散したら、俺の評判が悪くなるだろ？ それも将来的にまずいからや。」

と言つた。俺は虫酸が走つた。

「こいつ、相方を何だと思つていいんだ？」

消耗品だとでも思つていいのか？

「こんな奴とコンビを組んだら、どんな目に遭うかわからない。」

俺はそう思つて、そいつとのコンビを諦めた。

そして一ヶ月後。

そいつの相方は、話の通り、ガンで死んだ。まだ二十代だった。

葬儀に参列し、相方の遺体に縋り付いて泣いている奴の姿を見て、俺は奴が強がりを言つていたのだと気づいた。

俺はふと自分の相方を見た。

そして自分自身を省みた。

俺は奴より酷い奴だ。

相方を切ろうとしていた。自分のために。

だが、奴は最後まで相方を見捨てなかつた。

俺は理解した。

まだ俺達は生きている。

生きているなら、先はある。

まだ頑張る余地はあるはずだ。

俺は相方を誘い、ネタ合わせをするため、劇場の稽古場に向かつた。

まだだ。まだ終われない。

笑いこそ俺の進む道。

笑いこそ我が人生。

笑いこそ、我が命。

私は趣味で小説を書いている自称小説家。

公募に何度か投稿しているが、まさしく「かすりもしない」が続いている。

もうそろそろバカな夢を追うのはやめようと思いかけていた。

そんな矢先、ある投稿サイトで、「覆面小説フェア」を開催していると掲示があった。

特に参加資格はなく、サイトのメンバーであれば誰でもOKらしい。

私はこの参加を最後に小説を書くのをやめようと思いつい、参加申し込みをした。

そして私は一編の短編小説を書き上げた。

仮名を考え、投稿する。

参加者は全部で二十名。あまり他のメンバーと交流がない私は、他の作者の作品を推理するなんてできません、全く普通に読者として読み、感想を寄せた。

推理サイトにアクセスし、他の人達の分析を読んでみる。

なるほど。読点の癖とか、言い回しの癖とか、いろいろあるものなのね。

今まで自分の癖など全く意識した事がないので、それはそれで勉強になつた。

そんな他人の推理を読み進めていくうちに、私も分析をしてみようと考えるようになつた。

この作品はあの人かな？ でも、成り済ましの可能性がある。

これは間違いなくあの人だ。癖を隠そうとしているけど、語尾の「のだ」が頻繁に使われている。

そして改行をあまりしていない。

そんな事に気づき始めると、推理が楽しくなつて來た。

そんな中、ある事に気づいた。

私の作品だけ、誰も推理してくれていない。感想も寄せられていない。

何だか悲しくなつた。

確かに他の人達の作品は、どれも練り上げられたもので、とても太刀打ちできないものだけだ。

酷評でもいいから、何か言葉が欲しい。

そんな思いを抱いた。

そして数日後。

私の作品をようやく推理してくれた人がいた。

全然わからないらしい。しかも、全く別人と判断している。

これは喜んで良いのだろうか？ 何となく落ち込む。

その人は感想欄にも書き込みをしてくれていた。

うーん。私の思い描いたのとは違う解釈だ。

仕方ないとは思つけど、残念だな。

でも、評価は良かつた。酷評じゃないだけマシだと思つた。

更に数日後、遂に推理の締め切り日が来た。

私の作品は最後まで誰も当ててはいなかつた。

これは凄い事なのだろうか？

寂しかつた。私の事を皆知らないだけなのだ。  
だからわからなかつた。

今回のフェアで覆面を被り通したのは、私ともう一人だけだつた。  
もう一人の人は、この企画の常連で、いつも意外な作品を書いて  
逃げ切つている人だつた。

彼は皆の賞賛を浴びていた。

えつ？

その時、初めて気づいた。

「あのファンタジーを書いている人とはとても思えないくらい強烈  
なホラーでした」

そういう感想が、私を賞賛する言葉の中にあつた。

「そうそう、全然わからなかつた。文章も全く雰囲気が違うし。凄  
い人です」

そんな……。

今までマイナスな事ばかり考えていた私が、初めて抱いた感情。

「小説書いていて良かった……」

俺は人生に絶望していた。

会社をクビになつた。彼女に婚約を解消された。

友人に貸していた金を踏み倒され、逃げられてしまつた。

残されたのは住宅ローンと自動車ローン。

要するに借金苦だ。しかも返せる筈でがない。

死ぬしかない。直感的にそう思つてしまつた。

両親共既にこの世にはいないし、親戚は全く付き合いがない。

友人も少ないから、俺が死んでもさして影響はないだろう。

人間は、悪い事を考え始めると、次々に更に悪い事を思いついてしまうようだ。

「そこの貴方」

トボトボと道を歩いていると、後ろから声をかけられた。

振り返ると、そこにはまるで映画に出て来る執事のような風体の老人が立っていた。

「何ですか？」

俺は面倒臭そうに言った。するとその老人はニッコリして、

「映画を見ませんか?」

「は?」

「何だ、気が狂っているジイさんか? 俺は咄嗟にそう判断し、逃げようとした。」

「貴方のためになる映画です。是非、『ご覧下さい』

老人は微笑んでいるが、何とも言えない威圧感を漂わせていた。

「は、はい」

俺はその迫力に負けてしまい、老人の導くままに目の前にある映画館に入った。

こんなところに映画館あつたかな? 少しだけ不思議に思つた。

映画館の中は、とても古い造りで、子供の頃に行つた映画館によく似ていた。

何となく懐かしい感じがする。

「入場料は?」

俺は財布が空なのを思い出し、老人に尋ねた。

「いえ、お代は頂きません。どうぞ、中へ」

老人はまた二ヶコリして言った。

「そ、そりですか」

俺は安心すると同時に、妙な話だとも思つた。

座席は五十くらいしかない、こじんまりしたものだ。

他に観客は一人もいない。

「上映開始します」

老人の声が映写室の中から聞こえた。

たちまち場内は暗くなつた。俺は慌てて近くの座席に腰を下ろした。

「うん？」

映画は、俺と同年代くらいの男が、崖っぷちを歩くところから始まつた。

「俺なんか生きていても仕方ないんだ」

男はそう呟くと、崖から飛び降りてしまった。

「うお。他人事とは思えない話だ。」

しかし、凄いスタントだな。

カメラの切り替えなしで崖から飛び降りるなんて、危険過ぎるぞ。

シーンが変わった。

男は死んであの世に行つたようだ。

男はまた崖を歩いている。あの世はこんなとこんなのだろうか？

あつ、落ちた！ また落ちたぞ。

あれ？

また男は崖を歩いている。あつ、また落ちた。

何だ、これは？ ああ、また崖から落ちた。

そんなシーンがずっと続き、俺は気持ちが悪くなつて來た。

「うう……」

思わず席を立ち、外に出た。

「どうされました、お客様？」

老人が声をかけて來た。俺は吐き氣を堪えながら、

「何なんですか、あの映画は？ 男が何度も崖から落ちて、それが  
ずっと続いて……」

「気分が悪くなりましたか？」

老人は何だか嬉しそうに尋ねる。俺はそれが癪に障り、

「ええ、気分が悪くなりましたよ。当たり前でしょ！」

「そうですか。あれはこれから貴方が体験する事をお見せしたものなのですがね」

「何だつて？」

俺はギョッとした。この老人、俺が死のうとしている事を知っているのか？

「どういう事だ？」

「わかりませんか？ 自ら命を絶つ者は、あの世でも苦しみ続けるのですよ。そして、永遠にそれを繰り返すのです」

「そ、そんな……。何でそんな事がわかるんですか？」

「わかりますよ。私は死神ですから」

「！」

「生きなさい。死んではいけません」

俺は老人の威圧感が何となく納得できた。そうか、そういう事だつたのか……。

老人は威圧ではなく、優しい眼差しで俺を見ていた。

「人は、生きる事が死を選ぶより辛い時に自らの命を絶つんです！生きて行く事が辛いから、死を選ぶんですよ！」

俺は俺の事を何も知らないくせにと思い、反論した。

「本当に死ぬ事で貴方が救われるのなら、私は貴方に生きなさいなどとは言いません」

死神は優しさの中に厳しさを込めた目で俺を見た。

「貴方はこの世に生を受けて、今まで何一つ良い事がありませんでしたか？」

「え？」

俺はその質問にハツとした。

「貴方はずっと不幸でしたか？」

「……」

違うともそうとも答えられない。

「死神が死のうとしている者を助けていいのか？ それでは職務怠慢ではないのか？」

俺はまだそんな減らす口を叩いた。すると死神はまた微笑んで、

「私達の仕事は、生きている者を殺す事ではありません。死んだ者をあの世に案内するのが仕事なのです。貴方はまだ、死んではいけない。死ぬべき人ではないのです」

「そんなのは詭弁だ！」

俺は映画館を飛び出した。

「死ぬ！　俺は死ぬ！　死んでやるウツ！」

俺はそのまま大通りに飛び出し、トラックに跳ねられて死んだ。

そして……。

俺はふと気づくと、歩道を歩いていた。

前方から大型トラックが走つて来る。

俺は不意に走り出し、そのトラックに跳ねられた。

跳ね上げられながら、俺は大通りの向こうに映画館の客席を見た。

見知らぬ男が、俺が跳ね飛ばされるのを不快な顔をして見ていた。

多分あの男も自殺しようとしているのだ。

だから俺を見ている。でも気づかないんだ。

結局あいつも次の出演者なのか?

何て恐ろしい映画館なんだ……。

## 日本それほどのではない話（平成残酷版）

おじいさんはおじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんはよく洗濯つい、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

おじいさんは川の舟で一本の光り輝く竹を見つきました。

「あかられ世に座しておじやな。そのままにしておこた方が良れや  
わじや」

おじいさんは必死にアピールしてこの竹を無視して、そのまま家に帰ってしまいました。

おばあさんが川で洗濯をしていると、大きな桃がドンブリ川、ドンブリと流れてきました。

「おや、こつやまた大きな桃じや」と。市場で売つて金儲けじや」

意地汚いおばあさんは、桃を拾つて市場に持つて行き、それを高額で売つてしましました。

そして、おばあさんは家に帰つておじいさんと儲けた金で飲めや歌えのダンチャーン騒ぎをしました。

翼口の」とです。

庭で犬のポチがけたましく鳴くので、おじこちゃんはポチを叱りました。

「うるせー、このバカ犬！ 静かにせんか！」

ポチは叱りてしまいました。

午後になりました。

おじこちゃんはつまのよひに泣きえつこせかひとしました。

「行つてらっしゃい、おじこちゃん」

意地汚くおばあちゃんが言いました。すると今のは時です。

「がふくさか つま 柄巣阪月子ちゃんのお母さんですね？」

刑事が現れました。

「はー、やうですが」

「保護責任者遺棄致死の疑いで逮捕状が出ていました」

刑事は凄みのある顔で言いました。おばあちゃんはびっくりして、

「何の事ですか？」

「貴女が市場で売った桃の中から生後間もない乳児の遺体が出て来たんです。知らないとは言わせませんよ」

「ええー!？」

おばあさんはいろいろ言い訳をしましたが、

「話は署で聞きます」

とパートナーで連行されてしまいました。

おじいさんは呆然としていましたが、やがてにんまりとしました。

「これで大手を振つて浮氣できるだ」

おじいさんはその口若い女をたくさん集めて夜通し遊びました。

ところがおじいさんの酒池肉林の生活も長くは続きませんでした。  
ある日、おじいさんが山へ芝刈りに出かけると、長い髪の美しい女性に出会いました。

その女性はおじいさんが今まで会つた女性の誰よりも美しく、魅  
力的でした。

「わしと暮らさんか？」

即実行のおじこさんはいきなり言いました。

「はい」

その女性は一矢口リ微笑んで言いました。

おじいさんは喜んで、それを刈るのも忘れてその女性を家に連れて帰りました。

その夜です。

おじいさんは生氣を吸い取られたように瘦せ細り、泥のように寝てしていました。

相当激しい夜だったようです。

「起きる、ジジイ」

「む？」

おじいさんはびっくりするような顔で皿を覚ました。

「ひつー」

そこには雪女が立っていました。あの美しい女性の正体は雪女だったのです。



「いやあ、三年寝たら、気分爽快だな」

男は歯糞だらけの口で言いました。

「お？」

男は見知らぬ老人が氷漬けになつてゐるのに気づきました。

「また、俺が寝てゐる間に、勝手に住み着いた奴がいたのか」

男はおじいさんが凍つてゐる「とにかくほまるで関心がないよつです。

「わんわん！」

外でポチが鳴いています。

「おお、ポチ、元気だつたか？ もうした？」

「どうやらポチは」の男の飼い犬のよつです。

「わんわん！」

ポチは庭の土を掘り返しました。

「何があるのか？」

男は庭をスコップで掘り返しました。

すると土の中から大きな葛籠くらわが出て来ました。

「おお、これはずい」と

中には金銀財宝がたくさん入っていました。

しかし、財産に興味がない男は、警察に遺失物として届けてしまいました。

「さてと。旅にでも出るか、ポチ」

「わんわん！」

ポチは嬉しそうに答えました。

男は一本のわらを手に持ち、家を出ました。

ポチは男と幸せに暮らしました。

めでたし、めでたし。

## 眺める男（前書き）

某企画勝手に参加作品です。ちなみにテーマは「歓喜」です。  
更に禁則事項は「心理描写」。  
そのため、余計に意味不明な作品に仕上りました。

## 眺める男

時代は昭和。消費税も携帯電話もない頃のお話です。

ある小さな町に六郎という男が一人で住んでおりました。六郎は見るからに不潔で、髪は伸び放題、髭は生やし放題。それがため、彼が何歳なのか見た目ではわかりません。その上服は一年中黒いTシャツと藍色のジーパン。どちらも薄汚れています。近所の人達も全く付き合いがありません。六郎の方も近所の人と顔を合わせても挨拶もしませんし、町会にも入らず、「ゴミも出しません。周囲の人々は六郎がどうやって生活しているのか噂し合いましたが、関わり合いになりたくないでの、誰も尋ねたりしないし、彼自身や家に近づく事はありませんでした。

近所の人人が六郎の姿を見かけるのは、決まって町の真ん中を通り抜けている片側三車線の幹線道路の舗道です。彼は何をするでもなく、舗道に直に腰を下ろして、行き交う車や自転車や歩行者を眺めていました。中には、薄汚い格好の六郎のいる舗道を通らないようになっている子供や、若い女性達もあり、見かねた町会長が地べたに座っている六郎に意見した事があります。しかし、六郎はその時はヘコヘコして頭を下げるのですが、次の日になると、同じ服、同じ顔、同じ態勢で、同じ場所に座っているのです。小学生達は六郎について、

「あいつは妖怪だ」

という噂をしました。昼間は舗道に座つて大人しくしているが、夜になると町を徘徊して、夜道を歩く人を襲つて食つているのだと。しかし、実際には、六郎の姿を夜見かけた者はおらず、それは小学生の間だけの「伝説」で止まつていました。

それでも、毎日舗道にベッタリと腰を下ろし、車両の流れをジッと眺めている六郎の奇異な行動は、町会の会合でも取り上げられま

した。とりわけ婦人部の声が強く、町会長も動かない訳にはいかなくなりました。

そんな中、遂に町の青年団の有志達が、舗道にいる六郎を力強く排除しようとした。すると六郎は涙を流しながら言いました。  
「あと三日、あと三日だけ、待ってくれ。そうしたら、この町から出て行くから」

そう言われてしまつと、青年団の有志達もそれ以上の事はできず、三日だけ猶予する事を認め、その場を立ち去りました。あまり強硬な姿勢に出られなかつたのは、六郎が何かを仕出かした訳ではないからです。中には、

「何もしていないのに、実力行使はやり過ぎではないか」という意見もありました。しかし町内の最終的な結論は、「要注意人物」でした。

次の日、六郎はまた舗道に座り、走り去る車や自動二輪、自転車を眺めています。幹線道路沿いの住民達は、遠巻きに六郎の様子を眺めています。もし何か行動を起こしたら、すぐに警察を呼ぶ段取りです。しかし、六郎は朝から晩までそこに座つているだけで、何をする訳でもなく、日が暮れる頃になると家へと帰つて行きます。青年団の有志達は、交代で六郎を見張る事にしました。

「三日で出て行くというのは、三日目に何か仕出かすつもりに違いない」

それが有志達の最終意見です。六郎の家の玄関の前、裏木戸の前の一箇所に有志達が陣取り、見張りをしました。ところが、一晩中見張つたのですが、六郎は外に出て来るどころか、自分の部屋からも出ないまま、夜が明けました。そして朝食をすませた様子の六郎が出て来るのを確認して、青年団の有志達はその場を去りました。

六郎はまた幹線道路に行き、いつもの場所に腰を下ろし、道行く車を眺め出します。何も起こりはしないのでは、と言い出す者もいましたが、別の者達は、

「出て行くまでは気を緩めちゃいかん」

と言い、見張りを続ける事を決めました。

六郎は日暮れになると立ち上がり、家路に着きます。有志達はそれを遠巻きに見て、彼が家に入ると同時に監視体制が敷かれます。しかし、結局その夜も何事もなく明けました。

六郎はまたいつものように幹線道路に行き、彼が座っているのを見かけてから、誰もそばに寄らなくなつた場所に腰を下ろします。ここまで来るとさすがに脱落する者が増えて来ました。すると強硬派の一人が、

「それこそ奴の思つ壺だ。氣を抜くのは奴が本當にこから出て行ってからだ」

「そこまで付き合いたくないよ

そういう意見の人々は監視団から次々に抜けで行きました。

「今夜だ。今夜が危ないぞ」

強硬派の人達は今宵こそと鼻息を荒くし、バットや竹刀を手に六郎の家を見張りました。しかし、その夜も何事もなく明けました。六郎は何もしませんでした。

「」迷惑をおかけしました

六郎は朝、町会長の家を訪れ、町を出て行く事を告げました。町会長は引きつった顔で彼を送り出しました。

「よつやく町が落ち着く

町会長からの連絡で、六郎が町を出て行つた事を知つた住民達は顔を見合わせて溜息を吐きました。

彼らは知りません。その日の午前零時で、ある銀行強盗事件が時効を迎えた事を。

## クライマクシ

いつの頃からか、結婚は義務とされた。

それと並びのも、国が崩壊するくらい人口が激減してしまったからだ。

私はもうすぐ30代後半。同級生の大半が結婚している。

40歳までに結婚して出産しないと懲役刑だ。何と恐ろしい世の中なのか。

しかし結婚は1人でできるものではない。いくら義務とは言え、全く好きでもない相手と結婚し、その上子供まで作る事は、懲役刑以上に苦痛である。

いつその事、刑務所に行こうかとも思つたが、それも茨の道だ。

刑務所では、「強制出産」をさせられる。強姦されるわけではないが、強制的に人工授精させられ、妊娠するまで出所できないのである。

ある意味好きでもない男と結婚するよりはマシかとも思えたが、そうでもない。

妊娠した子のDNAを調べて「父親」を割り出し、その「父親」と結婚させられるのだ。

出産能力があり、結婚しない女（できない女も含まれる）には過

酷な世の中だ。

中には服役を免れるために偽装結婚し、子供を育てられない夫婦から養子を取る者もいた。

一見合法的に見えるが、実質的な人口増加に繋がらない為「国家詐欺罪」になり、懲役である。

この法制度が施行されてから、若い女性の自殺が激増した。

若い女性を子を持つ親達は、子供が自殺すると刑務所行きなので、細心の注意を払っていた。しかし防ぎ切れるものではない。

じつして刑務所は許容量を超える機能しなくなってしまった。

しかし政府は方針転換をせず、とうとう国外脱出組まで現れた。

ここに至り、ようやく政府は方針を変えた。しかしそれは更なる悪夢となつた。

「結婚はしなくても良い。夫婦として生活しなくても良い。とにかく子供を生むのが義務」

もはや女性は人間ではなく、「出産装置」でしかなくなつてしまつた。

政府は優れたDNAデータを持つ男をリストアップし、出産経験のない女性を対象に人工授精の募集をした。

募集とは名ばかりで、実際は強制的に出頭させられ、強制的に妊

娠させられ、強制的に出産をせられた。

今私の田の前に「人工授精応募要項」という通知がある。

幸い私は両親をすでに亡くし、自殺しても迷惑をかける人がいない。

しかし自殺は敗北を意味する気がし、したくなかった。

考えあぐねていると、携帯電話が鳴った。私は政府の出産関係の部署からの連絡だと想い、ギョッとしだが、番号は非通知で、誰かの電話かわからぬ。

私はおかしな電話だつたらすぐに切ろうと思ひ、出た。

「私達は反政府組織の者です。女性を装置として扱う今の法制度と戦うための集まりです。貴女も参加しませんか?」

私は混乱した。そんな組織があるのも驚きだが、政府と戦う事などできるのだろうか?

「貴女が躊躇するのはわかります。しかし政府は次の手立てを考えているのです。今はまだ強制妊娠ですが、やがては強姦同然になるのです。早く家を出て、私達のところに来て下さい。ともに戦うかどうかは、それから考えて下さつて結構です」

私は決心し、家を出た。

教えられた住所は、昔飲み屋街だったところの一角で、地下にあるフロアらしかつた。

重々しい大きな扉を押し開いた。そこには白衣を着た医師らしき男が三人立っていた。

「ようこそ。さあ、そこに座つて。大丈夫、出産は怖い事ではありませんから、安心して下さい」

いつの時代であるうか？そして、どこの星の事であるうか？誰も知らない。

田の前に広がる果てしなく続く雲の海。昇り行く恵の象徴の朝日に照らされ、輝いている。

少女はその雲の上を滑空していた。頬を撫でる風が心地良く、少女は微かに笑う。

「ほんの少し前までは、こんな事できなかつた」

少女は時折雲間から覗く地上を見下ろし、感慨に耽る。かつて死の世界と隣り合わせの生活をしていた頃。毎日が地獄だった。それでも己の信念を曲げず、戦い続けた。そして、彼女はその宿願を果たし、今こうして鳥になつて空を飛んでいる。

「」のまま、あのお日様に向かつて飛び続けていられたらしいのにね

少女は、彼女の服の中で震える小さな友人に声をかける。その友人はモゾモゾ動いて応じた。

やがて朝日はその姿を全て雲の海の上に出し、より強い輝きで少女を照らす。

「優しい暖かさだ。気持ちいい」

少女は田を開じ、日の光と風を感じた。瞼の裏に浮かぶのは、あの戦いの日々。

少女はそれを田を開き、その思い出を過去へと押しやる。忘れてはいけないが、思い出したくもない。

命を落とした人達の事は覚えていたいが、その人達が命を落とす瞬間を思い出したくはない。それはあまりに辛い事だから。

「みんな……」

悲しみに包まれ、少女は呟く。

「それでも私は進まなければならない。まだ全てが終わった訳ではないから」「

雲の海が途切れ、眼下には本物の海が見えて来た。

「来た。とうとう、来た」

少女の目に涙が光る。それは真珠の粒となつて、大空に消えて行く。

「これが、海」

死ぬまで見る事ができないと思っていたものが自分の目の前に広がっているのを、少女は瞼に刻んだ。

「奇麗……。想像していたより、ずっとずっと奇麗」

彼女の目から、また真珠の粒が零れ落ちる。真珠の粒は海へと落ちながら、消える。その海は、朝日の輝きを反射し、光の道を生み出していた。

「広い。広いのね、海って」

少女は高度を下げ、海に接近した。波間に泳ぐ小魚、そしてそれを餌とする大きな魚、更にそれを食そそうと追いすがる巨大魚。命の連鎖を目の当たりにし、少女は感動した。

「生きている。海は生きている！」

少女は大声で叫んだ。彼女の声を聞きつけ、大きな生物が海から半身を現し、背中の穴から水飛沫を上げる。少女はその生物を回避し、上空へと舞い上がる。ふと周囲を見渡すと、その生物達が群れをなし、漁をしていた。尾びれを動かし、獲物を追い込む。水飛沫を上げ、仲間に合図を送る。合図に答え、回り込むものがいる。海に大きなうねりが生じる。その躍動感に少女は魅了される。

「また会えるといいね！」

少女は彼らに大きく手を振り、そこから離れる。田舎の地はもうすぐなのだ。更に高度を上げ、少女は急いだ。

輝く海原を進んで行くと、どこからか、飛行艇のエンジンの音が聞こえて来る。

「？」

少女は辺りを見渡した。しかしそうして肉眼ではその姿を確認できな  
い。

「IJつち？」

風が少女に教えてくれた。少女はエンジン音のする方向へと進路  
を取る。

「いた」

少女は飛行艇を視認した。あの男の駆る飛行艇だ。飛行艇は少女  
に気づき、大きく旋回する。

「相変わらず、心配性ね」

少女は男の事を思い、苦笑する。飛行艇は爆音を轟かせて、少女  
の横についた。

「姫様あ！」

飛行艇のキャノピーを開き、隻眼の男が身を乗り出す。

「どうしたの？」

少女は微笑んで尋ねる。隻眼の男は、  
「どうしたのではありませんぞ！ 何も仰らずにお出かけになつて  
は困ります！」

そんな大声を出さなくとも聞こえるのに。少女はまた苦笑する。  
「笑い事ではありませんぞ、姫様！ いくら世界が平和になつたか  
らと言つて、供を一人も連れずにこのよつに遠くまで！」

男は少女の反応に怒つてゐる。

「今すぐお戻り下さい！」

「はいはい」

少女は肩を竦めて男に返事をした。

「先に行つてて。すぐに行くから」

「ダメです！ 私もそれほどお人好しではありませんぞ、姫様！  
曳航えいこうしますので、こちらにお移り下さい！」

男は怒鳴り続けたせいで顔が真っ赤である。少女はそれがおかし  
くてまた笑つた。

「何がおかしいのですか、姫様！ 早くして下さい！」

男は尚も怒鳴り続ける。そのせいで顔が更に赤くなつた。

「フックを出して」

「はい」

飛行艇の後部から曳航用のフックが放たれ、風で激しく揺れる。

少女はそれをいとも簡単に捕まえ、自分のグライダーに引っ掛けた。

「姫様！ 今回限りにして下さい。私も疲れます」

隻眼の男は少女に手を貸して後部席に誘導しながら言つた。

「疲れるのなら、わざわざ迎えに来なくてもいいのよ」

少女は座席に沈み込んで言い返す。途端に彼女の服の襟から小さな動物が顔を覗かせた。

「姫様！ いい加減になさいませ！」

隻眼の男は更にヒートアップする。少女はまた肩を竦める。

二人の乗る飛行艇は朝日を反射させて突き進んだ。

## ホラーの達人

私はイベントプロデューサーである。

様々な催し物を企画立案し、クライアントの要望に的確に答えていくのが仕事だ。

ある夏の日。

恒例の「真夏のホラー夜話」の企画を請け負つた。

私はすぐに怪談話では第一人者である有栖川由貴輝氏に講演を依頼した。

旧知の仲である有栖川氏は快く受諾してくれ、すぐに日程も決まつた。

何度かの打ち合わせののち、本番の日が訪れた。

1000人は入るイベントホール。

満員の客席。

臨場感タップリの演出。

大道具も凝つており、電飾も張り込んだ。

しかし、肝心の有栖川氏の姿が見えない。

時間には厳しい氏の性格を知っている私は、何かあったのではな  
いかと心配した。

事務所に連絡を入れた。

有栖川氏は会場に間違いなく向かっている。

ホツとして舞台袖で氏の到着を待つた。

会場は、すでに開演時間を過ぎていても関わらず、それも演出  
と思っているのか、騒ぐ客もおらず、まさに静まり返つて、有栖川  
氏の登場を待つていた。

しかし、氏は現れない。

とうとう居ても立つてもいられなくなつた私は会場から飛び出し、  
ホールの正面玄関に走つた。

「一！」

すると、玄関の回転ドアを通り、有栖川氏が姿を見せた。

「遅れすぎなかつたね。お客様は怒つていなか？」「

氏は私の姿を認めるべく、そう尋ねた。私は、

「大丈夫ですよ。どなたも騒いでいないです」

「そうか。それは良かった。安心したよ」

氏は微かに微笑むと、舞台袖へと向かつた。

大成功だつた。

ホールは有栖川氏の話に凍りつき、終焉と同時に万雷の拍手が沸き起つた。

氏は深々とお辞儀をして、舞台から降りた。

私は感動のあまり、有栖川氏にお礼を言おつと思い、樂屋を訪れた。

しかし、氏はすでに帰られたようで、そこには誰もいなかつた。

私はまた後で礼を言おつと考へ、樂屋を出た。

その時、携帯が鳴つた。

開いてみると、有栖川氏からだつた。

「ありがとうございました、先生」

私は開口一番そう告げた。すると、驚いた事に通話相手は有栖川

夫人だった。

「奥様でしたか、失礼致しました。ご主人はお隣にいらっしゃるのですか？」

私の言葉に夫人は一瞬沈黙した。

私にはその沈黙の意味が理解できず、  
「どうしました？」

夫人の言葉は衝撃的だった。

「主人はたつた今、息を引き取りました。そちらに向かう途中、交通事故に遭つたのです」

「えつ？」

私は呆然とした。

いや、さつきまで有栖川氏はここで怪談話をしていたのだ。

そんなはずはない。

「主人はずつとうわ言で怪談話をしていました。きっと魂だけはそちらに着いていたのですね」

夫人の言葉に私は号泣した。

まさしく、有栖川由貴輝氏は「ホラーの達人」だった。

## 呪いの人形

皆さんは「呪いの人形」の存在を信じますか？

私は信じざるを得ない事件に出会いました。

それをこれからお話しましょう。

私は靈能者の見習いです。高名な靈能者の先生の元で修行中でした。

そんなある日、先生のところにある大富豪の老人が訪れました。

先生はその富豪の老人が訪れるのを予期していたようで、何も尋ねずに奥の間に通しました。

老人は紫色の布に包まれた箱を持っていました。

箱は木製で、高さが30センチほどありました。

「中身は人形ですね」

先生は老人を見て言いました。老人も先生の力を聞き及んでいるのか、その問いに驚くでもなく、小さく頷くと、

「その通りです。この人形に私は悩まされています。何とかして頂けないか思いましてな」

「箱から出さなくてもその人形の強烈な波動がわかります。何故貴方はそれほどの魔性を吸っている人形をお持ちなのです?」

先生は箱を見つめたままで尋ねました。老人も箱を見据えて、

「何度も手放そうとしたのですが、どうしたことか、私のところに舞い戻つて来るのでです」

「なるほど。相当な業を背負つた人形のようですね。それに貴方の守護霊が動搖されています」

「何と? それほど危険なものですか?」

先生は老人を見て、

「このまま持ち続けければいつかは貴方の命を吸い取る事になります。私が何とか致します」

「ありがとうございます」

先生は人形を預かる事にし、老人は帰りました。

「これは私の術の間に置く。持つて行っておいてくれ」

「は、はい」

私は2人の会話ですっかり萎縮してしまつていて、その箱を手にするのが怖かつたが、そんな事は言えないので、震えながらその箱を持ちました。

「？」

私も靈能者の端くれです。しかし、この箱からは何にも感じ取れません。

不思議に思いながら、その箱を「術の間」に運びました。

最初はそんなつもりはなかつたのですが、何となく中身を見たくなり、箱の蓋を取りました。

「！」、これは……」

私は驚愕しました。箱の中に入っていた人形に見覚えがありました。

先生の居室の押し入れの中にたくさん同じものが並んでいたのを思い出したのです。

「確かに呪いの人形ね」

私は溜息を吐き、蓋を戻しました。

私は理由を言わず、先生のところを辞めました。

皆さん、どうですか？ 確かに「呪いの人形」はあるのです。

## 落としの源さん

僕はまだ捜査一係所属を拝命して間もない新人刑事だ。

何しろ僕は、生来気が弱く、そんな性格を憂えた警察官の父が柔道を習わせたり、剣道を習わせたりして精神を鍛えようとしたほどで、その成果があつたのか、高校を卒業する頃には随分と積極的な性格に変わり、警察官を目指すほどになつた。

しかし問題があつた。

僕には靈感がある。小さい頃から人には見えない物が見えてしまうのだ。

気が弱かつたのはそれが一因していて、イジメの原因にもなったことがある。

刑事になれたのは嬉しかつたが、殺人現場に出向くのは嫌だつた。被害者の靈が見え、しかもその事でその靈について来られ、一晩中枕元で泣かれた事もある。

本当にストレスと疲労が蓄積したが、まさか、

「靈が見えるので殺人事件は担当できません

とも言えず、苦惱した。

父だけは僕の靈感を知っていたので何かと気遣つてくれた。そし

て、

「私が現役の時、落としの名人が後輩にいた。彼は今でも捜査の最前線にいる。彼についてみる。きっと道が開ける」

と話してくれた。

僕にはそんな事で何かが変わるとは思えなかつたのだが、とにかくこのままではいけないとも思つていていたので、その人についてみる事にした。

そのベテランの方の名前は磐木源蔵。いかにも「デカ」という風体の人だ。

磐木さんは僕の父に世話になつた事を話してくれた。

そして僕が思い悩んでいる事も知つていた。

「親父さんからも連絡をもらつてゐる。刑事としてやつてけるか、俺デカについてよく考えてみろ」

「はい」

磐木さんは一ヶ「リして、

「じゃ、取調べの書記を頼む」

と言つと、先に取調べ室に行つた。僕は刑事課に行き、準備を整えてから取調べ室に向かつた。

僕が入室すると、丁度容疑者が椅子に座らされたらしいだった。

僕は先輩たちに田札し、隅にある椅子に座つて調書を広げた。

「さてと。始めようか」

磐木さんの凄みのある声が聞こえた。横田で見ると、容疑者は半笑いの顔で磐木さんを見ていた。

（どうやって落とすんだろう…）

僕は調書と容疑者の顔を交互に見ながら磐木さんの動向に興味を向けた。

「うわああああ…」

調書を取り始めてまもなく、容疑者が急に叫んだ。僕はギクッとしたが、

「お前なんだろ、殺したのは。全部吐いてすつきりしちまえよ

と、皿の磐木さんの声に彼を見た。

まさしく腰が抜けた。

磐木さんの背後に、容疑者に殺された被害者の靈が立っていたのだ。

僕はまた見えてはいけないものが見えていると思い、調書に田を

戻した。

「わあああー やめてくれ！ そんな田で俺を見ないでくれ！」

容疑者の絶叫にも近い声。

えつ？ 容疑者にも靈が見えている？

僕は不思議に思い、もつ一度勇気を振り絞って磐木さんの方を見た。

磐木さんは容疑者の手を握っていた。容疑者は必死に謝っている。

もしや？ しかしそんなことが可能なのか？

それからまもなくして、他の刑事がどれほど追求しても全く落ちなかつた容疑者が全ての犯行を自供し、「落ちた」。

取調べ室を出て刑事課に戻る途中、僕は磐木さんに声をかけた。

「磐木さん、もしかして……」

「そうだよ。お前と同じ。靈が見えるのさ、俺にも」

「……」

僕は嬉しいよつの恐ろしこよつの思いで尋ねた。

「盤木さんには人に靈を見せる力があるんですか？」

盤木さんは僕を廊下の端まで連れて行き、

「そんな力なのかどうかわからんが、容疑者に触れる事によって俺に見えてるモノを見せる事が出来るよつだな」

「でも最初は靈はいなかつたですよね？」

「呼んだのさ。容疑者を觀念させるためにね」

「……」

僕は啞然とした。盤木さんは一ニヤリとして、

「俺が落としの源さんと呼ばれているのは靈感のおかげなのさ。どうだい、お前も道が開けたろ？」

確かにある意味道は開けたが、僕にできるかどうかは大いに疑問だつた。

「俺も靈が見えて散々ストレスが溜まった時期があった。見えて困るという発想から見えるのだから互いに協力する、という発想に切り替えたんだ。そうすれば、見えることが煩わしくなくなる」

盤木さんの説得に僕は耳を傾けたが、首を縦に振る事はできなかつた。すると盤木さんは、

「心配するなつて。この力を教えてくれたのは、お前の親父さんなんだからさ」

僕はそれを聞いても「やるしかないと自分に言い聞かせた。

父に嵌められたのかな?

そんな風にも思えた。

## 俺の人生

俺は市川隼人。地元で一番の進学校を出て、一流大学に見事合格し、更にその上一流企業に就職した。

人生は順風満帆だ。そう思っていた。しかし、違っていたのだ。俺の人生は全然イケてなかつた。企業に入つて、それがはつきりわかつた。

元々田舎者の俺は、大学でも自分の訛りを気にするあまり、親しい友人を作る事もできず、サークル活動も部活動もしなかつた。その分を全て勉強に注ぎ込み、「一流企業に就職するために」と思い、行動した。自ら人との接触を極力断ち、只、自分の将来のためだけにその日その日を過ごしていた。

その甲斐もあつてか、俺は企業の面接を次々にこなし、内定を貰つて行つた。

「是非、我が社で」

そう言つてくれた面接官もいたほどだ。

でも、そんな扱いを受けていられたのも、入社するまでだつた。三ヶ月の研修の間、俺は何度も恥を搔いた。一度しくじると、俺はミスを繰り返した。更に悪い事に、そんな時に限つて、出ないようになると気をつけていた訛りが強くなり、同僚に失笑される。彼らの笑い声にまた動搖し、ミスをし、訛りを笑われる。その繰り返しだつた。

それでも決して諦めなかつたのは、今までに費やした時間を考えたからだ。それを全て失つてしまつような事だけはしたくなかつたのだ。

しかし、俺の努力は報われなかつた。焦れば焦るほど俺は失敗を繰り返した。

ある日、俺は新人研修担当の営業課の係長に会議室に呼び出された。

(ああ、とうとう、来るべき時が来たな)

いくら自分で頑張つているつもりでも、周囲がそれを認めてくれなければ、企業では不要なのだ。

「失礼します」

俺は緊張してドアを開き、中に入った。係長は窓から外を眺めていたが、振り返つて、

「来たか。まあ、かけたまえ」

「はい」

俺は背筋を伸ばして返事をし、すぐ前の椅子に座った。係長は俺の正面の椅子にゆっくりと腰を下ろした。

「何故呼ばれたか、わかるかね？」

係長が尋ねて来た。俺は何と答えるのがいいのか、必死になつて今までの経験を思い出した。

「考えるような事ではないと思うが？」

係長の声が大きくなつた。俺はビクッとして係長を見る。係長は哀れむように俺を見ていた。

「君の悪いところは、わからない事をわからないと言わない事なんだよ。しかも、それに気づいてすらいない。重大な欠点だ」

俺は係長の言葉を聞き、口の中がカラカラに渴いた。握りしめる拳が湿っぽい。

「君は確かに面接の印象も抜群に良かつたし、入社試験の成績もトップクラスだつた。しかし、他人との連携や協調となると酷いものだ」

「……」

「他人との連携？ 協調？ 俺は心臓が凄まじい速さで動いているのを感じた。

「社会人としての適格性を君は著しく欠いている。これは由々しき

事だよ

係長の言葉は更に続いていたが、俺は自分の心臓が心配で、それどころではなくなっていた。

「以上の事をよく考え、自分なりの対処法をまとめ、報告書にして提出する事。期限は来週の月曜の午前十時まで。いいね？」途中から俺は係長の話を聞いていなかつたので、返事はしたが、どうすればいいのかわかつていなかつた。

会議室を退室し、誰もいない廊下を歩く。

（クビだ。俺はクビにされる……。終わりだ……）

そう思つた瞬間、何も見えなくなつた。誰もいなくなつた。俺は一人きりだつた。日本でもトップクラスの企業の社員だと思つていてが、そうではなかつたのだ。俺は誰ともつながつていなかつた。（今までして來た事は、何だつたんだ？　俺は何のためにこの会社に入つたんだ？）

突然、喉が渴き出した。さつきまでは緊張していて意識しなかつたが、全身に大量の汗を搔いていた。俺は廊下の先にある自販機に向かつた。

「どうしたの、怖い顔して？」

間延びした声が聞こえた。同期の鈴村早苗さんだつた。彼女も俺と同じ地方出身者で、訛りが抜けていない。

「いや」

俺は何も話したくなかったので、彼女を見ないで自販機の前に立つた。

「何よお、その態度。市川君、いつから大都会の住人になつたの？」

「え？」

鈴村さんの妙な言葉に、俺は思わず振り返つた。

「訛りを笑う人は笑わせておけばいい。そう言って私を励ましてくれたの、忘れたの？」

そんな事を言つた気がする。人と関わるのを制御して來た俺が、只一人気を許したのが、鈴村さんだつた。

「しかめっ面をするくらいだから、嫌な事があつたんだろうけど、そういう時は誰かに話すとすつきりするって、バツチャが言つてたよ

笑顔で話す鈴村さんを見ていたら、何だかどうでもよくなつてしまつた。そして、思い切つて言つてみる。

「鈴村さん、今度の日曜日、暇?」

「何よお、それ……」

顔が紅潮する鈴村さんを見て、俺はよつやく居心地のいい緑地オアシスに辿り着けた気がした。

## やつと見つけた

「何度同じミスをすれば気がすむんだ、眉村！？」

怒鳴り声がフロアに響き渡る。俺は身を竦め、額に幾筋もの血管を浮き上がらせているスダレ禿の課長を見た。入社当初は優しい先輩だったが、今は鬼に見える。

「新人の頃が嘘のようだな。それとも、お前は眉村によく似た別人なのか？」

課長は次に陰険な顔つきになり、俺を見る。

「あ、いえ、別人ではありません」

俺は恐る恐る答えた。

「だったら、今のお前は仕事を舐めているとしか思えんぞ、眉村！性根を入れ替えろ！」

「はい！」

俺は課長の大きな声に直立不動になつた。

入社して十年。何事にも一生懸命だった俺は与えられた仕事を全力でこなし、できる事は全てするという姿勢で臨んでいた。その甲斐もあってか、五年前に係長補佐を拝命された。しかし、幾人かの部下と共に始めたプロジェクトは先方の手酷い裏切り行為でご破算となり、その責めを負つて俺は係長補佐を辞し、平社員に戻つてしまつた。

その頃からだった。優しかった女房の目が冷たくなつたのは。無理をしてローンを組んで購入した一戸建ても、今は只重い足枷でしかない。できれば売り払いたいくらいだが、女房が承知しないだろう。ボーナス加算月が迫ると、本当に逃げ出したくなる。いつその事、自殺でもするか。そうすれば、保険金でローンは精算され、女房も一安心だろう。どうせ俺なんかいてもいなくても良いのだろうし。

しかし、死ぬのが怖い俺には自殺なんてとてもできない。それに自殺すると成仏できないとか、自殺現場から離れられなくなるとか、妙な知識だけは持ち合っていたので、尚更だ。

課長に叱責された数日後、すっかり閑職に追いやられた俺は「自主退職要員」になっていた。クビになると面倒なので「辞職」させたいのが会社の本音だ。だが、今の俺にはその自主退職すら怖い。

「会社を辞めた」

なんて女房に言つたら、何と言われるか。想像するだけで恐ろしい。

「眉村さん、もう定時ですよ。帰りましょう」

俺より先に「自主退職要員」にされた一年先輩の植村さんが言った。気づくと、壁の掛け時計は五時を過ぎている。

「はい」

俺は植村さんに苦笑いで応じ、机の上を片づけた。俺達が毎日している仕事は、古くなつた書類の整理。OA化が進んでいるので、そんな仕事は必要ないのだが、俺達のよつた「要員」のためにあるらしい。植村さんの先輩の一人は、先月辞表を提出したそうだ。「何で辞めちゃうんですかねえ。私なんか、天国ですよ、この部署」植村さんは本当に嬉しそうにそう言った。俺には理解し難い人だ。「周囲の目さえ気にならなければ、こんな楽な仕事はありませんよ。誰にも急かされないし、誰にも咎められないし」

「そうですね」

俺は鞄を手にしながら、植村さんに相槌を打つ。今、この部署は一人だけなので、植村さんとの会話は無碍にはできない。

「眉村さんは、元の部署に戻りたいのですか？」

植村さんが部屋のドアを開きながら尋ねて来た。

「はあ。できれば戻りたいです。確かにあそこはきつい課でしたが」「そうですか。じゃあ、ここはつらいですね」

植村さんは一コツとして言つ。いや、笑顔で言われる事ではないと思うが。

会社を出て駅に向かう。こんな毎日だ。俺は何をしているのだろう？ 急に悲しくなった。

（明日辞表を提出しよう）

突然、そう思い立つた。俺は植村さんのようにはなりたくない。閑職に甘んじて、おめおめと仕事を続けるのは嫌だ。

ところが、電車を降り、家に近づくにしたがつて、そんな勇ましい気持ちは急速に萎んでしまう。女房の激怒する顔が浮かび、背筋がゾッとする。やっぱり、会社を辞めるのはよそう。植村さんのように割り切るしかない。我ながら情けないがそれも生活のためだ。こんなご時勢、次の職がそれほど簡単に見つかるとも思えない。それにしても、俺は何のために頑張っているのだろう？ 少なくとも女房のためではない。ましてや会社のためなんかではない。もちろん、自分のためでもない。

ふと目を上げると我が家の前だ。俺は門扉を押し開き、玄関へと進む。

「只今」

蚊の鳴くよくな声で告げる。女房からは応答はない。

「パパ、お帰り！」

その時、天使の声が聞こえた。一人娘の美菜。俺の命に代えても守りたい五年前に授かつた愛しい存在。

「どーん！」

美菜が俺に抱きついて来て、

「お帰りのチュー」

と頬にキスをする。それが俺にとつて至上の喜びだ。

「只今、美菜」

美菜を抱き上げ、俺は気づいた。俺が頑張るのは全てはこの子のためだ。何があろうと美菜は守る。そして、美菜には幸せになつてもらいたい。

「今日はパパの好きなシチューだよ」

「そうか、それは楽しみだな」

「この子とのこんな他愛もない会話で俺はやっと見つける事ができ  
た。俺の幸福を。」

心靈印真（前書き）

皆さんは、誰かに虧められた事はありますか、誰かを虧めた事はありますか？

皆さんは「心靈寫真」を信じますか？

私は信じます。

世の中には、科学では到底説明し切れない不可思議な現象がたくさんあるものなのです。

私がまだ小学生の時です。

クラスの人気者の男子が学校を休みました。

元気でみんなを笑わせてくれる子だったので、意外に思い、休んだ理由を先生に尋ねました。

「風邪だそうだ。すぐにまた元気になるわ」

しかし、やうはなりませんでした。

彼はそのまま、亡くなってしまったのです。

風邪といひのは表向きで本当はもつと重い病気だったと知ったのは小学校を卒業してからでしたが。

クラスのみんなは彼が死んでしまったとは思いませんでした。

何故なら、彼はいつもそばにいたからです。

修学旅行の記念写真にも、運動会の競技写真にも、彼は写っていました。

クラスのみんなは誰も怖がりませんでした。

何故なら彼は仲間だからです。

死んでしまっても、クラスメートだからです。

そしてとうとう卒業式の日。

クラスのみんなは、彼の卒業証書を手作りしました。

そして、彼の机の上に花瓶と共に飾りました。

きっと天国の彼も喜んでいるでしょう。

クラスのみんなの誰もが、彼の事を大好きだという事がわかつて。

卒業式の集合写真が出来上がりました。

そこにもやっぱり彼は写っていました。笑顔で。

そして四月。

私達は中学生になりました。

入学式の記念写真。

そこには何故か彼は写っていませんでした。

彼は春休みに本当に死んでしまったんです。

先生の話だと自殺だそうです。

心霊写真はないのかも知れません。

それ以降、彼は写真に写らなくなってしまったからです。

心靈寫真（後書き）

わかりにくいうちで申し訳ありません。

俺は誰だ？

俺は走っていた。

誰か俺を知っている奴はいないのか？

人がいない砂漠ではない。

無人の荒野でもない。

昼尚暗いジャングルでもない。

「ごく普通の、ありふれた街の大通りである。

たくさんの人に行き交っている。

車も走っている。

路面電車も走っている。

タクシーのクラクションが耳につく。

トランクの排気ガスが肺を刺激する。

老若男女、ありとあらゆる世代が歩いている。

俺は躊躇う事なく、次々に彼等彼女等に声をかけた。

「俺を知っているか？」

「俺を知っているだろ？」「

「俺が誰だかわかるか？」

しかし、誰も知らない。

言葉が通じない訳ではない。

俺の言葉と町を歩く人々の言葉は同じだ。

通訳が必要な訳ではない。

なのに何故誰も俺の事を知らないのだ？

俺は気味が悪くなつて來た。

吐き氣がする。寒氣もする。

熱が出そうだ。頭が重い。

あり得ない。この町で俺は生まれ、育つた。

多くの友人がいて、多くの先輩がいて、多くの後輩もいるはず。

それなのに、今まで何百人もの人々に声をかけて、誰一人として俺の事を知っている者がいない。

どういう事なんだ？

何かの罰ゲームか？

俺はそんな酷い仕打ちを受けねばならないような事をしたのか？

わからない。

どうしてなんだ？

俺はその時ある事を思いついた。

そうだ。

市役所に行けばいい。

そこなら、俺の事を知っている人がいるはず。

俺は名案だと思い、市役所に行つた。

しかし結果は同じだった。

誰も俺を知らない。

俺の事を調べるにしても、何もわからないので調べようがないと言つ。

「何故何もわからないんです？」

俺は頭に来て大声で怒鳴つた。すると市役所の人は、

「そちらをご覧なさい。何故貴方が何者がわからないのか、その理

由が示されています

と俺の右後ろを指差した。

俺はそちらに顔を向けた。

そこには、鏡があつた。

俺はその鏡に近づいた。

そして、全てを理解した。

そこに俺は「写つていたが、顔がなかつた。顔の部分は空洞で、向こうが見えていた。

「貴方は自分をどこかに忘れて來たのですよ。だから、誰にも貴方が誰なのか、わかりません」

俺は自分の顔を触つた。確かに顔は存在する。

しかし、鏡に映らない。他人にも俺の顔は見えないのだ。

俺は一生自分が誰なのかわからないまま生きる事になつたのを知つた。

## 出られない

俺はある中堅企業の営業担当。

夏真っ盛りの炎天下、それでもスーツを着込み、汗だくになりながら取引先廻りをしていた。

お昼に差し掛かった頃、俺はあまり行きたくない取引先の近くにいた。

特に注文も売込みする新商品もなかつたので、俺はそこをパスする事にし、次の取引先に向かうべく、駅を目指した。

その時携帯が鳴った。

「A社様から緊急のお電話で、どうしても今すぐに来て欲しいそうですね」

事務の女の子の言葉に俺は顔を歪ませた。

A社というのが、あまり行きたくない取引先なのだ。

「困ったな。他のお客様にアポ取つて向かってる途中なんだけど」

「そちらを変更して行つていただけませんか？ 先方様も興奮気味で」

女の子も対応に苦慮したらしい。

「わかつたよ

俺は仕方なくA社に向かつた。

俺がその会社にあまり関わりたくないのは、とにかく汚くて薄気味悪い建物だからだ。

全くと言つていいほど掃除した形跡がなく、廊下や事務所のフロアは「ミニ」だらけ。

かと言つて支払いが悪い訳ではなく、事情を知らない上司達には「お得意様」だと思われている。

確かに取引額も大きく、俺が担当している顧客の中では売上ナンバーワンである。

あまり素つ気ない態度を取つてているのがわかれれば、確実に問題になる。

一体何の用だと思いながら、A社の敷地に足を踏み入れた。

何度見ても気持ちが悪くなる建物だ。

その敷地には事務所と工場があるのだが、工場は壁が穴だらけで倒壊寸前、事務所は社長の趣味なのか、壁一面を薦が蔽つている。

普段は工場には何人かの作業員がいて、鉄骨の溶接や切断をしているのに、今日は誰もいない。

「おかしいな？」

事務所も明かりが点いている様子がない。

「悪戯か？」

俺はふとそう思つたが、そんな悪戯をして得をする奴はない。  
とにかく誰かいなか声をかけてみようと思い、事務所の玄関に近づいた。

「？」

窓の向こうに人影が動いた気がした。

「何だ、いるのか」

俺はホッとしてドアに手をかけ、開いた。

「お世話になります。お電話いただいて参りました」

事務所は玄関を入るとすぐにフロア全体が見渡せる構造だ。Ｌ字に並んだカウンターが玄関と事務フロアの境界線になつている。

「あれ？」

「誰もいない。返事もない。

「留守かな？」

俺は帰ろうと思つてドアの方を向いた。

その時だった。俺は人の動く気配を感じて振り返った。

カウンターの向こうから黒ずくめの男が飛び出して來た。

(空き巣か?)

俺は咄嗟に身構えたが、男は俺には目もくれず、ドアを乱暴に開くと外に飛び出して行つた。

「何だ?」

俺はそいつを追いかけようとドアに手をかけたが、何かが外からドアを押しているかのようで、全く開かなかつた。

「ど、どういう事だ?」

俺はパニックになりかけた。するとさつきの空き巣がドアの向こうから、

「誰かが外から来ないとドアは開かない。誰かを中に入れないと、外に出られない。騙して悪かつたが、俺も騙されてここに入つたんでね」

「何?」

「あなたも早く誰かを呼んで中に入れないと、ずっとそこにいる事になるぜ」

「会社の人はどうしたんだ? その人達が来れば……」

「俺は3日もここに閉じ込められていて、机の引き出しにあった名刺ホルダーの名刺の電話をかけまくつてやつとあんたが来てくれたんだよ。この会社の人間は誰もいないよ」

「何だつてー?」

「俺にでかけるアドバイスはそのへりこだ。じゃあな」

「おーーー。」

しかし俺の呼びかけも虚しく、空き巣男は走り去った。

「出られないだつて? そんなバカなことがあるものか!」

俺は窓に近づき、ロックを解除し、開けようとした。しかし開かない。ドアと同じで、反対側から何者かが押し留めているような感じだ。

「後で弁償しますから」

俺はそう呟いてドアの脇に立てかけてあつたハンマーを持ち、窓ガラス目掛けて振り下ろした。

「うわーー。」

窓ガラスは割れるビuurrrrとハンマーを弾き飛ばした。

「?」

俺は啞然とした。

( 本当に出でられないのか? )

全く訳がわからない。

「 せうだ 」

俺は会社に電話して誰かに来てもらおうつい想い、携帯を開いた。  
しかし何故か圈外になつていて、  
すかさず事務机に駆け寄り、固定電話から会社にかけた。

しかし繋がらない。

「 あいつは俺の会社にかけられた……。 じうして今はかからん  
だ? 」

「 お前で……最後…… 」

「 どこからか、そんな声が聞こえた。

「 だ、誰だ? 俺で最後? じういう意味だよー? 」

俺は大声で叫んだ。

「 代わりはない……。 お前で最後…… 」

「 …… 」

俺は全身から信じられないくらいの汗が噴き出すのを感じた。

（こんなところで俺は……）

絶望が脳内を支配するのにそれほど時間はからなかった。

俺は考えるのをやめた。

（理解を超えた何かが俺をここに閉じ込めたのなら、もう何をしても無駄だな）

俺はソファにドスンと腰を下ろし、目を閉じた。

（短い人生だった……）

いつの間にか俺は眠っていた。

空を飛んでいた。

まさか天国？

しかしその思索は、人の声で破られた。

「須田さん、どうしてここで寝てるのよ？」

俺が目を開けると、そこにはA社の事務員の女性が立っていた。

「あれ？　え？」

女性は呆れ顔で、

「あんたもからかわれたのね？」

「え？」

女性はフロアの隅にある神棚に近づいて倒れている狐の置物を元に戻した。

「「」の子は時々悪戯するのよね」

女性は陽気に言った。

「誰かがこの子を倒したのよ、きっと。それで悪戯が始まったのね」

俺は眩暈がしそうだったが、

「工場の人達と他の事務の人達はどうしたんです？」

「社員旅行。私は旦那が入院して不参加で、昨日退院のはずが今朝にずれたのよ。それで今会社に来たところ」

「はあ」

俺はドッと疲れが出た。

「何にしても良かったわね、大した事なさそうで」

「まあ……」

俺はお茶を頂き、A社を出た。

俺は知らなかつた。その事務員の尻に大きな「尻尾」がはえている事を。

私は俗に言つて「雨男」だ。

運動会、各種イベントと、ありとあらゆるマウドニア関係で雨に降られている。

社会人になつてからもその傾向は消えなかつた。

「お前は式典には来なくていい

高層ビル建築のプロジェクトを任せられ、成功させた時に上司に言われた言葉だ。

悲し過ぎて涙も出なかつた。

しかし、仕方ないのだ。

私が参加する式典で雨になる確率は100パーセントなのだから。

参加しない方が、式典の進行に都合がいい。

今に始まつた事ではない。

さう自分に言い聞かせた。

そんなある日、私は海外担当本部長に呼び出された。

何の用だろ？

全く面識がない人からの呼び出しに戸惑いながら、私はドアをノックした。

「入りなさい」

本部長の声に応じて、私はドアノブを回して中に入った。

「？」

そこには、恐らくアフリカの方と思われる外国人が本部長と相対してソファに座っていた。

本部長は私を見ると、満面の笑みで、

「君か、わが社期待の雨男は？」

「は？」

私は本部長の意味不明な言葉に一瞬啞然とした。

「こちらはアフリカのある国の政府高官の方だ」

「はい」

私は型どおりの挨拶をして、本部長の隣に座った。

「その国では、雨が長い間降らず、非常にお困りなのだ」

「え？」

まさか？ 嫌な予感がする。

「そこでだ、君に行つてもらつて、恵みの雨を降らせてもらいたいのだ」

そのままかだった。

「わが社で進行しているダム建設計画のためにも、是非行つて欲しい」

本部長は何を考えているんだ？

「雨男」の力は、そんな凄いものではない。

「そ、それは……」

私が断ろうとすると、アフリカの方がそれを察したのか、片言の日本語で喋りだした。

「オネガイデス、タスケテクダサイ。オネガイシマス」

その日は真剣そのもので、私は断わる気持ちを喪失してしまった。

「わかりました」

私の返事を聞き、その政府高官は躍り上がって喜んだ。

「出発は1週間後。期待しているわ」

「はい」

気乗りしない私を他所に、本部長とアフリカの方は大盛り上がりしていた。

そして1週間後。

私は成田空港の出発ロビーにいた。

私の直接の上司である営業課長と本部長は仮頂面をして私を見ていた。

「誰がここに台風を呼べと言った！？」

本部長は怒鳴り散らした。

外は突如進路を変えた台風による大雨と暴風で、旅客機のフライトができない状態になっていた。

「いや、そうおっしゃいましても……」

私に責任があるといふのか？

まあ、あるのかも知れないが。

「とにかく、先方には予定を変更してくれるように連絡しておく。

出直すしかない」

本部長も私に当たつても仕方ないと思つたのか、そつそつと歩き出した。

「私にあまり恥をかかせないでくれ」

課長は、自分で勝手に私の事を本部長に報告したくせに、今になつてこれだ。

酷い人である。

私は小さく溜息を吐き、課長の後に続いた。

本部長は一計を案じ、成田ではなく関西国際空港から出発する事を提案した。

しかし甘かつた。

天気予報で台風は完全に東の海上にそれるというのを確認し、大阪に向かつた。

羽田も大雨でフライトの見通しが立たず、新幹線で移動になつたが、その間中大雨に追いかけられた。

関西国際空港に到着すると、一瞬晴れ間が見えたのだが、東にそれたはずの台風が大阪に向かい始めたという情報が入つた。

またフライトは中止。いつ飛べるかわからないと言われた。

その後、何度も私達は挑戦したのだが、全く無駄だつた。

しかも私が空港を後にするとたちまち晴れるのだ。

これには本部長も完全に呆れてしまった。

「確かに君は雨男だな」

嫌味とも貶謗ともとれる言葉を残して、本部長は立ち去つた。

そしてある日の午後。

また私は本部長に呼び出された。

「悪いな、呼び立てて。例の国から連絡があつた」

「はい」

私はあの人気が私を殺しに来るのかも知れないと思い、目を瞑つた。

「干ばつのせいで暴動が起つて、大統領が追放されたそうだ」

「え？」

話の方向が違つ。どういふことだ？

「すると不思議な事に雨が降り始めたそつだ。国民は歡喜している  
とのことだ」

「？」

私は一瞬どうことなのか考えた。

そうか、そういうことか。

大統領が晴れ男だつたのだ。

それも究極の。

ふと思つた。

私とその元大統領が同じ場所にいたら、天候はどうなるのだろう  
と。

どうでもいいか。

私は何故か、嬉しくなつていて自分に気づき、苦笑いした。

## インターネットホーリーショー

俺は三度の飯よりネットが好きな男。

ＰＣから離れられなくなり、高校も休学している。

両親もすでに呆れ果て、何も言わなくなつた。

俺は幸せだつた。

何よりも全ての束縛から開放されたからだ。

高校に行つても、クラスメートにはシカトされるか虐められるかだ。

先生にまで味方してもらえない程だらじがないし、勉強もできない。

しかし、ＰＣの前では違つ。

俺は別人になる。

世界一頭のいい男に変身するのだ。

そして世界一強い男にも変身できる。

ＰＣは俺の親友。

そして誰よりも身近な家族。

俺はPJCなしだって生きられなくなっていた。

そんなある日、メールが来た。

耐久レースの参加依頼だった。

どれほど長い間PJCの前にいらっしゃるかといつレースだ。

そんな簡単な事でいいのかと、俺はすぐに参加を選び、返信した。

何日かして、レースの開催日の通知が来た。

明日からだと書く。

俺はいつも通りPJCの前にいたので、絶対に勝つ自信があった。

そしてレース当日。

俺はいつも通りPJCの前にいた。

楽勝だ。

優勝賞金は百万円。

それが手に入れば、もつと高性能のPCを買い、もつと楽しめる。

俺は既に優勝後の事を思い描いていた。

レースは簡単。

レース主催のサイトにアクセスし、表示される文章を入力して行くだけだ。

こんな事はまさしく朝飯前。

全然負ける気がしない。

開始から十数時間が経過し、次々に脱落者が出てきた。

何しろ、トイレ休憩もNGなのだ。

俺はその対策として、大人用の紙オムツとおまるを用意していた。

準備は万全だ。

ほとんどの参加者達が脱落して行く中、俺は勝ち残った。

何としても優勝賞金を手に入れる。

俺は燃えた。

「んなに頑張ったのは生まれて初めてかも知れない。

サイトの参加者カウンターは既に「あと二名」になっていた。

もう少しだ。

もう少しで優勝だ。

俺はアンモニア臭と戦いながら、表示される文章を入力し続けた。

そして開始から七十一時間後。

遂に「あと一名」になった。

やつた。やつたぞ。俺が勝ち残ったんだ。

サイトに俺のハンドルネームが出て、優勝の文字が流れた。

「やつた！」

俺はガツツポーズをして飛び跳ねた。

更にサイトには「優勝賞金を今すぐ取りに来て下さい」の文字が  
出た。

「今すぐ？」

俺はキヨトンとした。

次の瞬間、PCのモニターから真っ黒な腕が伸び、俺をモニターの中に引きずり込んでしまった。

「それほどヤジが好きなら、いつせこの中で暮らしなさい」

「どうからかそんな声が聞こえた。

普通の人間なら、仰天してパニックになるだろ？

しかし俺は違った。

「喜んで」

PCの中で暮らす。

俺は至福の時を迎えた。

ああ、何て幸せなんだ。

## 私達は抗議します

私の名前は佐脇覽子。

新進気鋭のホラー小説家である。

最近ようやく執筆した小説が売れるようになり、生活も安定して来た。

私のホラーは私自身が登場するという変わった感じのものなので、贊否両論がある。

しかし、人気は次第に上昇し、常に上位にランクインする程になつていた。

ところが、である。

どういう訳か、ファンレターに混じつて抗議文が送られて來た。

何かまことに書いたかな、と思いながら、封を切つた。

便箋にビックシリと細かい字で書かれていたのは、私の小説に登場する人物への怒りの声だった。

まずは在日外国人の方。アメリカ国籍のようだ。

リッキー・テックスさん。

私はこの人と同じ名前で連續殺人鬼を登場させ、たくさん人を殺させた。

彼は英語の講師をしているらしく、生徒の父兄から、

「辞めさせてくれ」

とたくさん要望書が勤務先である駅前留学の英会話教室に来ていると言つ。

確かに由々しき問題だが、それと私の小説と結びつけるのはどうだらう?

確かに由々しき問題だが、そんな事で辞めさせようとする父兄の側に問題があると思うのだが。

そして次に書かれていたのは、御徒町のアメ横の方々の連名。

私は御徒町樹里という悪逆非道な殺し屋を登場させ、対立するヤクザを次々に殺させた。

御徒町という町のイメージも悪くなるし、御徒町がヤクザの町というイメージが付くのでそういう話はやめて欲しいという抗議だ。

しかしこれも的を射ていない。

樹里は御徒町のためにヤクザと戦っているのだ。彼女は御徒町が大好きなのだ。

だから御徒町樹里と名乗つていいのだ。

私だって、決して御徒町を蔑むために書いている訳ではない。

酷い誤解である。

そしてもう一つ。

これは少し困った。

お笑い芸人であるハリ ンボンからの抗議だ。

靈感少女というホラー小説に登場する算輪まどかが、ハリセ ボンの算輪は かのマネだというのである。

そんなつもりはないのだが、ネタとして名前の似ている事をギャグにしてるので訴えられたらまずい。

私は対策に困り、編集者に相談した。

すると編集者は溜息を吐いてこう呟つた。

「先生、この話自体が危ないですよ。訴えられても知らないですか  
らね」

## 犯行目的

私はG県警の刑事。

県内は犯罪史上稀に見る獵奇殺人事件で騒然としている。

被害者はごく普通の人達。

殺され方が尋常ではない。

十代の男子高校生は鼻にイヤフォンを入れられ、耳に錐<sup>きり</sup>を突き刺されて失血死。

二十代の若い女性は、携帯電話を喉の奥に突っ込まれて気管損傷<sup>きりう</sup>で死亡。

三十代の男性は自宅のプロック塀と自分の車に挟まれて圧死。

四十代の女性は、自分の自転車の下敷きになり内臓破裂で死亡。

五十代の男性は、耳、鼻、口に火の点いたタバコを入れられ、顔を粘着テープでグルグル巻きにされて窒息死。

六十代の男性は携帯カラオケのマイクで何度も殴打され、頭骨陥没で死亡。

七十代の女性は舌を抉り取られ、目を潰されて失血死。

全ての殺人現場には、「天誅」と墨で書かれた半紙が置かれていた。

た。

被害者は全員それぞれ全く面識がなく、何一つ共通点がない。

只一つ同じなのは、全員G県在住という事だけ。

捜査は難航するかに思われた。

しかし、事件は犯人の自首という、実に呆気ない終結を迎えた。

ある意味で言つと、本当の「獵奇事件」はここから始まる。

犯人（と思われる人物としか現段階では言えない）は、四十代の男性。

自首した時応対した関係で、取り調べは私が担当した。

そして私はその男の心の内を知り、震えた。

以下、男の供述。

「動機ですか？ 正義感ですよ、正義感。誰にでもあるでしょ、こいつ許せないって。私はそれが他の人達に比べて強いんですよ」

男は自首はしたが、自分の犯行は正当なものだと考えていた。異常だ。

「高校生ですか？あのバカ、バスの中でイヤフォンで音楽聞いていて、音が大きくて、凄く耳障りだつたんです。で、注意したら逆ギレですよ。バスを降りてから後をつけて、人がいないのを見計らつて殺しました。あんな奴、生かしておいてもどうせ口クな人間にならないでしょう？」

そんな事をお前が決めるな。

「若い女ですか？携帯電話で話すのに夢中で、歩道の真ん中に立つたままなんです。他の人も迷惑そうに通り過ぎてました。あまりにも目に余るので、注意したら、『はあ？ キモいオヤジ』とか言いまして、そのまま無視されたので、一度そこから離れ、そいつが歩き出したのをつけて、人気のないところで羽交い絞めにして持っていた携帯電話をそのバカでかい口の中に突き立ててやりました。死んで当然ですよ、あんな迷惑女は」

もつ完全に狂っている。

「三十代の男？ああ、あの路駐ヤロウね。あいつ、家に駐車場があるのに、いつも路上駐車してるんです。しかも近くの交番の警官とは顔馴染みみたいで、路上駐車を通報しても取り合つてもらえないんです。で、直接注意しに行つたら、逆ギレですよ。『何か迷惑かけたのかよ』って。私は周囲に人がいなかつたので、そいつの車に乗り込み、そのバカ男をそいつの家の塀に挟み込んでやつたんです。すつきりしましたよ、いい事をしたので」

正義感とか言つていたが、どこに正義があるんだ？

「自転車？歩道を我が物顔で自転車に乗つてゐるババアね。あい

つ、自分が邪魔なのに、歩行者が並んで歩いているとすぐに大声で怒鳴るんですよ。『ここはみんなの歩道なのよ』って。何言つてるんですかね。この前、それを私に言つたんです。だから後をつけて自転車ごと蹴倒し、喚くババアの腹の上に自転車を叩きつけてやりましたよ。爽快でしたね』

確かに苛つく自転車は存在するが、殺すのはやり過ぎだろ？。

『この男はそんな調子で犯行を自供し、一切裁判では争わないと言つた。

『いつの目的は何だつたのだろう？』

私は無駄と思いつつ、尋ねてみた。

『君の目的は何だ？』

男はニッヒ笑つた。

『私の目的ですか？ それは、世の中には犯罪にはならないがとても有害な人間がたくさんいるのを世間の人達に知つてもらつ事です。刑事さんもそう思いませんか？』

お前もその有害な人間の一人だろ？。

『そう言いたいのをグッと堪え、私は男を哀れんだ。』

そして同時に、人間はある籠たがが外れてしまつたたちどころに犯罪者になつてしまつ弱い存在なのだという事を痛感した。

## 僕の夏休み

嫌だ。

何故こんなことになつたのか？

僕はあるホラー作家の担当編集者。

今、その作家の別荘に向かう途中だ。  
その作家の「い」命令で、急遽夏休みを取られ、馳せ参じた次第である。

何が嫌なのかと言つて、その作家があまりにも悪趣味なのだ。

作品もHログロものばかりで、僕は彼女のホラーを「嘔吐モノ」と呼称している。

そんな作風だから、恐らく別荘も氣色の悪い化け物屋敷風だらう（いや、化け物屋敷そのものかも知れない）と思っていた。

ところが、だ。

着いてみて、別の意味で嘔吐しそうになつた。

彼女の顔はお世辞にも綺麗ではない。

むしろ職業にピッタリの顔をしている。

だからこそ、「化け物屋敷」を想定していたのだ。

でも別荘は「お姫様」風だった。

「ど」かの国の城をイメージしたのか、一四キ一四キと伸びた塔がいくつも見える。

そんな別荘の一階のバルコニーに、彼女はいた。

「いらっしゃーい。待ってたわよ、大木君」

その怖い顔を笑顔でいっぱいにして、彼女は手を振った。

しかもフリルのたくさん着いたドレスを着ている。

恐るべく、「お姫様気分」なのだろう。

「ど、どつか。お招きに預かり、光榮です」

僕までおかしい。まるでしもべのよつた言葉遣いだ。

「今、そっちに行くわね」

いや、その距離で十分怖いですから、それ以上近づかないで下さい。

そう言いたかった。

でも言えない。

ますい。

噂は本当だつたのかも知れない。

彼女は「若い編集者好き」で、別荘に招き「頂いて」しまつらじいのだ。

今からでも逃げようかと思つてゐると、『本人が到着してしまつた。

「お待たせエ。そ、入つて頂戴」

僕は彼女に手を捕まれ、全身総毛立つのを感じた。

僕は半分失神したような状態で、それからの何時間かを過ごした。  
彼女の料理は豪華で、全部自分で作ったとか言つていたが、味も  
わからないまま、口に運んだ。

やがて食事も終わり、メイドや執事達が姿を消した。

ますい。

完璧に2人きりだ。

僕はある意味死を覚悟した。

「ねえ。私の秘密、知りたい？」

彼女が小首を傾げて尋ねた。

全然可愛くない。むしろ怖い。

「は、はい」

そう答えなければ殺されると思った僕。情けない。

「そう。だったら、教えてあげる」

そう言つと、彼女は自分のアーノを掴み、グイッと引き上げた。

「ヒィイイッ！」

僕は腰を抜かして、椅子から転げ落ちてしまった。

彼女の顔がベロンと剥けてしまったのだ。

「どう？ これが本当の私よ」

もつと驚いた。

その下から現れたのは、映画女優も真つ青の美女だつた。

「私はホラー作家、デビューする時、この特殊メイクで醜い顔になつたの。その方が話題作りになると思ったから」

「はア」

僕は転がり落ちたままの態勢で話を聞いた。

「どう? 私の素顔は?」

「え、綺麗です」

「ありがとう

僕は彼女に誘われるままに寝室に行つた。

そして夢のような一夜を楽しんだ。

彼女は最高だった。

僕は知らなかつた。

彼女の昔の写真が寝室の書棚にあるのを……。

それさえ見ていれば、一夜を共にする事はなかつたひつ……。

特殊メイクの顔こそが、彼女の本当の素顔だったのだから。

## 真夜中のプール

蒸し暑い。

もう午後十一時を過ぎてゐるところに、部屋の温度計は三十一度を超えてゐる。

エアコンは故障し、熱風しか吐き出さない。

私はガマンできなくなり、アシスタント達に声をかけた。

「こんな状態じゃ、仕事が捲らない。ちょっと息抜きに出ようか

「ええーッ！？ 大丈夫なんすか、先生？」

チーフの木下が言った。私は木下を見て、

「君が一番限界来てる顔だよ。とにかく、今そのまま続けても参ってしまう。ここから出よう」

「はあ。先生がそうおっしゃるのなら……」

木下は他のアシスタント達に田配をして答えた。

「なに、そんな長時間抜けよつと言つてゐるんじゃないよ。小一時間で戻るのさ」

私はわざと席を立ち、ペンを置いた。

「明かりはつけたままでいいよ。すぐ戻るんだから」

私はアシスタント五人を引き連れ、蒸し風呂のよつた通称「アトリエ」を出た。

最初はただブラブラしてコンビニで冷たいものでも買つつもりだったのだが、予定が変わった。

コンビニに行く途中に小学校があり、校庭の一角にプールがあるのが見えたのだ。

「おい、涼まないか、あそこで？」

私は悪戯心を起こして提案した。木下は、

「まずいっすよ。警備員がいますって。見つかったら大変ですよ」

「大丈夫だよ」

木下達も顔を見合させていたが、次々にフェンスを乗り越え、プールサイドに侵入した。

木下達も顔を見合させていたが、次々にフェンスを乗り越えた。

「それっ！」

私はトランクス一枚になり、プールに飛び込んだ。

「やつほーつ！」

アシスタント達も飛び込んだ。私はすぐに水から上がり、スタート台に上った。

その時、誰かがドンと私の背中を突いた。

私はバランスを崩して、ドボンとプールに落ちた。

「こりゃ、誰だ、背中を押したのはー!？」

私の言葉に木下達は驚きめ、

「自分らは全員、プールに入つてましたよ、先生」

「えつ？」

次の瞬間、私達は何者かに足を引っ張られて、水没した。もがいた。しかし、水中に引き込む力は壮絶なほど強く、抵抗虛しく全員水底に沈んだ。

どれほど時間が経過したのだろう。

「そんなところで何をしてるー!」

という怒鳴り声で、私は目を覚ました。

慌てて周囲を見回す。木下達も起き上がりっていた。

「……？」

私達は水のないプールに寝ていたのだ。

「誰なんだ、あんた達は？」

懐中電灯で私達を順番に照らしながら、警備員らしき男が尋ねた。

「す、すみません。あまり暑かつたので、プールで涼もうと思つて、つい……」

私がそう言い訳すると、警備員は首を傾げて、

「水のないプールに入つても涼めないだろ？ 何を考えているんだ、あんた達は？」

「ええ？」

私は木下達と顔を見合せた。プールの水は抜かれたわけではなかつた。

私達の誰も水に濡れていないし、プールの底も湿つてもいない。

「このプールはもう取り壊すんだよ。この小学校も今年で廃校なんですね」

「……」

私達は身震いした。

水は確かにあった。

しかし私達には全く濡れた痕跡がない。

そして私を突き落とした何者かの存在……。

私は警備員に平謝りし、小学校から出た。

「何だつたんすかね？」

木下がぼそりと言った。しかし誰も答えなかつた。

私はアトリエの鍵を取り出し、ドアを開いた。

そして腰を抜かした。

中は洪水でもあつたかのよひに水浸しだつたのだ。

終わつていな……。

……ひるんだ、あいつが……。

皆さんは「携帯電話」をお持ちですか？

もしお持ちなら、このお話を読む前に電源を切る事をお勧めします。

律子は携帯依存症とも言つべき状態で、片時も携帯を手放せないでいた。

その理由。

「いつ、出版社から受賞の連絡があるかわからぬから」

あり得ない。

彼女は小説の公募に投稿した事がないのだ。

それなのに、毎日のように出版社からの連絡を待っている。

彼女が携帯を手放せない理由。

実はもう一つある。

それは誰にも言つていらない事なのだが、彼からのメールを待つて

いるのだ。

いや、さつきつぱりてしまえば、「彼」ではない。

只の同好会仲間。

小説家を田指している仲間同士の集まりで、一日惚れした年下の男。

相手は全く恋愛感情などない。

もし愛情があるとすれば、それは「お母さん」のような存在。

それほど歳は離れていないが、男の方はそういう気持ちだ。

律子はそれに全く気づいていない。

傍目にほれこさえ見えてしまつ。

彼女はその2つの連絡相手のために、寝る時さえも携帯を手放さなかつた。

家族も彼女の行動を心配し、心療内科の受診を考えたりした。

しかし、元来医者嫌いの律子は、どんなに家族が説得しても、病院に行つたりしなかつた。

また、過酷な減量をさせられると思つてゐるのだ。

今ではリバウンドし、着られた服がほとんどなくなってしまっている。

そんな状態でも、彼女は携帯を放さなかつた。

しかし律子の携帯は鳴らなかつた。

彼女は携帯ショップに行き、携帯が壊れていると騒いだ。

携帯はどうも異常がなく、どうしても納得しない律子に困り果てた店は警察に通報した。

律子は警笛にも食つてかかり、支離滅裂な事を言い続けた。

彼女は公務執行妨害で緊急逮捕され、警察に連行された。

留置所に入れられる時、彼女は携帯を没収された。

律子は泣いて嫌がつたが、警官は携帯を取り上げ、律子は留置された。

「私は携帯がないと生きていけないのー、お願ひだから返してー！」

彼女は叫び続けた。

しかしその願いは聞き入れられなかつた。

翌朝、律子は遺体となつていた。

彼女の姿は、携帯で話しているようだつたといふ。

## 生まれ変わり

皆さんは生まれ変わりを信じますか？

私は信じます。

と言うより、私自身が生まれ変わりを「記憶」しているのです。

私は30年程前にある男に乱暴された挙句、絞殺されました。

その記憶が今の私の脳に鮮明に残っているのです。

男の名前も年齢もわかつっていたので、インターネットで検索し、当時の記事を読みました。

そして、男が仮出所している事も突き止めました。

私は会社に長期休暇願いを出し、男がいる町に行きました。

復讐してやろうと思つたのです。

前世の私の仇を討つ。

バカな考えかも知れませんが、その時の私にはそれが全てでした。

私は男の家を見つけ、男が帰るのを待ちました。

夜も更け、人通りもまばらになつた頃、男は姿を見せました。

男が家の鍵を開け、中に入った瞬間を狙い、私は男の背中に突進しました。

「ぐ……」

私は果物ナイフで男の背中を刺しました。

男は何が起ったのかわからない顔で、私を見ました。

「だ、誰だ？」

「貴方に乱暴されて殺された女の生まれ変わりよ！ 仇を討たせてもらひつわ！」

私は積年の恨みを晴らすように叫びました。

男は驚愕していました。

「30年も前の仇、だと……？」

「そうよ！」

何故か男はニヤリとしました。そして、血にむせ返りながら言いました。

「俺はその更に30年前にお前の前世の女のまた前世の女に殺された男の生まれ変わりさ！」

## 受験勉強

智仁は大学受験を控えた高校三年生である。

部活動も終わり、本格的に勉強に集中する事にした。

しかし、周りの友人達は、全くそんな気配がない。

皆遊び呆けている。

智仁はそんな友人達の事を羨ましく思つたが、一緒に遊ぼうとは思わなかつた。

友人達は智仁の考えを知つてゐるのか、誰も誘いに来ない。

おかげで智仁は勉強に集中できた。

彼は部活に明け暮れた3ヶ月の遅れを取り戻すため、睡眠時間を削つて取り組んだ。

苦手科目の克服。

ケアレスミス防止のためのテクニック。

時間配分の仕方。

わからない問題は後回しにして、できるところから解いて行く。

とにかく集中した。

何が何でも志望大学に合格する。

遊ぶのはそれからでも遅くはない。

智仁を知っている人が今の彼を見たら、仰天するだろ。

そのくらい彼は変わった。

そして夏休み最後の日。

智仁は休み前に立てた計画をやり遂げ、充実していた。

「ふう」

彼は伸びをして天井を仰いだ。

「今日で夏休みも終わりか。早かつたな」

彼は不意に背後に人の気配を感じて振り返った。

そこには見た事もない男が立っていた。

服装は上下黒のスーツで、黒のネクタイ。

葬式の帰りなのだろうか？

それとも今から行くところ？

「あの、じゅら様ですか？」

智仁は探るような目で尋ねた。すると男は、

「もう満足したかね、智仁君？」

「え？」

自分の名前を知っている？ 遠い親戚のおじさんだらうか？

「ああ、行こうか」

男の言葉で、周りの風景が一変した。闇の中、無数に浮かぶ蠅燭の火。

「うわあああああー！」

そこにはたくさんの亡者が歩く黄泉への道だった。

「君は高校時代遊びに夢中になり、拳銃ヤクザの世界に入り、抗争の中で銃弾に倒れ、今意識不明状態だ」

「嘘だ、嘘だ、嘘だ！」

智仁は絶叫した。男は冷静に続けた。

「もうすぐ君は命が尽きる。君は地獄に行かねばならない。私はその水先案内人だ」

「死神……」

智仁は男の正体を知り、息を呑んだ。

「人生は一度。君はその一度きりの人生を無駄に生きた。今からその報いを受ける事になる」

「嫌だ、嫌だ、嫌だ！」

智仁は必死に拒絶した。

「嫌だ、絶対に嫌だ！ まだ死にたくない！ 僕の人生は無駄な人生なんかじゃない！」

智仁は亡者達に囲まれ、その列に飲み込まれて行つた。

「俺はまだ死にたくない！！」

智仁の叫び声が、虚しく響いた。黒スーツの男が小さく一礼し、

「ご愁傷様です」

と呟いた。

私は所謂「深窓の令嬢」と呼ばれる存在でした。

生まれた時から沢山の使用人達に傳かれ、

「お嬢様」

と呼ばれて育ちました。

他人には我儘と言われました。

確かに兄弟姉妹がいない分、利己的に育つてしまつたかも知れません。

でも私は、その身分故に様々な人達に持て離され、媚び諂われました。

それを当然と感じ、もっとそつて欲しいと思つ自分。

誰も奢めてくれない。

私の傲慢さは年を追う毎に酷くなつていきました。

ある日、今までの振舞が全く通用しない時が訪れました。

あまりにも突然過ぎる父の会社の倒産。

何も聞かされていなかつた私にとつて、まさに「寝耳に水」でした。

父は自殺し、母は失踪しました。

何不自由なく生活して来た私にとつて、一瞬にして漆黒の闇に突き落とされた心境でした。

でも私は死を選んだり、姿をくらませたりはしませんでした。

一つだけ私の性格で良い所があるとすれば、それは「絶対に諦めない」所だと思います。

私は懸命に生きる術を探しました。

今まで私に阿つていた人達が、仕返しとばかりに意地悪をして來た事もありました。

それでも私は負けませんでした。

何時か必ず見返してみせる。

そう心に誓い、日々を送りました。

そうした生活をしていた私にも、遂にその日が訪れました。

「適齢期」です。

まだ早い。

そう思っていました。

でも人それぞれ違うモノですから、仕方のない事かも知れません。

私は震える手で市役所からの通知を開き、読みました。

「貴女の今までの生活データから試算した結果、貴女の死亡「適齢期」は今年の十一月三日と決定致しました事をお知らせします」

その日は私の六十歳の誕生日でした。

ジトジト降る雨。

私は雨降りが続くと心配になる。

家の裏は道路を隔てて切り立った崖。

十年前に落石があつてから、補強工事がなされた。

一見心配なさうな強度に見えるが、不安だ。

何にしてもあと5年は崩れないで欲しい。五年崩れなければもう大丈夫。

私はこの家を売り、引っ越しつもりだ。だが、まだ資金が足りない。

もつじばりくはこないといけない。

そんな私の不安を他所に雨が三日も降り続いている。憂鬱になる。

傘を差して崖の様子を見に行った。口々口々と小さな石の破片が落ちて来る。

手抜き工事がたくさん発覚している事件を見聞きするたびに、こもさうではないかと考えてしまつ。

思わず駆け出し、家に戻る。電話に近づき、受話器を手にした。

しかし戻してしまつ。

連絡していいものかと。騒ぎ過ぎだと言われるのがオチか?

私は一階に上がり、窓から屋を眺めた。滝のような雨がコンクリートに打ちつけている。

十年保つたのだ。一日一日で崩れたりしないだろう。

しかし十年間の蓄積があるとも考えられる。

明日にも崩れるかも知れないのだ。

そんな妄想を繰り返す日々が続いた。

何日か経つたある日。

私が仕事から帰ると、裏の崖が崩れ、私の家が押し潰されているのが見えた。

私は驚愕した。よりによつて何故留守の時に……。近所の人は、

「家にいない時で良かつたね」

と言つてくれた。私は家が潰れたのはどうでも良かった。その後の事が気になつた。

私は県の土木課の人に謝罪を受け、県営の住宅に無料で入居した。

職員はしきりに謝罪と言い訳を繰り返していたが、私は疲れたからと言って彼を追い返し、支給された布団に包まって眠った。

私はその日から別の不安に悩まされた。崩れた崖。押し潰された家。

これからどうなってしまうのだ？

それから一ヶ月が過ぎた。

崖の修復工事が始まつた。私はますます不安になつていた。

何故誰も聞いて来ないのだろう？ 誰も気づいていないのだろうか？

日曜の朝、誰かがドアフォンを押した。私は眠い目を擦りながらドアを開いた。

「警察です。がけ崩れで押し潰された貴方の家の床下から、毛布に包まれた白骨死体が見つかりました。お話をお聞かせ願えませんか？」

私の引越しは無期延期になつた。

## 「ひりお密様相談室」です

私はある通販会社のお密様担当。

日々、理不尽な理由で「クレーム」を書いてくる「モンスター」達の相手をするのが主な仕事だ。

今日も憂鬱な一日が始まる。

「お宅で買った掃除機なんだけど、全然吸い込みが悪くてどうも使いようがないわ」

「申し訳ございません。不良品はお取替えいたしますので」

私は見えない相手に深々と何度も頭を下げて感じた。

「居間の鉢植えを移動しようとしたら、落として割つちやつたのよ。その土も植木鉢のかけらも全然吸い込まないってどういふ事よ?  
返品させて頂戴」

もう言いがかりだ。酷過ぎる。

でもこの程度は可愛い方だ。

「お宅で買った懐中電灯、電池が入っていないじゃないじゃないの? どうしてよ?」

「電池は別売りと書いてありますので、『容赦トセ』」

「そんなこと、どこにも書いてないわよー。書いてあっても私が見ていいなって言つてるんだから、電池送りなさいよー。」

「それは致しかねます。返品は受けましたので、それでどこで容赦下さい」

「もう一度とあなたのところから買わないからねー。」

そのお客様は、さう言しながら円に何度も「注文され、その度に同様のクレームをつけて来るのだ。

さりに最悪なのはこんなケース。

「お宅で買つた洗剤、子供が飲んじゃつて救急車呼んだわ。」近所にとても恥ずかしい思いをしたから、代わりに謝つて頂戴！」

もう子供の心配より世間体なのがモンスターだ。

わが社に何も非がない事までイチャモンをつけて来る。

そんないつもの電話応対をしていた時、私の隣の女の子が泣き出してしまった。

声こわ出していながら、目が真つ赤で、涙が溢れている。

「どうしたの？」

私は小声で尋ねた。その子はメモ帳に、

「大丈夫です」

と記したが、全く大丈夫そうではない。

「私が代わるわ」

女の子は相手にその事を告げ、保留ボタンを押すと、嗚咽を上げて机に伏せてしまった。

「お電話代わりました、責任者の内藤です」

「おお、女か？ 男はおらんのか、お前んと」は？」

「おりますが、こひらの責任者は私ですので、私が承ります」

相手は中年の男。もしかして卑猥な事を言つたのか？

最初に応対した子も、決して気が弱い子ではない。

原因は何か？

私は気持ちを落ち着かせながら、ゆっくりと言つた。

「係りの者が何か失礼な事を申し上げたのでしょうか？」

「そうじゃねえよ。俺は何も失礼な事はされてねえよ

「そうですか。お客様、大変申し訳ありませんが、もう一度お話を聞かせ願えませんか？」

「かまわねえよ」

男は話を始めた。

そして10分程経つ頃。

「課長、大丈夫ですか？」

私は1班の班長に声をかけられ、ハッと我に返った。

知らない間に泣いていた。机の上にある小さな手鏡に真っ赤な目をした私の顔が写っていた。

「だから言つたろ？ 並みの神経じや、俺の話は堪えられないって

相手の男は哀れむような声で言つた。

私は男の生い立ちを聽かされていたのだ。

そのあまりの壮絶さに、知らないうちに泣いていた。

クレームではなかつたが、これも迷惑電話なのだろうか？

「もつかないよ。もっと我慢強い奴がいるといひ電話するやう

男はそう言つて電話を切つた。

私はしばりへ受話器を持ったまま呆然としていた。

## クレーム

私は数多くのホラー小説を世に送り出している作家だ。

今日は新しいホラー小説の企画会議と言う名目で、料亭で酒宴を開いていた。

私の担当の編集者が、お酌をしながら、

「先生、今度の小説は、人類存亡を賭けたSFホラーにしませんか？」

「SFホラーか。今まで書いた事がない分野ね。いいかも」

私はほろ酔い気分で応じた。

「こんなのはどう？ 死の国で落ちこぼれた死神が、その腹いせで人類を次々に殺し始める」

「おお、いいですねえ」

担当編集者が赤い顔で同意した。

「死神は世界の主要国の元首に憑依し、核ミサイルの発射ボタンを押す。人類は絶滅」

「いやあ、滅んじやうんですか？ 何とか反撃しましょうよ」

編集長まで話に加わって来た。私はへラへラ笑つて、

「だつて、相手は死神よ？ 生きている者を殺すのが彼の仕事でしょ？ 絶滅でいいの！」

酔いがかなり廻つて来た私は、支離滅裂になつていた。

「最終的には、その辺は読者の想像に任せるべきではないですかね？」

編集者が生意氣にも意見した。私はキッとして、

「ひるむさい！ 絶滅つたら絶滅なの！ 人類は滅びるべきなのだあ！」

と叫び、そのまま酔いつぶれてしまつた。

記憶が途切れたようだ。

私は何故か一人で暗い夜道を歩いていた。

「？」

私は外灯の下で手招きしている執事のような風体の老人に気づいた。

「私に何か用ですか？」

きっと、ファンだらう。サインでも欲しいのかな？ 老人は満面

の笑みで、

「私、実は死神なんです」

「へ？」

私はこの老人が危ない人なのだと思つて後ずさりした。

「ご心配なく。貴女をお迎えに来たわけではありません。実は、あの世を代表して抗議に参りました」

「は？ 抗議？」

「はい」

私は「マジマジ」とその自称死神の老人を見た。

どちらかと言つて、死神よりは神様のような気品がある。

「死神の仕事は、人を殺す事ではありません。亡くなつた方をあの世にお連れする事です」

「はあ」

私は何でこの人、企画会議の内容を知つているのだろうと思つた。

「貴女は私共の仕事を誤解されています。その事を伝えたくて、ここまでお越しいただいたのです」

「は？ ここまで？ ここってどこ？」

「生の国と死の国の境界です。日本では黄泉比良坂と呼ばれています」

その名前、私も小説で使つた事がある……。

「私共の抗議、ご理解いただけましたか？」

老人は微笑んだままだつたが、急に威圧感を漂わせて來た。

返答次第ではこのまま「お連れする」という事か？

「は、はい。理解しました。以後氣をつけます」

私は震えながら頭を下げた。

「それは良かつた。ありがとうございます。これからもよろしくお付き合いの程を」

老人はそう言つと霧のように消えてしまった。

「先生、先生！」

担当編集者の怒鳴り声で、私は目を覚ました。

料亭の中だ。

帰り道ではなかつた。

まずい。

私は今まで随分と出鱈田な死の世界を描いて來た。

とうとうあの世が怒り出して、死神が抗議に來たのだ。

私は決意した。

「さつきの話、全部白紙ね。違うストーリーにするから」

「ええ？」

編集者と編集長は、突然の私の心変わりに仰天していた。

数ヵ月後、私の新作が出版された。

死神とのほのぼのとしたやり取りを描いた感動的なホラー。

大成功だった。

ダブルミリオン。

私の著作で1番のヒット作となつた。

ある日、ファンレターに目を通していると、妙に懐かしい感じの

する葉書を見つけた。

差出人の名前は書いていない。

筆跡にも見覚えがない。

でも知っている。わかるのだ。

あの死神からだ。

私の著作への賛辞と、死神の優しさを描いてくれた事への感謝の  
気持ちが書かれていた。

最後の一言に私は困惑した。

「貴女が亡くなった時には、死の国の一同でお迎えにあがります。  
それまでお元気で」

## アイスクリームの女とバツイチの男

私はバツイチ子なしの中年サラリーマン。

妻に離婚届を突きつけられ、売り言葉に買い言葉で判を押した。

そして、妻が出て行って一週間と経たないうちに後悔した。

筆筒のどこに何が入っているのか、全くわからない。

洗濯機の動かし方がわからないし、風呂の沸かし方も謎だ。

自分でも情けない男だと思つ。

しかし、だからと言って、元妻（すでに法律上はそうだ）に頭を下げる、

「やり直したい」

などとは、口が裂けても言いたくはない。その程度のプライドは心の片隅にあるのだ。

更に悪い事に、何も考えずに離婚してしまったため、元妻の住所すらわからぬ。

当然、携帯は番号を変えられ、勤務先も変わっていた。

じ一寧な事に、

「教えないで欲しいと言われています」

と前の勤務先の事務員に言われた。癪に障つたが、どうする事もできない。

「くそ」

私は携帯に毒づき、キッチンのテーブルの上に投げ出した。

床にはカツプめんの容器の残骸がこれでもかといつ具合に散乱している。

少し臭い始めているものもあるようだ。

今気づいたが、ゴミの口もわからなかつた。自分の生活能力の低さに嘆然としてしまつ。

イライラしたのでタバコを探したが、ズボンのポケットには空箱が入つているだけ。

買い溜めしておいたのはわかつてゐるが、それをどこにしまつたのかがわからない。

「何だつてんだよ！」

更にイラつき、ゴミ箱に空箱を叩きつけた。

するとそのせいで、ゴミ箱が倒れ、中についたものが溢れ出てしまつた。

それを防ぐのなんて考えもせず、私は家を出た。

「寒いな、これじゃあ」

私はTシャツ一枚で出でてしまったのに気づいた。

いくら桜の開花が始まっているとは言え、こんな薄着で外を歩いているバカはいない。

「タバコを買うだけだから、いいか」

戻つて服を着るのも面倒だったので、そのまま歩き出す。

ところが、その日はとにかくついていなかつた。

いつも使つている自動販売機が故障中なのだ。

私は仕方なく、そこから一番近くにコンビニを手探した。

段々、体温が奪われていく気がする。

若い時なら、これくらいの薄着はどうといふ事はなかつたのだが、歳をとるとは一いつこう事なのか、と妙な感慨に耽つてしまつ。

コンビニに入る。

私の薄着は奇異なのか、それとも自意識過剰なのか、客の視線が集まっている気がしてしまった。

ついでに飲み物を買おうと思い、店の奥へと歩き出す。

その時、若い女性が買い物籠いっぽいにアイスクリームを入れているのを見かけた。

数が尋常ではない。十個どころではないだろう。カップのもの、棒のもの、モナカ系と様々。

三十個はあるのではないだろうか？

よく見ると、奇麗な女だ。大きくて黒目がちな瞳、高い鼻、魅惑的な厚い唇。

アイスクリームを好む女性が多い。

元妻も、夏は毎日食っていた。

そのせいかどうかわからないが、あいつは夏太りしていた。

それにしてもだ。数が多過ぎる。まさか、彼女一人で食べるのではないだろう。

もしそうだとしたら、あの細い身体は凄い。何故太らないのかと訊きたくなる。

それとも、大家族なのだろうか？ 家族全員がアイスクリーム大好き人間で、大量に買い込まないといけないと。

そんな事を空想しながら、私はあるメーカーの缶ビールを一本だけ冷蔵室から取り出した。

レジに進むと、さつきの美人が買い物籠を台の上に載せていた。

重そうだ。店員が思わず手を貸した程だった。

彼女の後ろにつくと長くなりそうなので、私は隣のレジを選んだ。

缶ビールを台の上に置き、タバコの番号を告げる。

そして、ズボンの尻のポケットに手を伸ばす。

血の気が引いた。財布を忘れた事に気づいたのだ。

いい大人が、財布を忘れたので商品を戻して帰るのか？

今度は恥ずかしさで顔がドンドン紅潮して行くのを感じた。

「お客様？」

レジの店員は不思議そうに私を見ている。

私は苦笑いして、頭を搔き、

「その、財布を落としたみたいで」

店員の顔が一瞬だけ、不機嫌そうになつた。

「私が立て替えましょうか？」

まだレジが終わらない「アイスの君」が言った。

私と店員はほぼ同時に、

「え？」

と彼女を見た。彼女は微笑んで、

「困った時はお互い様ですわ。どうぞ」

と千円札を私に差し出す。

「あ、遠慮なさいます。レジがつかえていますよ」

ハツとして後ろを見ると、一人の客がムツとした顔でこちらを見ていた。

「あ、はい、ありがとうございます」

私は「アイスの君」が貸してくれた千円で支払をすませ、脇にどいた。

そして、「アイスの君」のレジが終わるのを待つた。

しばらくして、ようやく支払をすませた「アイスの君」が大きく重そうなレジ袋を一つ提げて私に近づいて来た。

「どうもありがとうございました。お金をお返ししたいので、連絡

先を……」

私は恐縮しきりで尋ねた。すると「アイスの君」は、「それなら、このアイスを私の家まで運んで下さいな」

「あ、はい」

貴方は昔から美人に弱い。

元妻の言葉だ。

確かにそうかも知れない。

お近づきになりたいとは思わなかつたが、どこの誰なのかくらいは知りたかつたので、二つ返事だつた。

彼女の家は高層マンションだつた。二十階建てだ。

「それでも、たくさん買われましたね」

レジ袋の重さで、肩が悲鳴を上げそつたが、何とか作り笑顔で言つた。

「ええ。これから暑くなりますから、たくさん買つておかないと」

「アイスの君」の名前は、東海林慧璃茄。（しょうじ）（えりな） 随分と難しい字を書く名だが、何となくエキゾチックな彼女の雰囲気に似合つている。

「なるほど」

暑くなる？ まだ春先だぞ。随分気の早い人だな。

玄関で袋を渡して帰ろうと思つたが、

「是非、お茶でも」

と言われ、私も申し訳なさそうに中に入つた。

「突き当りがキッチンですから、そのテーブルの上に置いて下さい」

私は奥へと歩いて行き、テーブルの上にレジ袋を放り出すように置いた。

これで住んでいる場所がわかつたから、すぐにでも財布を取りに行つて、借りた金を返そう。

そう思つてキッチンを出ようとした時、

「ねえ」

と慧璃茄さんに後ろから抱きつかれた。

「貸したお金の返済方法、私が決めていいですか？」

むこうと何かが押しつけられる。彼女、細身の割には胸が大きいやつだ。

鼓動が高鳴る。呼吸も荒くなる。汗が噴き出す。

「は、はい」

嫌ですなどといふ返事はあり得なかつた。

「お風呂、先に入つて下さい。後から行きますから

耳元で囁かれ、身も心も湯けそ<sup>じゆ</sup>うだ。

私は言われるままに行動した。

キッチンを出て、バスルームに行く。

真昼の情事か。顔がにやける。

我が家との二ツバシとは大違いで、浴室は広々としている。

脱衣所でそそくさと服を脱ぎ、浴室に入る。

「あれ？」

風呂が沸いてゐるにじては、中はヒンヤリしていた。

「沸いてないのか？」

私は浴槽の蓋をじけた。

「え？」

そこには、大量のアイスクリームに埋もれるように、完全に息をしている様子がない裸の男が目を見開いて寝かされていた。

「ぐ！」

後頭部に硬いものが振り下ろされた。一瞬、意識が飛びそうになる。

私はよろけて、浴槽に倒れ込んだ。

背中に当たる冷たい塊。

「ほら、さつき貴方が運んでくれたアイスクリームよ。これで貴方の身体を冷やすの」

慧璃茄さんの声がした。

「夏が来る前に、よく冷やして頂くわ」

頂く？ 食べるのか、私を……？

大量のアイスクリームに埋もれたせいか、頭が働かない。

いざれにしても私はもつ……。

## 献血しませんか？

暇だ。

突然会社の厚生部から「有給休暇を消化して下さい」と言われ、取りたくもない休みを取った。

俗に言つ仕事人間に分類される俺は、急に休んでも何もすることはない。

女房とは半年前から別居していて、五歳の娘も「ママ」というだ。

俺は家にいても何も面白ことがないので、散歩に出た。

普段は忙しく通り抜ける町の風景も、じりじりしてゆっくりと歩きながら見ると、何故か新鮮だった。

へえ。あんなところにアイスクリーム屋があつたのか。

売り子の「コスチューム、なかなか色っぽいぞ……。

今度じっくりアイスを選んでみよう。

そんな感じで、何をするわけでもなく、何を買うわけでもなしに、俺は町をぶらついた。

随分と家から離れたところまで来たな、と思つた時、広場の片隅に献血の車が停まつてゐるのに気づいた。

「暇だから、してみるか」

俺はスタスタとそこに歩を進め、行列に並んだ。

行列と言つと大袈裟だが、並んでいるのは俺を含めて5人。

普通、献血の行列はもう少し多いと思ひ。

献血した事のない俺には、何とも判断がつかなかつたが。

しかも、俺の前に並んでいるのは、どう見ても献血より輸血が必要そうな人ばかりだ。

先頭にいるジイさんは、どう若く見積もつても70代だ。

その後ろの学生らしき男は、身長は高いが、あまりにも細く、栄養失調に見える。

三番目の中年のおばさんは、健康そうな体格だが、顔色が悪い。今にも倒れそうだ。

四番目、つまり俺のすぐ前にいるのは、O型らしき若い女性だが、学生風の男と同じで、痩せ過ぎだ。

違和感。

俺はそれを感じた。

しかし、遅かった。

手遅れだったのだ。

一体あれからどれほどの時間が経つたのだろうか？

俺はまだ行列に並んでいる。

俺の後ろには3人いる。

ジイさん、学生、おばさん。

前には〇〇の女性。

俺はあれから何度も献血された。

逃げ出しあうとしたが、どうした事か、献血車から離れられない。

俺達5人はもう何回も血を抜かれていた。

この先どうなるのか？

俺は眩暈がして倒れかけた。

すると看護師らしき服装の若い女が現れて言った。

「大丈夫ですか？ 少し休んだら、また並んで下さいね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7580i/>

---

神村律子自選短編集

2011年11月12日12時23分発行